

# 複合動詞後項における意味的抽象化に関する研究 - 移動動詞を中心に -

著者	王 秀英
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	11301甲第19402号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00129431">http://hdl.handle.net/10097/00129431</a>

博士学位論文

複合動詞後項における意味的  
抽象化に関する研究  
—移動動詞を中心に—

東北大学大学院文学研究科言語科学専攻

王 秀英

# 目次

## 序論

<b>第1章 複合動詞後項の意味的抽象化</b>	<b>1</b>
1.1 はじめに	1
1.2 意味的抽象化の基本概念	1
1.2.1 意味的抽象化、文法化と接尾辞化について	1
1.2.2 複合動詞後項の意味的抽象化について	3
1.2.3 意味的抽象化と意味拡張との関わり	4
<b>第2章 先行研究</b>	<b>5</b>
2.1 はじめに	5
2.2 複合動詞の先行研究の概観	5
2.2.1 複合動詞の分類に関する先行研究	6
2.2.1.1 寺村 (1969, 1984) について	6
2.2.1.2 長嶋 (1976) について	6
2.2.1.3 山本 (1984) について	7
2.2.1.4 森田 (1978) について	8
2.2.1.5 影山 (1993, 2013) について	9
2.2.1.6 松本 (1998) について	10
2.2.1.7 姫野 (1999) について	12
2.2.1.8 由本 (2005a) について	13
2.2.1.9 その他の先行研究について	14
2.2.2 複合動詞後項の意味的抽象化に関する先行研究	15
2.2.2.1 武部 (1953) について	15
2.2.2.2 山本 (1983) について	16
2.2.2.3 寺村 (1984) について	16
2.2.2.4 田辺 (1996) について	17

2.2.2.5 城田 (1998) について .....	17
2.2.2.6 日野 (2002) について .....	18
2.2.2.7 菊田 (2008) について .....	18
2.2.2.8 志賀 (2014) について .....	18
2.3 語彙的複合動詞の共通原則 .....	19
2.3.1 他動性調和の原則 .....	19
2.3.2 主語一致の原則 .....	20
2.3.3 非対格性優先の原則 .....	21
2.3.4 後項の意味的抽象化に関する共通原則について .....	23
2.4 動詞の分類 .....	25
<b>第3章 本研究の立場 .....</b>	<b>31</b>
3.1 はじめに .....	31
3.2 先行研究の問題点 .....	31
3.3 研究の対象 .....	32
3.4 研究の方法 .....	33
3.5 本論文における動詞の分類 .....	33
3.6 本論における複合動詞後項の意味的抽象化の傾向の捉え方 .....	36
3.6.1 複合動詞後項の意味的抽象化の傾向 .....	36
3.6.2 統語論の用語を援用する理由 .....	37
3.6.3 「副詞的」の規定 .....	38
<b>第4章 本研究の目的とその構成 .....</b>	<b>43</b>
4.1 はじめに .....	43
4.2 本研究の目的 .....	43
4.3 本論文の構成 .....	44
4.4 既発表論文との関係 .....	45

## 本論

### 第Ⅰ部 複合動詞後項における意味的抽象化のケーススタディー



## 第5章 日本語の複合動詞「～こむ」類と中国語の複合動詞

### － “～進/入” 類との対照研究－認知意味論からのアプローチ－... 47

5.1 はじめに.....	47
5.2 先行研究.....	48
5.3 認知意味論について.....	49
5.3.1 松本（2003）における比喻の定義.....	49
5.3.2 イメージ・スキーマ.....	50
5.4 今回の研究対象.....	50
5.5 「～こむ」と “～進/入” の意味分類.....	51
5.5.1 「～こむ」の表す意味合い及び意味ごとの統語的特徴.....	51
5.5.2 “～進/入”の表す意味合い及び意味ごとの統語的特徴.....	56
5.6 まとめ.....	57

## 第6章 上昇を表す複合動詞の日中対照研究－「～上げる」と「～上(shang)」

### を対象として－ ..... 59

6.1 はじめに.....	59
6.2 先行研究.....	60
6.3 研究対象及び研究方法.....	61
6.4 文法化における位置づけ.....	61
6.5 「～上げる」の意味的特徴及び文法化のプロセス.....	62
6.5.1 日本語複合動詞「～上げる」の意味と特徴.....	62
6.5.2 日本語複合動詞「～上げる」の文法化のプロセス.....	65
6.6 “～上”の分類、意味的特徴及び文法化のプロセス.....	68
6.6.1 中国語複合動詞“～上”の分類及び意味的特徴.....	68
6.6.2 中国語複合動詞“～上”の文法化.....	72
6.7 「～上げる」と “～上”の共通点と相違点.....	74
6.8 まとめ.....	76

## 第7章 複合動詞「～つける」の後項の意味について－本動詞との関連から－78

7.1 はじめに.....	78
7.2 先行研究.....	79
7.3 研究方法.....	82
7.4 考察.....	83

7.4.1	付着	84
7.4.2	副詞的修飾	85
7.4.2.1	動作の様態に焦点を当てるタイプ	86
7.4.2.1.1	動作の強さを表す	86
7.4.2.1.2	一方的・強制的行為	87
7.4.2.1.3	動作主の強い意志を示す	88
7.4.2.2	動作の結果に焦点を当てるタイプ	89
7.4.2.2.1	対象物の状態変化の焦点化	89
7.4.2.2.2	主体の位置変化の焦点化	90
7.4.2.2.3	対象物の獲得	90
7.4.3	習慣的動作・行為	91
7.5	まとめ	91

## 第8章 複合動詞後項における意味的抽象化 95

8.1	はじめに	95
8.2	先行研究	96
8.2.1	複合動詞一般	96
8.2.2	複合動詞後項における意味的抽象化と文法化	96
8.3	考察対象と分析方法	99
8.4	考察	100
8.4.1	第一段階	101
8.4.2	第二段階	101
8.4.3	第三段階	102
8.4.4	第四段階	103
8.5	考察の結果	104
8.6	まとめ	106

## 第Ⅱ部 複合動詞後項における「副詞的修飾」について

### 第9章 強調を表す複合動詞後項の成立要因についてー「～こむ」と「～きる」を対象としてー 107

9.1	はじめに	107
9.2	先行研究	108

9.3	研究方法と強調を表す複合動詞後項の位置づけ	109
9.4	強調を表す複合動詞後項「～こむ」「～きる」の前項	110
9.4.1	前項動詞の種類	110
9.4.2	「こむ」と「きる」両方とも結合できる前項動詞	112
9.4.3	「冷えこむ」と「冷えきる」の特徴	113
9.5	「～こむ」と「～きる」の前項動詞及び派生関係	115
9.5.1	複合動詞「～こむ」の前項動詞及び派生関係	115
9.5.2	複合動詞「～きる」の前項動詞及び派生関係	118
9.5.3	複合動詞「～こむ」と「～きる」の比較	119
9.6	まとめ	119

## 第10章 複合動詞の後項が前項を副詞的に修飾する場合－「～こむ」を対象として－

10.1	はじめに	121
10.2	先行研究	122
10.3	複合動詞「～こむ」の用法	124
10.3.1	「内部移動」の用法	124
10.3.2	「程度進行」の用法	126
10.3.3	「～こむ」に見られる後項が前項を意味的に修飾する用法	128
10.3.4	複合動詞「～こむ」の新しい分類	130
10.3.5	複合動詞「～こむ」の後項動詞の文法化	131
10.4	まとめ	134

## 第11章 複合動詞後項における副詞的意味のあり方について－「一つける」の場合－

11.1	はじめに	136
11.2	先行研究	137
11.3	後項が前項を副詞的に修飾する複合動詞の位置づけについて	138
11.3.1	複合動詞の分類について	139
11.3.2	右側主要部の規則について	140
11.4	考察	142
11.4.1	「一つける」の分類	142
11.4.2	複合動詞後項に含まれる副詞的意味のあり方	146

11.5 まとめ .....	148
----------------	-----

## 結論

第12章 終章 .....	150
12.1 本論文の分析結果 .....	150
12.1.1 第Ⅰ部の分析結果 .....	150
12.1.2 第Ⅱ部の分析結果 .....	152
12.1.3 移動を表す複合動詞後項における意味的抽象化の傾向 .....	153
12.2 本論文の意義 .....	154
12.2.1 複合動詞研究における意義 .....	154
12.2.2 対照研究における意義 .....	155
12.3 今後の課題 .....	155
12.3.1 複合動詞研究における課題 .....	155
12.3.2 対照研究における課題 .....	156
12.3.3 文法化における課題 .....	156
参考文献 .....	158
用例出典 .....	169
あとがき .....	171

## 凡例

- (1) 本論文では、例文及び脚注は各章ごとに番号を振り直す。
- (2) 本論文では、「\*」で示す例文が非文法であること、「?」で示す例文が文法的に不自然であること、「#」で示す例文はその文脈に合わない解釈であることを表す。また例文出典が示されていないものは作例である。

# 序 論

# 第 1 章

## 複合動詞後項の意味的抽象化

### 1.1 はじめに

本論文は現代日本語における複合動詞後項の意味的抽象化についての研究である。本論文の導入として、本章ではまず意味的抽象化という概念及び複合動詞後項の意味的抽象化について説明し、本論文の分析の視点を提示する。

### 1.2 意味的抽象化の基本概念

#### 1.2.1 意味的抽象化，文法化と接尾辞化について

本論文でいう「意味的抽象化」という概念について、説明しておく。また、それと関連しているものとしては、「文法化」と「接尾辞化」といった概念が挙げられる。

まず、「抽象」について、『日本国語大辞典 第二版』（2001:1466）では、以下のよう  
に記述されている、「ある認識の仕方をするために、いろいろな表象や概念から特  
定の性質や状態だけを抜き出すこと。」

「意味的抽象化」とは、ある言葉の意味のある特定の要素が抜き出されることによ  
って、その言葉の意味が具体的から抽象的になることである。例えば、「牛」「羊」「ア  
ヒル」などを抽象化すると、「動物」ということになる。

「文法化」について、『明解言語学辞典』では以下のように定義されている。

- (1) 具体的な意味を持つ開いた類に属する語彙的な要素 (lexical item) が、抽  
象的な意味を持つ閉じた類に属する文法的な要素 (grammatical item) に、  
またはすでに文法的な要素がさらに文法的性質の強い要素に変化する現象。

これについて、「隠喩，換喩，推論といった認知方略が文法化の重要な原動力となっており，その共通性から文法化に見られる普遍的傾向が生じる」ということも指摘されている（『明解言語学辞典』2015：011）。文法化の二側面について，三宅（2005：62-63）では，「文法化には，二つの異なった側面が存在する。一つは，実質的な意味が抽象化，希薄化，あるいは消失する，という意味的な側面である。（中略）他の一つは，自立性を失い，専ら文法機能を担う要素になる，という形態・統語的な側面である」と述べている。

「接尾辞」は，接辞のうち，語基の後ろにつくものである。黄（2004）は，プロトタイプ的な接尾辞について，以下のようにまとめている。

- (2) I 語を派生する接尾辞のことである。
- II 語彙部門で派生することが基本的である。
- III 語の主要部を担当する。すなわち，その派生語の品詞性を決める働きを持つものである。
- IV 強いか弱いかに関わらず，造語力がある。
- V ほかの語構成要素と比べると，語彙的意味は一段と抽象度が高い。

（黄 2004：29）

「接尾辞」については，先行研究には，助詞・助動詞を接尾辞の一種として扱うものもあるため，その範囲は必ずしも明らかであるとは言い切れない。また，黄（2004）は，複合動詞後項「-こむ」の一部（「勢いこむ」，「咳きこむ」など）を「動詞性接尾辞」として扱っている。黄（2004：100）では，「「意気込む，勢い込む，咳き込む，尻込む」は，「内部移動」というよりも「程度進行」の意味合いをもつと考えられる」と指摘しているが，この場合の「程度進行」が複合動詞の場合（「考え込む」など）の「程度進行」と比べて，抽象度がどれくらい高いかについて説明していないため，この場合の後項を接尾辞として扱う妥当性については疑問に思われる。

三宅（2005）では，「文法化に関する研究は，動的に変化を捉えようとするものが主流で，有効性が認められている」と指摘している。また，よく言われるように，文法化というのは歴史的視点から言語の変化を扱う通時的研究が多く，共時的研究を行うものが少ないのが現状である。本論文では，複合動詞後項における文法化を考察する際，通時的研究と見られやすい「文法化」という用語の代わりに，「意味的抽象化」

という用語を使って、複合動詞後項における意味的抽象化について論じることにする。

### 1.2.2 複合動詞後項の意味的抽象化について

本論文で言う複合動詞は、形態上で2つの動詞要素からなり、前項動詞（以下V1）の連用形に後項動詞（以下V2）が続く複合語を指す。例えば、「押し開ける」、「殴り倒す」などがそれに当たる。ここで言う「後項」は「複合動詞の後項動詞（V2）」の略称である。「前項」も同じように、「複合動詞の前項動詞（V1）」を指す。

また、本論文で言う「複合動詞」というものは、「動詞連用形＋動詞」（V1＋V2）に限り、「動詞連用形＋て」（「叩いて開く」など）は研究対象から除外することを断っておく。先行研究についても同様に扱っているものが多い。

複合動詞には、「蹴り上げる」、「褒め上げる」、「存じ上げる」があり、それぞれ「蹴って、対象物を上へ移動させる」、「盛んに褒める」、「（目上の人について）その人やその人に関係する事柄を知っている」という意味を表し、同じ後項「－あげる」でも、違う前項動詞と結びつくことによって、後項の表す意味も異なってくることが窺える。

例えば、「ボールを蹴り上げる」の場合、「ボールを蹴る、ボールを上げる（上へ移動させる）」のように、前項動詞と後項動詞はいずれも対象物（ボール）を格に取り、後項「－あげる」には、本動詞「上げる」の「対象物を上へ移動させる」という意味がそのまま残っていることがわかる。「社長は優秀なスタッフを誉め上げた」の場合、「社長は優秀なスタッフを褒める」は言えるが、「\*社長は優秀なスタッフを上げる」は言えないため、前項動詞のみ対象物「スタッフ」の格を取って、後項は取らない。この場合、後項「－あげる」には、前項を何らかの面で修飾したり、補足したりした働きを持っていると言える。また、「私は彼を存じ上げています」の場合、「彼を存じています」は言えるが、「彼を上げる」は言えない。対象「彼」に関わるのが前項動詞「存じる」の方のみである。この場合の「－あげる」は社会的対人関係を表示する役割を果たしているものであり、具体的な意味を失って、特別な敬語的機能として捉えられると言える。このように、同じ後項を持っている複合動詞でも、前項動詞によって、本動詞「上げる」の意味をそのまま保持している場合もあり、動詞の意味が薄くなって、前項動詞を修飾したり、補足したりする意味になったものもあり、特別な機能のみを持つようになるものまで、意味が抽象化している現象が見られる。

複合動詞「～あげる」以外、他に「～あがる」、「～こむ」、「～つける」、「～だす」、「～かける」、「～ぬく」などのような生産性の高い複合動詞にも、意味的抽象化の現象が見られる。詳しい分析は後述する。



### 1.2.3 意味的抽象化と意味拡張との関わり

前述したように、ここで言う「意味的抽象化」は具体的意味が薄くなって、抽象的意味になることを指す。具体的にいうと、複合動詞の後項として、本動詞の意味が薄くなって、ある文法機能（後述するように「アスペクト的意味」、「副詞的意味」など）のみを表したりするものを指す。ある言葉の意味が抽象化したという場合、元の意味との間にある共通している要素が存在すると思われる。

「意味の拡張」について、『明解言語学辞典』では、次のように述べられている。

- (3) 語の意味の範囲が広がる変化を意味の拡張と言う。（中略）意味が拡張または変化していく過程で比喻の果たす役割は大きい。

（『明解言語学辞典』2015：011）

「意味の拡張」は認知意味論の視点から同じ言葉の持っている異なる意味間の関連性を論じることである。認知意味論では、ある単語がいくつかの意味を持つこと、すなわち意味の拡張には人間の身体的経験が背景になっており、また基本義と拡張義との間には関連性があると考えている。認知意味論のメタファー、メトニミ、シネクドキーの三つの比喻を用いれば、一つの語の持つ異なる意味同士の関連性を明らかにすることが可能である（山梨 2000 を参照）。ある言葉の意味が拡張した場合、元の意味との間にある共通している要素が存在しているからだと思われる。

第5章で論じる「意味拡張」は認知意味論の視点から複合動詞における後項動詞の意味の派生を考察するものである。「意味的抽象化」から論じる視点と違うものの、いずれも同じ後項動詞の意味間の共通点を取り出して、関連性を考察するものである点は同じだと考えられる。

また、本論文は、日本語複合動詞後項の意味的抽象化を論じるもので、日本語複合動詞の特徴をよりよく観察できるように、中国語複合動詞との対照を視野に入れて考察を行なっているものもある。具体的に第5章と第6章で述べている。

## 第 2 章

### 先行研究

#### 2.1 はじめに

本章では、複合動詞後項の意味的抽象化に関連する先行研究及び動詞の分類について紹介する。

#### 2.2 複合動詞の先行研究の概観

複合動詞について、今までいろいろ議論されている。周知のように、日本語複合動詞には数が多く、「一開始める」、「一終わる」、「一合わせる」などのような生産性の高いものから、「叩き開ける」、「踏み固める」、「振り返る」などのように、生産性が低く、単語ごとに辞書に登録する必要があるものまでいろいろなタイプがある。複合動詞の分類についても、先行研究でいろいろな視点から行われている。本論文の考察対象である複合動詞は先行研究の中でどのような位置付けになるのか、まず複合動詞の分類について先行研究を概観しておく必要がある。例えば、2.2.1.1 節に示すように、寺村（1984）は複合動詞を「V-V」、「V-v」、「v-V」、「v-v」という 4 つのタイプに分けている。本論文の考察対象は「V-V」と「V-v」2 つのタイプにまたがっている。また、2.2.1.5 節で述べるように、影山（1993）は、複合動詞を「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」に 2 分類している。本論文の考察対象である複合動詞は影山（1993）の「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」にまたがっている。さらに、任意の二つの動詞を組み合わせることによって、必ずしも複合動詞になるとは限らない。それぞれの結合において、決まった規則が働いている。V1 と V2 はどのような規則に従って結合しているのかについて、先行研究ではいろいろな視点から分析されている。この点についても先行研究を概観し、本論文の研究対象がこれらの規則に当てはまるかど

うかを検証してみる。

## 2.2.1 複合動詞の分類に関する先行研究

### 2.2.1.1 寺村（1969, 1984）について

寺村（1969, 1984）では、構成要素である動詞の本来の意味が複合動詞の中でも保持されているものを V（自立 V）とし、保持されていないものを v（付属 V）として、複合動詞を以下のように 4 種類に分けている。

#### (1) 寺村（1969, 1984）の複合動詞の分類

- a. V-V: 呼び入れる, 握りつぶす, 殴り殺す, ネジ伏せる, 出迎える…
- b. V-v: 降り始める, 呼びかける, 思ひ切る, 泣き出す, …
- c. v-V: さし出す, 振り向く, 打ち立てる, 引き返す, ……
- d. v-v: 払い下げる, (話を) 切り上げる, (仲を) 取り持つ, (芸を) 仕込む, とりなす, ……

(寺村 1984 : 167)

寺村（1984）の分類は示唆的であるが、「自立 V」と「付属 V」の判定基準については明確に示されていない。また、b 類とされる「降り始める」には「開始」という本来の意味が生きているが、「雨が降り始める」という場合は、「雨が降ることを始める」という統語的構造に対応しないので、「独立して使われる時の意味を失う」とは言い切れない。その意味の保持をどこまで認めるかという問題があると思われる（姫野 1999 : 11-13 を参照）。

### 2.2.1.2 長嶋（1976）について

長嶋（1976, 斎藤・石井（編）1997 に再録）は、以下の（2）の基準を用いて、複合動詞を（3）のように 2 つに分けている。

#### (2) I 類「N が（を・に）V2」と言えるもの。

例えば、「(木を) 切り倒す」, 「(町内を) 見廻る」, 「(木に) よじのぼる」等。

II 類「N が（を・に）V1」とは言えるが、「N が（を・に）V2」とは言えないもの。

例えば、「（本を）読み通す」、「（犬が子供に）噛みつく」、「（インクが紙に）しみこむ」等。

(3) I 類 v1+V2(修飾要素+被修飾要素)

II 類 V1+v2(被修飾要素+修飾要素)

(長嶋 1976, 斎藤・石井(編) 1997 : 217-219)

長嶋(1976)は明確な分類基準を設定しているのが優れているところだと思われる。しかし、長嶋自身も述べているように、上記の 2 分類以外、「泣き叫ぶ」のような対等関係の複合動詞及び「繰り返す」のような V1 と V2 に分けられない「熟語動詞」(長嶋 1976 : 78) もあるが、それらの位置付けは明らかになっていない(斎藤・石井(編) 1997 : 解説編も参照)。

### 2.2.1.3 山本(1984)について

山本(1984)は V1 と V2 の格支配から複合動詞を以下の (4) のように分類している。

(4) I 類 : 複合動詞の格成分が V1 と V2 のそれぞれと対応関係にある。

泣き叫ぶ, 光り輝く, 抱きかかえる, 噛み砕く, 泣き腫らす, 刺し通す, 持ち帰る, 降り積もる, 降り続く, 売り歩く, …

II 類 : 格成分は V1 とは対応関係を示すが, V2 とは対応しない。

静まり返る, 走り通す, 沸き立つ, 読み始める, 住み込む, 降り出す, 読み始める, 食べ過ぎる, 書き終わる, …

III 類 : 格成分は V2 とは対応関係を示すが, V1 とは対応しない。

打ち重ねる, 差し迫る, 打ち破る, 取り掛かる, 取り澄ます, 引き起こす, 振り仰ぐ, 差し挟む, …

IV 類 : 格成分が V1 と V2 のいずれとも対応関係を示さない。

取り乱す, 繰り返す, 取り締まる, 打ち明ける, 引き立つ, 打ち切る, 打ち解ける, …

(山本 1984 : 45-46 をもとに作成)

山本（1984）は、構成要素である動詞の格支配能力をテストすることによって分類基準を明確にしたことが利点であるが、山本（1984）自身も認めるように、この分類は本質的に寺村とあまり変わらない。

#### 2.2.1.4 森田（1978）について

森田（1978, 森田 1994 に再録）は、量的分布から、V1 と V2 になりやすい動詞を調査している。V1 と V2 の語義結合によって複合動詞を以下（5）のように5段階に分けている。

(5) 第1段階：並列関係（V1 と V2 が対等の関係で並列する）

例：追いつがる，燃え移る，押し開ける，踏み固める，より集める，言い当てる，照り輝く，鳴り響く，遊び暮らす……

第2段階：主述，補足の関係（V1 と V2 が「が，に，を」格の関係を構成する）

例：思い余る（思うことが余る），見飽きる（見ることに飽きる），書き誤る（書くことを誤る）

第3段階：具体的意味から抽象的意味へ（一方の動詞が本義から離れて，転義的に用いられる）

例：降りだす，書きあげる，走りぬく，やりつける，歩くとおす，言いか  
ねる，…

第4段階：造語成分への移行（V2 が独立した動詞として用いられない）

考えあぐねる，言いそびれる，言いならわす，…

第5段階：実質的意味から形式的意味へ（実質的意味を失い，形式化されてしまう）

叱りとばす，わめきたてる，どなりちらす，かき曇る，おし進める，…

（森田 1994：289-294 をもとに作成）

森田（1978）は日本語教育の視点から、V1 と V2 になりやすいものを考察している点が教育現場では非常に有益だと考えられる。

### 2.2.1.5 影山（1993, 2013）について

影山（1993）は生成文法の立場から複合動詞の「派生過程の違い」に着目し、複合動詞を「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」に2大別している。

#### (6) A 類 語彙的複合動詞

飛び上がる, 押しひらく, 泣き叫ぶ, 売り払う, 受け継ぐ, 解き放す,  
飛び込む, (隣の人に) 話しかける, こびり付く, 飲み歩く, 歩き回  
る, 踏み荒す, 褒め讃える, 語り明かす, 聞き返す, 震え上がる, 呆  
れ返る, 持ち去る, 沸き立つ

#### B 類 統語的複合動詞

払い終える, 話し終る, 喋り続ける, 食べ過ぎる, 食べ損なう, 助け  
合う, 動き出す, 食べかける, 喋りまくる, 走り抜く, 数え直す, 見  
慣れる, 登り切る, やりつける

(影山 1993 : 75-76)

A 類と B 類はいずれも「形態的緊密性」という性質を備えているとされる。

#### (7) A 類 : \*飛びモ上がる, \*泣きモ叫ぶ, \*歩きモ回る

B 類 : \*食べモ続ける, \*喋りモまくる, \*食べモかける

(影山 1993 : 76)

語は形態的なまとまりを構成するから、その内部に統語的な要素を介入させることは許されない、とされている。

#### (8) A 類 : \*その夜, 兄は神戸で飲み~~歩き~~, 弟は大阪で食べ歩いた。

B 類 : \*ちょうど同じ時に, 姉は本を読み~~終え~~, 妹はレポートを書き終えた。

(影山 1993 : 77)

上の (8A, B) は、「兄は神戸で飲み」、「姉は本を読み」の部分がそれだけでまとまった節を構成するという解釈なら適格であるが、「歩き」ないし「終え」が省略されたという読みでは成立しない。従って、A 類の「飲み歩く」と B 類の「読み終える」はいずれも表面上、語であることが証明される、と説明されている。

語彙的複合動詞と統語的複合動詞の判断については、次のようなテストで判定するとされている。

(9) ①代用形「そうする」との置換可否

A 類：不可 私が飲み歩く→\*彼もそうし歩く

B 類：可 私が飲み始める→彼もそうし始める

②主語尊敬語の可能性

A 類：不可 手紙を受け取る→\*お受けになり取る

B 類：可 電車に乗り損ねる→お乗りになり損ねる

③受身形の可能性

A 類：不可 書き込む→\*書かれ込む

B 類：可 名前を呼び始めた→名前が呼ばれ始めた

④サ変動詞の使用可否

A 類：不可 壁にポスターを貼り付ける→\*壁にポスターを接着し付ける

B 類：可 徹夜で見続ける→徹夜で見物し続ける

⑤重複構文の可能性

A 類：不可 探し歩く→\*探しに探し歩く

B 類：可 鍛えぬく→鍛えに鍛え抜かれた身体

(影山 1993 : 80-92 をもとに作成)

影山 (2013) は「V1 て, V2」の言い換えが可能かどうかというテストを用いて、従来「語彙的複合動詞」に分類された「①手段, ②様態, ③原因, ④並列, ⑤補文関係, ⑥副詞的」といった下位分類を新たに「主題関係複合動詞 (従来の①~④)」と「アスペクト複合動詞 (従来の⑤と⑥)」に 2 つに下位分類し、「アスペクト複合動詞」について、その性質が「主題関係複合動詞」と違って、意味の重点が V2 ではなく、V1 の方に置かれていると説明している。また、「アスペクト複合動詞」について、「時間的なアクティオンスアルト (完了・変化結果の強調・開始ないし開始の試み・継続・反復, 多回性, 習慣・動作の強調・複数事象の相互関係・行為の不成立)」、「空間的なアクティオンスアルト」、「人称的なアクティオンスアルト」に分けている。

## 2.2.1.6 松本 (1998) について

松本 (1998) は語彙的複合動詞を次のように分類している。

- (10) a. 前項が後項の手段を表すもの（押し倒す、叩き落とす、など）  
前項は全て動作主的動詞であり、また、後項は何らかの状態/位置変化の使役を表す動詞である。手段とは、使役者がその使役を達成させるための一段階として行う具体的な行為である。
- b. 前項が後項の様態・付帯状況を表すもの（駆け登る、流れ落ちる、など）  
様態・付帯状況が主要な出来事と同じ期間に継続するものでなければならないという「時間的共起性の条件」がある。
- c. 前項が後項の原因を表すもの（降り積もる、読み疲れる、など）  
結果を表す後項が非動作主的でなければならない。語彙的使役においては、原因となる出来事が、結果となる出来事の発生と進行を完全に決定できるものでなければならないという「決定的使役の条件」がある。
- d. 前項動詞を意味的主要部とするものⅠ：比喩の様態（咲き誇る、泣き狂う、など）  
後項が前項で表された事象の様態を表し、「あたかも V2 するかのように、V1 する」ということを意味する。
- e. 前項動詞を意味的主要部とするものⅡ（晴れ渡る、叱りつける、など）  
前項動詞が意味の主要部であり、後項動詞が特定の意味を前項動詞の意味構造の中に加えている。
- f. 前項が後項の背景的情報を表すもの（食べ残す、売れ残る、など）  
後項動詞を意味的主要部とし、前項動詞が後項動詞の背景を具体的に表している。

（松本 1998：52-66 をもとに作成）

松本（1998）の分類は影山（1993）の分類と少し異なるところがあるが、手段、様態、原因の3つの分類は共通していることがわかる。（10d）（10e）は、影山（1993）、由本（2005a）では「補文関係」として分析されている。また、（10f）の例も補文関係として解釈し得る。（10d）（10e）と（10f）は影山（2013）では「アスペクト語彙的複合動詞」のタイプに属させている。



## 2.2.1.7 姫野（1999）について

姫野（1999）は、影山（1993）などの先行研究を踏まえた上で、「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」をそれぞれ以下のように下位分類している。

### (11) 姫野（1999）「語彙的複合動詞」の下位分類

#### A. 二つの動詞を使ってそのまま言い換えられる

##### (a) 並列関係：「～して～する」

「～したり～したりする」

「して、その結果すなわち～する（ことになる）」等

継起：流れ着く→流れて（流れてから）着く

手段・原因：縫い付ける→縫って（縫うことにより）つける

焼け死ぬ→焼けて（焼けることにより）死ぬ

付帯状況：遊び暮らす→遊んで（遊びながら）暮らす

並起：泣き叫ぶ→泣いたり叫んだりする

類似：書き記す→書いてその結果、すなわち記す（ことになる）

##### (b) 比喩的關係：「～するようにして、～する」（書き殴る）

##### (c) 主述・補足の関係：「することが～する」（有り余る，飲み足りる）

「することを～する」（出し惜しむ，鳴き交わす）

#### B. 後項動詞を他の言い方にしなければならない

投げ込む→投げて，中に入れる

投げつける→投げて，対象物に強く当てる

震え上がる→すっかり震える

#### C. 前項動詞を他の言い方にしなければならない

打ち切る→継続状況を途中で切る（＝終了する）

引き継ぐ→あとを継いで継ぐ

さしつける→押してつける

#### D. 二つの動詞とも他の言い方にしなければならない

落ち着く，取りなす，寝る（しつける）

### (12) 姫野（1999）「統語的複合動詞」の下位分類

#### A. 二つの動詞がそのまま言い換えられる

##### (a) 並列関係（なし）

(b) 比喩的關係 (なし)

(c) 主述, 補足の關係: ~することが/を/に~する

主述: 働き過ぎる→働くことが過ぎる (=過度だ)

補足: 歩き始める→歩くことを始める

歩き慣れる→歩くことに慣れる

B. 後項動詞を他の言い方にしなければならない

降り始める→降ることが始まる

食べつける→食べることに慣れ親しむ

言いかける→言いそうになる/少し言うが, 途中でやめる

話し合う→互いに話す

(姫野 1999 : 19-23 をもとに作成)

また, 姫野 (1999) は日本語教育の観点から, 生産性の高い V2 を取り上げて, それぞれの複合動詞の意味と用法について詳しく考察している。

#### 2.2.1.8 由本 (2005a) について

由本 (2005a) は, 語彙概念構造<sup>1</sup> (Lexical Conceptual Structure, LCS) を用いて語彙的複合動詞について以下のように述べている。

(13) 由本 (2005a) 「語彙的複合動詞」について

a. 並列關係

変項の同定が二つの LCS 内で同じ意味役割を持つもののみ可能であり, また, アスペクト素性も同一である類義語の合成以外は容認されにくい。

b. 付帯状況・様態

V1 は継続相として解釈できるものに限られる。

c. 手段

意図的行為を表す動詞 (CONTROL 関数で表される LCS をもつもの) の組み合わせに限られる。

d. 因果關係

V2 は非意図的事象を表す非対格動詞に限られる。

e. 補文關係

V2 は事象 (EVENT) を項としてとる他動詞または非対格自動詞に限る。

(由本 2005 : 130-131)

## 2. 2. 1. 9 その他の先行研究について

上記以外、石井 (1983a, 1983b, 1992) などの研究は、量的分布から複合動詞の前項と後項の種類を考察し、複合動詞の内部構成を「過程結果構造」と分析している。これは複合動詞の研究に新たな視点を提供したものである。

上の先行研究は V1 と V2 の関係を詳しく分析することによって複合動詞を考察したものである。斎藤 (1992) は、以上の研究と異なり、従来見過ごされてきた前項動詞の音便系と非音便系の意味関係から考察している。それについて以下のような指摘がある。

- (14) ①前項動詞が音便系になるものに、必ずしも（現代語では）非音便系が存在しない場合がある。

[非音便系]	[音便形]
*突き走る	突っ走る
*踏みはる	踏んばる
*ひきつく	ひつつく
*やりつける	やっつける
*追いでる	おんでる

- ②前項動詞が音便形と非音便形の両方の形を持っていたとしても、意味的關係は同一とは限らず、複雑である。

〈a〉 意味範囲の一致するもの：追いつく＝追つつく

追い出す＝追ん出す

〈b〉 非音便形が音便形より意味範囲が広い：とりつく＞とつつく

踏みつける＞踏んづける

掻きだす＞掻いだす

〈c〉 音便系が非音便形より意味範囲が広い：具体例なし

〈d〉 意味範囲が部分的にのみ重なる：押しつける≒押つつける

引きかける≒引っかける

〈e〉 意味範囲が全く重ならない：引きつける≠引つつける

掻き込む≠掻い込む

斎藤 (1992) では、〈b〉のタイプが最も多く、〈e〉が最も少ないと説明されている。

陳 (2013) は語彙意味論 (Lexical Semantics) の立場から、複合動詞の語形成メカニズムを V1 と V2 の語彙概念構造 (LCS) の合成と考え、合成した LCS から項構造に連結するというメカニズムを想定し、またクオリア構造<sup>2</sup>を導入し、LCS とクオリア構造の合成で複合動詞の分類間の連続性を分析した。

ほかに、Tagashira(1978)は日本語複合動詞の内部的意味構造について詳しく論じている。何 (2010) は日本語教育の視点から、語彙的複合動詞の主要な 5 分類 (手段, 様態, 原因, 並列, 補文関係) を詳しく記述し、分析している。

また、計量的研究として、野村・石井 (1987) の『複合動詞資料集』があり、V1 と V2 の動詞別の出現頻度によってリストアップしたものである。意味記述はしていない。

## 2.2.2 複合動詞後項の意味的抽象化に関する先行研究

本節では、本論文の研究と直接に関連している複合動詞後項の意味的抽象化についての先行研究を概観するものである。複合動詞後項の「意味的抽象化」に関係のあるものは、先行研究では、「文法化」、「接尾辞的なもの」、「補助動詞的なもの」などの用語を用いて考察されている研究である。

### 2.2.2.1 武部 (1953) について

武部 (1953) は本論文で言う抽象的な複合動詞後項を「複合動詞における補助動詞的要素」として扱い、以下のように 3 つに分けている。

(15) 一. 強意的意味を添えるもの……呆れかへる, 投げつける

二. 動作の方向を示すもの……積みこむ, 逃げだす

- ①相互 (「語り合ふ」など) ②交錯 (「走り重なる」など) ③充満 (「燃え広がる」など) ④一致 (「出そろふ」など) ⑤彷徨 (「乗り歩く」など) ⑥対向 (「吠えかかる」など) ⑦接着 (「思ひあたる」など) ⑧到達 (「思ひ至る」など) ⑨付加 (「書き加へる」など) ⑩侵入 (「飛び入る」など) ⑪貫通 (「見通す」など) ⑫下向 (「飛びおりる」など) ⑬上向 (「立ち

あがる」など) ⑭退去(「逃げ落ちる」など) ⑮分離(「聞き流す」など)

三. 動作の起り方を示すもの……読みきる, 飛びそこなふ, 思ひそめる,  
乗りつづける

①開始(「思ひ起す」など) ②継続(「乗り続ける」など) ③変化(「燃え盛る」など) ④習慣(「持ちつける」など) ⑤完遂(「読み切る」など)  
⑥中止(「売り余す」など) ⑦失敗(「書き損じる」など) ⑧再行(「書き改める」など) ⑨難易(「言ひ洩る」など) ⑩過不足(「食ひ過ぎる」など)

(武部 1953 : 473-476 をもとに作成)

武部(1953)には, 現代語であまり使われないようなものや「～して～する」と言い換え可能な典型的な語彙的複合動詞(書き加える, 降り来る)なども混在している(姫野 1999 : 27 も参照)。

主な後項動詞の意味分類について, 先行研究には以下のようなものがある。以下, それぞれの分類のみを挙げて, 具体例は省略する。

#### 2.2.2.2 山本(1983)について

- (16)
1. アスペクト的要素 : 始発(「食べ始める」), 継続(「歩き続ける」), 終了(「書き終わる」), 完遂(「飲みきる」), 習慣(「食べ付ける」)
  2. 方向性を示す要素 : 上方(「撫で上げる」), 下方(「掘り下げる」), 外部(「突き出る」), 内部(「逃げ込む」), 周囲(「歩き回る」)
  3. 様態を示す要素 : 程度(「食べすぎる」), 態度(「書き散らす」), 複数主体(「殴り合う」)
  4. 錯誤を示す要素 : 失敗(「読み間違う」), 修正(「読み直す」), 躊躇(「食べかねる」), 残存(「売れ残る」)

(山本 1983 : 342-343 をもとに作成)

#### 2.2.2.3 寺村(1984)について

寺村(1984)は, 日本語のアスペクトを「一次のアスペクト」, 「二次のアスペクト」と「三次のアスペクト」に分けている。そのうち, 「スル(未然)とシタ(已然)」を「一次のアスペクト」の範囲に, 「テ形に後接する補助動詞」を「二次のアスペクト」

の範囲に、「動詞連用形＋動詞」(複合動詞)を「三次的アスペクト」に属させている。

複合動詞について、2.2.1.1 節に示したように、4 つのタイプに分類している。そのうち、「自立 V＋付属 v」について、次の (17) のように分けている。

- (17) 1. 時間的相：開始（「～はじめる」など）、継続（「～続ける」など）、終了（「～終わる」など）
2. 空間的相：上と下への動きの方向（「～上げる」など）、内と外（「～こむ」など）、周囲への方向（「～回す」など）、ある目標に向かっての動き（「～かける」など）
3. 密度、強度の相（心理的相）：程度、密度、強さ、完成など（「～ぬく」など）

（寺村 1984：174-183 をもとに作成）

#### 2.2.2.4 田辺（1996）について

田辺（1996）は、本動詞の辞書的意味が複合動詞形成後どの程度生きているかによって、複合動詞を「意義素融合型（拾い上げる）」、「前項動詞が接頭辞化しているもの（取り決める）」と「文法化型（作り上げる）」の3つに分け、この中の「意義素融合型」と「文法化型」の双方の型を有する複合動詞「～こむ」「～きる」「～ぬく」「～あげる/あがる」を対象として、文法化の2つの判断基準（①後項動詞の自・他の区別が複合動詞の自・他を拘束するか、②内の関係の連体修飾節内の複合動詞が動詞的述語となるか性状規定となるか）を用いて、意義素融合型（文法化の第1段階）と文法化型（文法化の第2・3段階）に属する各段階の複合動詞の文法的特徴を考察している。

#### 2.2.2.5 城田（1998）について

- (18) 1. 動作相 (1) 段階相：始まりの段階相：開始相，不完全起動相（「書き始める」など）
- 終わりの段階相：終結相，停止相，完成相，継続相（「書き終える」など）
- (2) 状態相：習慣相，旺盛・強化相，再行・修正相，添加相，充足・倦厭相，不首尾相，渋滞・躁急相（「使い慣れる」

など)

(3) 過剰相 (「食べ過ぎる」など)

2. 可能態 (「～得る」, 「～兼ねる」など)

3. 願望態 (「～たがる」など)

4. 相互態 (「～合う」など)

(城田 1998 : 142-154 をもとに作成)

また, 文法化の視点から個別の複合動詞について考察を行った先行研究には日野 (2002), 菊田 (2008) と志賀 (2014) がある。

#### 2.2.2.6 日野 (2002) について

日野 (2002) は日本語複合動詞「-出す」の意味用法の連続性についての文法化の観点から, 「-出す」の意味を分類した上, 「空間的移動」から「アスペクト (動作の開始・完了)」への意味抽象化について記述している。

#### 2.2.2.7 菊田 (2008) について

菊田 (2008) は複合動詞「V かかる」と「V かける」の始動用法を文法化と捉えて, その様相を歴史的視点から始動用法の発生とその理由について考察を行った。本論文の共時的視点と異なるため, ここでは割愛して, 詳しく紹介しないことにする。

#### 2.2.2.8 志賀 (2014) について

志賀 (2014) は 複合動詞「～切る」を対象とし, 出現数や前項動詞のバリエーション, 可能形式や否定形式, 副詞的用法を考察し, その文法化について判断できる可能性を示している。考察の結果, 複合動詞「～切る」の意味を①切断, ②終結, ③完遂, ④極限, ⑤一語化の 5 つに分け, コーパスの使用例から見ると, 「③完遂」の使用例が 72 例と一番多く, 本動詞「切る」の意味が残っている「①切断」の例が 2 例と最も少なく, 「⑤一語化」の例が 56 例あり, かなり多く使用されていることがわかった。「使用頻度が多いものの方が文法的機能を有している可能性が高い」と述べて, 一語化について, 「複合動詞「～切る」は, 本動詞「切る」の意味が「漂白」され, 文法化された意味の使用頻度の増加とともに, 新たな意味を獲得し始めているためだ」

と説明している。

また、後項動詞の接辞化の視点から考察を行った先行研究は斎藤（1992）が挙げられる。斎藤（1992）は複合動詞「～返す」の後項と本動詞「返す」を取り上げ、それぞれの違いに注目し、後項動詞「返す」の接辞化と接辞性の大小を論じることによって、「V-V」「V-v」の分類と語形成の議論をうまく整合している。

## 2.3 語彙的複合動詞の共通原則

先行研究では、語彙的複合動詞の成立を規制する原則として、「他動性調和の原則」「主語一致の原則」「非対格優先の原則」の3つが提案されている。この3つの共通原則は全ての語彙的複合動詞に適用できるわけではないと思われる。先行研究では、3つの共通原則には、後述するように、例外があるという指摘が見られるが、後項の意味が抽象化した場合の考察はまだ見当たらない。本節では、まず、この3つの原則について説明する。また、後項の意味が抽象化した場合、この3つの共通原則がどのように反映しているのかについて検討してみる。

### 2.3.1 他動性調和の原則

影山（1993）は、動詞の項構造における外項の存在の有無により、語彙的複合動詞における動詞の組み合わせが説明できるとしている。項構造とは、文法と意味とのインターフェースにある構造で、動詞が文法的に取る項を表示するものである。項構造の性質とその表示にはいくつかの考え方があがあるが、影山（1993）は（19）のように、外項と内項とを区別し、外項は山型括弧の外側に、内項は内側に表示する方法を取っている。

（19）飲む（Ag 〈Th〉）

このような項構造から、動詞は三種類に分けられる。a) 他動詞（外項と内項を取る動詞）、b) 非能格動詞（外項を取る自動詞）、c) 非対格動詞（外項を取らない自動詞）である。スキーマ的には次のようになる。

（20） a. 他動詞	x 〈y〉	読む, 叩く, 壊す
b. 非能格動詞	x 〈 〉	走る, 飛ぶ, 喋る



- c. 非対格動詞                      〈y〉      落ちる, ある, 壊れる

(影山 1993 : 67 をもとに作成)

影山 (1993) は, 語彙的複合動詞の語形成を V1 と V2 の項構造の合成とし, この合成において, (21) のように, 外項を有する動詞 (他動詞・非能格自動詞) 同士あるいは外項を有しない動詞 (非対格自動詞) 同士の複合は成立するが, 外項を有する動詞と外項を有しない動詞の複合はできない, という「他動性調和の原則」があると提案している。

- (21) a. 他動詞+他動詞: 奪い取る, 追い払う, 引き抜く, 射落す  
b. 非能格+非能格: 言い寄る, 飛び降りる, 歩き疲れる  
c. 非対格+非対格: 滑り落ちる, 立ち並ぶ, 生い茂る  
d. 他動詞+非能格: 探し回る, 待ち構える  
e. 非能格+他動詞: 泣き腫らす, 伏し拝む, 笑い飛ばす  
f. 他動詞+非対格: \*洗い落ちる, \*染めかわる, \*倒し滑る  
g. 非能格+非対格: \*走り転ぶ, \*飛び落ちる, \*回り落ちる  
h. 非対格+他動詞: \*揺れ落とす, \*売れ飛ばす, \*滑り削る  
i. 非対格+非能格: \*痛み泣く, \*転び降りる

(影山 1999 : 201)

### 2.3.2 主語一致の原則

影山 (1993) の「他動性調和の原則」は多くの語彙的複合動詞の語形成を説明できるが, 下記 (22) のような「非能格自動詞+非対格自動詞」「他動詞+非対格自動詞」といった反例も見られる。

- (22) a. 非能格自動詞+非対格自動詞  
歩き疲れる, 遊び疲れる, 泳ぎ疲れる, 立ち疲れる, 座り疲れる, 喋り疲れる, 鳴きくたびれる, 走りくたびれる, 泣き濡れる, 泣き沈む  
b. 他動詞+非対格自動詞  
読み疲れる, 待ちくたびれる, 飲みつぶれる, 食いつぶれる, 聞き惚れる, 見惚れる

(松本 1998 : 49)

これについて、松本（1998）は「主語（卓立項）一致の原則」を提案している。「主語一致の原則」とは、「2つの動詞の複合においては、2つの動詞の意味構造の中で最も卓立性の高い参与者（通例、主語として実現する意味的項）同士が同一物を指さなければならない。」（松本 1998：72）ということを目指す。

すなわち、語彙的複合動詞は「彼が走る（外項）＋彼が疲れる（内項）→彼が走り疲れる」のように、外項・内項を問わずに、V1とV2の主語が一致しなければならないということである。

### 2.3.3 非対格性優先の原則

由本（2005a）は由本（1996）の「主語の義務的同定」（おおよそ「主語一致の原則」と同じことを規定している）を引き継ぎながら、語彙的複合動詞に「非対格性優先の原則」があると新たに提案している。

「非対格性優先の原則」とは、語彙的複合動詞の語形成において、非対格性が優先的に継承されることである。例えば（23）のように、V1とV2を問わずに、複合動詞の構成要素に非対格自動詞がある場合、複合動詞全体も必ず非対格自動詞になる。

（23）

	V2 非対格自動詞	V2 非能格自動詞	V2 他動詞
V1 非対格自動詞	非対格自動詞 溺れ死ぬ、溶け出る、抜け落ちる	非対格自動詞 知れ渡る、静まり返る、煮えたつ	非対格自動詞 吹き上げる、生まれ合わせる、照りつける
V1 非能格自動詞	非対格自動詞 泳ぎ着く、踊り疲れる、寝静まる	非能格自動詞 飛び上がる、笑い転げる、泣きわめく	非能格自動詞、他動詞 鳴き交わす、泣き腫らす、笑い飛ばす
V1 他動詞	非対格自動詞 飲みつぶれる、聞き惚れる (着膨れる)	非能格自動詞、他動詞 追いつく、襲いかかる、眺め暮らす、持ち寄る	他動詞 持ち運ぶ、切り倒す、聞き漏らす、絞め殺す

（由本 2008：10）

上でまとめた語彙的複合動詞の共通原則は、すべての語彙的複合動詞に適用できるわけではないと思われる。陳（2013）では、影山（1993）の提案している「他動性調和の原則」に反する上の（22）のような語彙的複合動詞も存在すると指摘している。それ以外、複合動詞は後項の意味の抽象化に従って、「他動性調和の原則」からずれてしまう例も見られる。例えば、三宅（2005）では、寺村（1984）で挙げた例を用いて複合動詞の文法化について説明している。

- (24) a. 彼はその虫を箱からつまみ出した。
- b. 虎が檻から逃げ出した。
- c. 赤ん坊が泣き出した。

上の（24a）の「～出す」は起点を表す項「箱から」が生起していることから、本動詞としての性質を維持しているが、（24c）の「～出す」ではそのような項の生起は見られず、意味も抽象化され、アスペク的な意味になっていることから、文法化が進んでいるとみなし得る。そして、（24b）のような「～出す」は両者の中間段階とみなすことができる。起点を表す項も生起し、移動という本来の意味も残している点では本動詞性を完全には失っていないが、本来他動詞であるものが自動詞的に使われるという他動性の不調和が見られるという点では、本動詞性が多少失われ、脱範疇化が起こっているとも言えるからである。

（三宅 2005 : 66 をもとに作成（例文の番号のみ筆者により））

また、松本（1998）が提案した「主語一致の原則」について、確かに多くの複合動詞をカバーできるが、後項が意味的に抽象化する場合は、説明できないと考えられる。例えば、上の（25c）の例文「赤ん坊が泣き出した」において、「赤ん坊が泣いた」は言えるが、「赤ん坊が出した」は言えない。後項「-出す」の意味が抽象化して、本動詞の持っている移動の意味がなくなつたと考えられるからである。この場合、「主語一致の原則」が適用できない。

由本が提案した「非対格優先の原則」について、陳（2013）では、以下のように述べている。

- (25) 確かに（23）の観察から「非対格優先の原則」という一般化を得られるが、よく見れば（23）における非対格の複合動詞の多く（溺れ死ぬ、踊り疲れる、飲みつぶれるなど）は、その V2 が非対格自動詞だということに気づく。

そもそも、語彙的複合動詞に V2 の統語的性質・下位範疇化素性が継承されるという「右側主要部の規則」があるので、これらの複合動詞の非対格性は「右側主要部の規則」で十分説明できる。

(陳 2013 : 50 をもとに作成)

陳 (2013) で述べられたように、「非対格優先の原則」は「右側主要部の規則」に還元できると言える。後項が意味的に抽象化した複合動詞の場合、「右側主要部の規則」に適用できない例もある。この点について、影山 (2013) 自身も認めている。影山 (2013) は、今まで「語彙的複合動詞」に分類されたものを「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」に再分類しており、「アスペクト複合動詞」の特徴について、以下のように述べている。

- (26) V2 を意味的主要部とする主題関係複合動詞が圧倒的に多いことは、日本語の基本的な法則の 1 つである右側主要部の規則が容易に予想されるが、右側主要部に反して V1 に意味的中心を持つアスペクト複合動詞が予想以上に多く、全体の 3 分の 1 にのぼることが判明した。

(影山 2013 : 12)

上述した内容をまとめて、後項が意味的に抽象化した場合の複合動詞は以上の三つの共通している原則に適用できないものが多いと考えられる。詳しい分析については後述する。

#### 2.3.4 後項の意味的抽象化に関する共通原則について

本節では、複合動詞の後項の意味が抽象化した場合、上述した 3 つの語彙的複合動詞の共通原則に当てはまるかどうかについて見てみる。具体的に、「一あがる<sup>3</sup>」を対象として検討する。複合動詞には生産性の高い後項が数多く存在するが、なぜ「一あがる」を取り上げるかというと、その理由として、前項に他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞の 3 種類の動詞を取ることで、バラエティが豊富であり、その特徴をよりよく観察できること、また、複合動詞「～上がる」の数が 75 語あり、生産性が比較的高いことによる。また、先行研究で提案した 3 つの語彙的複合動詞に共通の原則は語彙的複合動詞だけに適用される制約であり、本論文の考察対象である後項の意味が抽象化した複合動詞「～上がる」は「本動詞「上がる」の移動の意味を持っているかど

うか」によって判断する。例えば、「ヘリコプターが上空に飛び上がった」の場合、ヘリコプターが空へ飛んでいて、その結果ヘリコプターが上へ移動するという意味になるため、本動詞「上がる」の意味がそのまま生きている。「アспект」(ex. 茹であがる)、「副詞的修飾」(ex. 晴れ上がる)、「モダリティ」(ex. 召し上がる)の意味を表す場合、本動詞「上がる」の表す「上への移動」という意味がなくなっているため、段階によって、抽象化の度合いが違うものの、これらの場合は、後項「～あがる」の意味が抽象化したものとして捉えられる。

本論文では、国立国語研究所の複合動詞レキシコンから複合動詞「～あがる」を検索し、それぞれの前項動詞の自他性により、複合動詞全体の意味範疇を上の4段階ごとに分類する。また、それぞれのタイプは3つの語彙的複合動詞にどのように反映しているのかもリストアップしておく。

複合動詞レキシコンから検索した複合動詞「～あがる」は全て79語で、一語化した2語と重複した2語（「茹で上がる」、「沸き上がる」）を除いて、合わせて75語がある。

検索した語例を以下の27のようにまとめる。4つの意味範疇（4つの段階）に分けられた複合動詞を前項動詞の自他性によっていくつかのタイプに分け、それぞれのタイプが3つの語彙的複合動詞の共通原則に当てはまるどうかを示している。（○は当てはまる、×は当てはまらないことを表す）

(27)

意味範疇	タイプ	前項動詞の種類	語数	他動性 調和	主語 一致	非対格性 優先	語例
移動 (方向)	タイプ①	他動詞	7	×	×	○	釣り上がる
	タイプ②	非対格自動詞	21	○	○	○	浮き上がる
	タイプ③	非能格自動詞	8	×	○	×	飛び上がる
アспект	タイプ①	他動詞	22	×	×	○	折り上がる
	タイプ②	非対格自動詞	4	○	○	○	でき上がる
副詞的修飾	タイプ②	非対格自動詞	12	○	×	○	晴れ上がる
モダリティ	タイプ①	他動詞	1	×	×	×	召し上がる

また、3つの共通原則に当てはまらない例について、以下の(28)のように示している。

(28)

	他動性調和	主語一致	非対格性優先
全体の反例	50.6%	56%	12%
抽象化したものの反例	30.6%	46.7%	1.3%

上の考察結果から、後項の意味が抽象化した場合の複合動詞「～あがる」は、先行研究で提案された 3 つの語彙的複合動詞の共通原則に当てはまらない例が多いことが観察された。また、興味深いことに、抽象化したものの中に、当てはまるものと当てはまらないもの両方があるが、それはなぜであろうか？後項における本動詞の意味が薄くなることによって、もともと本動詞に含まれる動作性、動作主の意志性などの要素が次第に薄くなり、ないしなくなり、文法的機能しか表さないことが考えられる。

由本 (2005) が提案した「非対格性優先の原則」は非対格性のみを問題にしている、緩い制限になるので、より広範囲の複合動詞の結合関係を説明できると考えられるが、この原則の成立する明確な根拠が提示されていない点に問題が残る。また、この原則は非対格性を問題にしている、厳密に言うと、前項にも後項にも非対格自動詞がない場合の複合動詞の成立を十分に説明できないと言わざるを得ない。この点から見ると、「非対格性優先の原則」はほかの 2 つの原則とは本質的に違うものだと考えられる。さらに、上の表 (23) に示した例を見ると、後項動詞がほとんど非対格自動詞であり、影山 (1993) が主張する「右側主要部の原則」(語彙的複合動詞は並列関係を除いてほとんど右側主要部) に合致しているので、「非対格優先の原則」がなくても、「右側主要部」のみで説明できると思われる (陳 2013 : 50 も参照)。

## 2.4 動詞の分類

本論文は複合動詞後項における意味的抽象化についての研究であり、本動詞の意味がどのように抽象化しているのかを考察するものである。これを論じる際、後項動詞の性質や特徴などを分析し、抽象化によってその性質や特徴がどのように変わっているのかを見極めるために、数多くの動詞を分類し、その性質や特徴を明らかにしておくことが不可欠だと考えられる。

動詞を分類する際に、動詞事象が持つ時間的内部構造、すなわち語彙的アスペクトから分類するのが一般的である。日本語の場合、金田一 (1950, 金田一 1976 に再録) は「動詞+ている」形で表す意味によって日本語の動詞を以下のように 4 種類に分け

ている。

(29) 金田一 (1950) の動詞分類

- a. 第一種の動詞 状態動詞 ex. いる, ある, (英語が) できる, わかる, など  
状態を表す。時間を超越した概念を表す動詞。「-ている」をつけることがない。
- b. 第二種の動詞 継続動詞 ex. (新聞を) 読む, (字を) 書く, (雨が降る), など  
動作・作用を表す。ある時間内続いて行われる種類。「-ている」をつけるとき, その動作が進行中を表す。
- c. 第三種の動詞 瞬間動詞 ex. 死ぬ, (電燈が) 点く, 結婚する, 消える, など  
瞬間に終わってしまう動作・作用, 「-ている最中だ」ということはできない。  
「-ている」をつけるとその動作・作用が終わってその結果が残存していることを表す。
- d. 第四種の動詞 ex. そびえる, 帯びる, 似る, 優れる, など  
時間の概念を含まない。ある状態を帯びることを表す。いつも「-ている」の形で状態を表すのに用いる。

英語の場合, Vendler (1967) の4分類がある。

(30) Vendler (1967) の動詞4分類

- a. 状態 (states) : know, believe, have, desire, love
- b. 到達 (achievements) : recognize, spot, find, lose, reach, die
- c. 活動 (activities) : run, walk, swim, push a cart, drive a car
- d. 達成 (accomplishments) : paint a picture, make a chair, push a cart to the supermarket, recover from illness

上の分類のうち, 「状態動詞」は時間に縛られない恒常的な意味を持つ。「到達動詞」は何らかの動作や行為を行って, その動作や行為が終了点に至った状態を表す。「活動動詞」は意志的に開始・終了できる動作・行為を表す。「達成動詞」はある行為や

動作を一定の時間行なって、最終的な状態に至ることを表す。この4分類は以下のテストから判断できる。

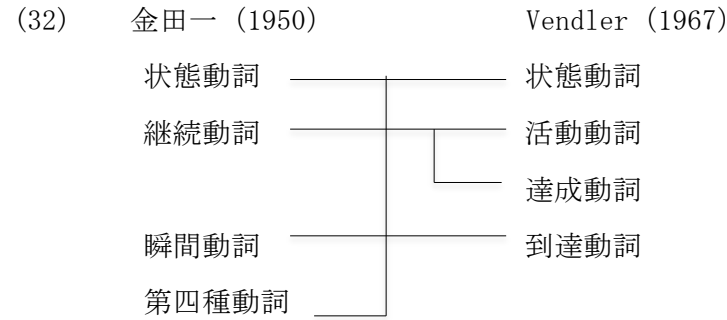
(31) 英語動詞4分類のテスト

	状態	到達	活動	達成
What happened?	*	OK	OK	OK
be-ing	*	OK (～しかけている)	OK	OK
in an hour	*	OK	#	OK
for an hour	*	*	OK	*

(影山 1996 : 42-43)

(31) のテストについて、「What happened? (何か起こったか?)」は動的事象と静的事象を区別するテストである。「be-ing」は活動の進行を表す進行形で、到達動詞と共起する場合、「She is dying(彼女は死につつある)」のように、終了点に近づきつつあることを表す。「in an hour (一時間で)」と「for an hour (一時間)」は動詞の限界性 (telicity) に関わるテストである。「in an hour (一時間で)」と共起できる動詞は、動詞事象に何らかの終了点が内包される限界動詞 (telic verb) であり、「for an hour (一時間)」と共起できる動詞は、終了点が内包されない非限界動詞 (atelic verb) である。

外崎 (2005) には、金田一 (1950) と Vendler (1967) の動詞分類は大体以下のように対応しているという指摘がある。



(外崎 2005 : 149)

また、工藤 (1995) は、アスペクト対立の有無の観点から、日本語動詞を以下のよう



(33) (A) 外的運動動詞

(A1) 主体動作・客体変化動詞

① 客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞→温める，当てるなど

所有関係の変化をひきおこす動詞→あげる，預ける，払うなど

(A2) 主体変化動詞〈内的限界動詞〉

① 主体変化・主体動作動詞〔再帰動詞〕→かぶる，着替える，抱えるなど

② 人の意志的な（位置・姿勢）変化動詞〔自動詞〕→上がる，集まる，行く，結婚する，就職するなど

③ ものの無意志的な（状態・位置）変化動詞〔自動詞〕→温まる，崩れる，腐る，千切れる，曲がる，届くなど

(A3) 主体動作動詞〈非内的限界動詞〉

① 主体動作・客体動き動詞〔他動詞〕→動かす，飛ばす，流すなど

② 主体動作・客体接触動詞〔他動詞〕→いじる，かじる，叩く，引っぱる，かじる，訪問するなど

③ 人の認識活動・言語活動・表現活動〔他動詞〕→嗅ぐ，聞く，比べる，調べる，測る，尋ねる，説明する，喋る，歌うなど

④ 人の志的動作動詞〔自動詞〕→遊ぶ，暴れる，歩く，急ぐ，向かう，走るなど

⑤ 人の長期的動作動詞〔他動詞，自動詞〕→営む，通う，暮らす，経営する，住む，付き合う，勤めるなど

⑥ ものの非意志的な動き（現象）動詞〔自動詞〕→動く，さえずる，飛ぶ，流れる，回る，揺れる，輝く，ざわめく，響くなど

(B) 内的情態動詞〈非内的限界動詞〉

(B1) 思考動詞→思う，考える，疑う，信じる，わかる，祈るなど

(B2) 感情動詞→諦める，憧れる，イライラする，感動するなど

(B3) 知覚動詞→味がする，音がする，感じる，聞こえる，見える，ツルツルする，におうなど

(B4) 感覚動詞→痛む，うずく，疲れる，痺れる，（はらが）へるなど

(C) 静態動詞

(C1) 存在動詞→ある，いる，存在する，点在するなど

- (C2)空間的配置動詞→聳えている，面している，隣接しているなど  
 (C3)関係動詞→値する，あたる，当てはまる，相当する，意味する，  
 依存する，違う，似ているなど  
 (C4)特性動詞→甘すぎる，大きすぎる，泳げる，話せる，似合う，あ  
 りふれている，優れている，しっかりしている，精通しているな  
 ど

動詞の分類から見ると，工藤（1995）の分類は Vendler（1967）の分類と以下のように対応していることがわかる。

(34) 工藤（1995）	Vendler（1967）	語例
A. 外的運動動詞		
非内的限界動詞		
(A1)主体動作動詞	活動動詞	遊ぶ，触る
内的限界動詞		
(A2)主体動作・客体変化動詞	達成動詞	温める，上げる
(A3)主体変化動詞	到達動詞	折れる，出かける
B. 内的情態動詞		考える，苦しむ，感じる
C. 静態動詞	状態動詞	ある，異なる，聳えている
(三原 2002 : 134 をもとに作成)		

(34) で示されるように，工藤（1995）の分類は大体 Vendler（1967）の分類と同質であるが，工藤（1995）は細かい下位分類も挙げている。特に，「内的情態動詞」について詳しく分類している。「内的情態動詞」と内容は同じだが，心理動詞という名称を用いて分析を行った先行研究に三原（2000，2004）がある。三原（2000，2004）は下記（35）のようにル形の解釈，（36）の未完了の逆説<sup>4</sup>（imperfective paradox），（37）の「～かけの」構文などのテストを利用し，日本語の心理動詞は活動動詞と同じ語彙的アスペクトを有すると分析している。

- (35) a. 心理動詞：親が悲しむぞ→未来の事態  
 b. 状態動詞：太郎が図書館にいる→現在の事態  
 (36) a. 活動動詞：母親が子供を叱っている＝子供を叱った  
 b. 心理動詞：孝司は弟の才能を妬んでいる＝才能を妬んだ

- c. 達成動詞（使役動詞）：山本さんは桶を作っている ≠ 桶を作った
- (37) a. 到達動詞（変化動詞）：落ちかけの看板
- b. 達成動詞（使役動詞）：奥さんが作りかけのケーキ
- c. 活動動詞：＊走りかけの子供
- d. 心理動詞：＊結婚問題に悩みかけの女性

（三原 2004：13-15 より抜粋）

## 〈注〉

1. 『日本語文法事典』（2014:212）によると、「LCS は動詞，形容詞，前置詞など「述語」の概念的意味（特に統語構造に直接反映される意味概念）を表示するもので，使役（CAUSE）や変化（BECOME）を表す基礎的な意味述語（関数）と，それらがとる項ないし補部で構成される」と規定している。
2. クオリア構造は Pustejovsky（1995）が提唱している生成語彙論（Generative Lexicon）の理論的装置である。Qualia Structure。構成クオリア（物体とそれを構成する部分の関係），形式クオリア（物体を他の物体から識別する関係），目的クオリア（物体の目的と機能）と主体クオリア（物体の起源や発生に関する要因）に分けられている（小野 2005:24 を参照）。
3. 影山（1993）では、「上がる」を非能格と非対格両方が可能であるものとし，複合動詞の場合，「他動性調和の原則」に当てはまるものとしている。本研究は「上がる」を非対格動詞として扱う。
4. 三原（2004：14）によると，未完了の逆説とは，「歩く」，「叱る」のような非限界動詞を動作持続のテイル形にすると，事態が既に成立したことを示す現象を指す。一方，「作る」，「建てる」のような達成動詞は，それ自体は限界動詞であるのに，テイル形では，事態が進行していることを示すだけで限界性の含意はない。英語の進行形でも日本語と全く同じ現象が起こる，としている。

## 第 3 章

### 本研究の立場

#### 3.1 はじめに

本章は、先行研究の問題点を述べた上で、本論文の立場を決定し、研究の対象、方法を説明する。また、重点を置いた部分「副詞的」についての規定（意味的・統語的特徴）について述べるものである。

#### 3.2 先行研究の問題点

前述したように、先行研究は主に 2 つの部分に分けられる。影山（1993）の研究を境目にして、それ以前の研究は主に V1 と V2 の結合関係によって複合動詞を分類するのが中心である。それ以降の研究は、影山（1993）の影響を受けて、「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の 2 分類を踏まえた上で考察を行うことが多く、単に語彙的・統語的に分けるのではなく、それぞれの複合動詞の意味・項構造の決まり方や V1 と V2 の複合の仕方など語形成に関する議論を詳しく展開する（陳 2013 参照）。

生産性のある複合動詞後項の意味的抽象化を文法化の視点から考察を行った先行研究は田辺（1996）のみである。本論文は後項の意味的抽象化を段階的に捉える点は田辺（1996）と同じ立場であるが、移動動詞を後項としての複合動詞の意味抽象化の傾向を一般化していることが先行研究には見られない観点であると言える。また、先行研究では、「後項が前項を副詞的に修飾する」ものについて詳しく論じていないのも問題である。

影山（2013）は、語彙的複合動詞を「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」に分けて、後者について、「V2 は、限られた V1 としか結びつかない。その点で、統語的な補助動詞が自由度が高いことと対照的。（中略）V1 と V2 の意味解釈が単純で

はない」(影山 2013 : 15) ということを指摘しているが、「限られた V1」はどのようなものかについては検討されていない。また、影山 (2013 : 17-18) では、「アスペクト複合動詞」を「V1 に対して付け加えるアクティオンズアルト」として、「時間的なアクティオンズアルト」、「空間的なアクティオンズアルト」と「人称的な(敬語など対人関係にかかわる)アクティオンズアルト」に分けているが、V1 と V2 の関係をどのように意味的に解釈したらよいのかについて、詳しく論述していない。さらに、影山 (2013:25) では、「L-asp(語彙的アスペクト, 筆者注)の多くは、事象全体を修飾する副詞的な意味しか持たないと考えられ、意味解釈においては、V1 が表す事象全体を修飾することになる。しかし、既に例示したように、L-asp となる後項動詞は、すべての L-asp が「概念的副詞」として片付けることができるかどうかは理論的な問題となる」ということを指摘しているが、本論文の考察対象である複合動詞後項においては、「副詞的修飾」は 4 段階の 1 つとして設定され、他の 3 段階は「副詞的修飾」と違うものとして別に設定するのが妥当ではないかと考えられる。

### 3.3 研究の対象

本論文の研究対象は、移動動詞<sup>1</sup>を中心にした生産性の高い複合動詞後項「一こむ<sup>2</sup>」、「一上げる」、「一上がる」、「一出す」、「一つける」、「一かける」、「一抜く」、「一きる」である。これらを具体的に分析し、後項の意味的抽象化について詳しく考察を行う。

以上の複合動詞後項を選定する理由として、①第二章 2.2 節で述べたように、日本語の複合動詞は数が多く、生産性の高いものから低いものまでいろいろなタイプがある。同じ後項を持っている生産性の高いものを選定するに当たって、その後項の意味がどのように抽象化しているのかを考察するのにより観察しやすいと言える。②同じ後項を持っている複合動詞同士でも、「一入れる」の場合、「押し入れる」、「挟み入れる」、「くくり入れる」のように、内部移動の意味しか持っていないため、後項には意味的抽象化が見られないと考えられる。それに対して、「一上がる」の場合、「飛び上がる」、「編み上がる」、「晴れ上がる」のように、それぞれ「上への移動」、「動作の完成」、「前項動詞の表す状態の程度」を表し、後項には意味的抽象化が見られる。本論文は複合動詞後項の意味的抽象化についての研究であるため、「一入れる」のような意味が抽象化していないものを対象外にし、「一上がる」のような後項に意味的抽象化が見られるものを選択した。

本論文における研究対象の生産性について、姫野 (1999) に示した複合動詞リスト

に基づき、以下の表 1 のように示す。

表 1 生産性の高い多義性の複合動詞の数

複合動詞	数
—こむ	285
—きる	251
—だす	158
—あげる	152
—つける	107
—ぬく	99
—あがる	83
—かける	48

### 3.4 研究の方法

研究の方法としては、主に記述的研究で、中国語との対照研究も少し入れた。また、後項の意味的抽象化を分析するに当たって、認知意味論と文法化理論を用いて分析を行う場合もある。1.2.1 節でも述べたように、文法化は、実質的な意味内容をもつ内容語（動詞、名詞など）が、文法的機能を果たす機能語（助動詞、前置詞、接続詞など）へと変化していくことである。文法化は一般的に、言語の歴史的問題を扱う通時的視点から捉えられているが、本論文は、三宅（2005）と同じように、歴史的問題を扱わず、共時的視点から現代語の問題を扱う立場になる。

### 3.5 本論文における動詞の分類

複合動詞の後項の意味的抽象化を論じるにあたって、動詞の分類は前項と後項に関わり、後項の意味分析などにとって重要な分析手段になると言える。

本論文は、基本的に、Vendler（1967）の動詞 4 分類に従って、日本語動詞を「状態動詞」、「活動動詞」、「達成動詞」と「到達動詞」に分ける立場を取る。ただし、「達成動詞」と「到達動詞」といった用語は混同されやすいため、ここで「到達動詞」を「変化動詞」に、「達成動詞」を「使役動詞」として区別する。また、「変化動詞」を変化の内容が位置なのか状態なのかによって「位置変化動詞」と「状態変化動詞」に

分けて説明する場合もある。さらに、第2章(33)～(35)に示したように、心理動詞は「活動動詞」と同じ語彙的アスペクトを有するため、三原(2004)と同じような立場に立って、心理動詞を活動動詞の一種として扱うことにする。

影山(2008:245)が指摘しているように、活動動詞は意志的な活動を表すものだけではなく、不随意的な活動も含まれている。活動動詞は必ずしも意志的な動作を表さないが、一応コントロールし得る(影山)「読む」「書く」などの他動詞は動作主の意志によってコントロールできる動作で、「笑う」「泣く」などの自動詞は動作主の不随意的な行為である。後者の自動詞は「笑おう」「泣こう」のように意向表現や命令表現が使えるので、必ずしも意図性を有しないが、コントロールし得る行為だと考えられるからである。

以上で述べたように、本論文は基本的に、動詞を「状態動詞」、「活動動詞」、「使役動詞」、「変化動詞(状態変化動詞と位置変化動詞)」に分け、「心理動詞」を活動動詞の一種として扱う。また、必要に応じて、もっと詳しく下位分類をする場合もある。例えば、佐野(1998)は、程度副詞と主体変化動詞との共起について考察するため、主体の変化を表す変化動詞を「変化に進展性を伴う動詞句」(「広まる」、「温まる」など)と「変化に進展性を伴わない動詞句」(「死ぬ」、「割れる」など)に2分類して、「変化に進展性を伴う動詞句」について、進展性に限界を持つか持たないかによって、さらに「進展性に限界を持たない動詞句」(「温まる」、「冷える」など)と「進展性に限界を持つ動詞句」(「沸く」、「腐る」など)に分けている。

(1) a. [-限界/進展的变化] 動詞句

{だいぶ/かなり/少し/非常に/とても} 体が温まった。  
{だいぶ/かなり/少し/非常に/とても} 領土が広がった。  
部屋が {だいぶ/かなり/少し/非常に/とても} 汚れた。  
{だいぶ/かなり/少し/非常に/とても} 太った。

b. [+限界/進展的变化] 動詞句

{だいぶ/かなり/少し/\*非常に/\*とても} 日が暮れた。  
{だいぶ/かなり/少し/\*非常に/\*とても} 氷が溶けた。  
風邪が {だいぶ/かなり/少し/\*非常に/\*とても} 治った。  
湯が {だいぶ/かなり/少し/\*非常に/\*とても} 沸いた。

(佐野 1998 : 11-12)

佐野(1998:12)は、上の(1)で挙げた例について、「「だいぶ, かなり, 少し」

などの程度副詞は、変化が進展的に進む主体変化動詞句と共起するが、「非常に、とても」などの程度副詞は、このうち進展性に限界のない動詞句としか共起しない」と述べている。それを取り入れて、本論文では、変化動詞を進展性の有無によって2種類に分ける立場に立って分析を進める。

## (2) 本論文の分析に用いる動詞の種類

### a. 状態動詞

時間を超越した概念を表す静的事象である。

花子は教室にいる。

彼は英語が話せる。

リチャードはピアノ十級の資格を持っている。

高い山が聳えている。

### b. 活動動詞

継続可能な動的事象を表す（他動詞も自動詞もある）。

彼は新聞を読む。

おばあちゃんは字を書く。

先生は思わず笑った。

赤ちゃんが泣く。

### b1. 心理動詞

心理的動きを表す動詞。

学生たちが喜ぶ。

警察は彼のことを疑う。

大学に入学して、毎日楽しんでいる。

財布が盗まれて、ずっと困っていた。

### c. 到達動詞（変化動詞）

何らかの終了点を有する動的事象を表す。

インクが服に付く。

体が冷える。

割り箸が折れる。

### c1. 進展性に限界を持つ変化動詞

体が冷える。

背筋が伸びる。

### c2. 進展性に限界を持たない変化動詞



木の枝が枯れる。

山の斜面が崩れる。

d. 達成動詞（使役動詞）

何らかの活動を通して、対象物のある場所・状態に変化させることを表す。

ご飯を作る。

パンケーキを焼く。

部屋をきれいに飾る。

パソコンを机の上に置く。

### 3.6 本論における複合動詞後項の意味的抽象化の傾向の捉え方

#### 3.6.1 複合動詞後項の意味的抽象化の傾向

本論文では、移動動詞を中心にした生産性の高い複合動詞後項「一こむ」、「一上げる」、「一上がる」、「一出す」、「一つける」、「一かける」、「一抜く」、「一きる」を対象として、それぞれの後項における意味的抽象化について考察する。後述するように、それらの後項における意味的抽象化を段階的に捉え、「原義・方向」、「アスペクト」、「副詞的修飾」、「評価・感情的意味（モダリティ）」という4段階に分けるとというのが本論文の一つの主張である。

例えば、複合動詞「～こむ」の場合、以下のような例がある（例文は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から検索したものである）。

- (3) 一步踏み出すごとに板の割れ目から得体の知れぬ海虫が走り出て、水中に飛びこむでいく。（東郷隆『御町見役うずら伝右衛門』）
- (4) 翌朝はテレビの前に座りこむでニュースを見る。（向谷匡史『ヤクザという生き方』）
- (5) どうしてわたしが私立女子高の出身だと決めこむでいるの？（ノーラ・ロバーツ（著）竹生淑子（訳）『恋人たちの航路』）

以上の例では、同じ後項動詞「一こむ」が「飛ぶ」「座る」「決める」と結びつき形成した複合動詞において、その意味が違っていることが分かる。(3)の「飛びこむ」は「飛んで、水の中に入る」という「内部移動」の意味であり、(4)の「座りこむ」は「ずっと座る、長い間座る」という前項動詞の意味を修飾する「副詞的」意味を表

し、(5)の「決めこむ」は、「勝手に決めて、それ以外考えない」という「動作のマイナス評価の強め」的な意味を表すと言える。

これらの後項の意味において、「原義・方向」→「アスペクト」→「副詞的修飾」→「評価・感情的意味（モダリティ）」という意味的抽象化の傾向が見られるということが本論文のもう一つの主張となる。

### 3.6.2 統語論の用語を援用する理由

上の3.6.1節で述べた複合動詞後項が意味的抽象化の傾向「原義・方向」→「アスペクト」→「副詞的修飾」→「評価・感情的意味（モダリティ）」において、「アスペクト」、「モダリティ」といった用語について、もともと統語論的な概念であるが、本論では、これらの用語を用いて、複合動詞後項の意味を説明しようと考えている。

述語と「時間」の関係について、「テンス」と「アスペクト」という概念がある。『明解言語学辞典』（2015）によると、「アスペクト」について、以下のような説明が載せられている。

- (6) アスペクトとは、動詞の表す事態の内部的な時間構造の捉え方（事態の開始・持続・終結のどの段階に注目するかなど）に関わる文法カテゴリーであり、事態と発話時との時間的關係（事態がいつ起こるか）を表すテンスとは異なる。また、アスペクトは、動詞の屈折や接辞・助動詞などの文法的手段によって表される点において、動詞自体に内在する時間的意味であるアクションスアルトとも区別される。

（『明解言語学辞典』2015：004をもとに作成）

複合動詞に使うアスペクト表現は「V 始める」「V 続ける」「V 終わる」などのようなものがあげられ、これらのアスペクト表現の基本になるのは、動詞自体の時間的性質である。それぞれ動きの始まりの段階、動きの途中の段階と動きの終わりの段階を表す。

上で述べた内容から見ると、「アスペクト」は動詞自体の時間的性質に関わるものである。つまり、「アスペクト」は動詞が時間においてどの段階に位置付けるかということである。「始まりの前、始まり、継続、終わり、終わった後の状態、習慣、反復、経験」などの時間概念もアスペクトの範囲に入ると思われる。本論文であえて「アスペクト」という用語を援用したのは、アスペクトの表す時間的範囲が広く、時間軸

における段階で広く使われるからである。

また、モダリティについて、岡部（2013）は、以下のように述べている。

(7) モダリティをどのような概念として捉えるのかということに関しては、現在、少なくとも二つの異なった立場がある。

A. 文において客観的内容を表す「命題」と対置される「話し手の主観的把握」（話しての発話時における心的態度）を「モダリティ」と呼ぶ立場（仁田（1991），益岡（1991），日本語記述文法研究会編（2003）など）

B. 文によって述べられる事態（内容）と話しての現実との関係性を述べることに関わる意味を「モダリティ」と呼ぶ立場（尾上（2001），野村（2003，2004），大鹿（2004，2005）など）

（岡部 2013：96 をもとに作成）

先行研究では、モダリティについていろいろな視点から考察されている。益岡（1991）は、文の構造は客観的な命題を主観的なモダリティが包むという階層的な構造をなすというものである。A の立場では、「話し手の主観性」を表す形式は、その定義上全てモダリティ形式である。「だろう、かもしれない」など（述語に付加する）文法形式、終助詞のヨやネ、「行け」などの動詞命令形、「痛い」「悲しい」などの感情形容詞、疑問を表す文末形式（～カなど）などは全てモダリティ形式ということになる。

本論文は、話し手の主観的態度、他人に対する評価、感情的意味を「モダリティ」の意味範疇として扱うことにする。また、ここで言った「副詞的修飾」も統語論的概念ではない。

本論文は、意味的な立場に立って、複合動詞の前項と後項という 2 つの項目の間の関係性を理解しようとしている。その時に、そもそも統語的に使われる「副詞的修飾」、「モダリティ」などの概念を複合動詞の前項と後項の関係にも意味的に平行するものとして捉え、意味的に解釈し直しているわけである。これらの用語は統語論的概念であるが、意味的な観点に立てば、両方の共通性を捉えることが可能だと考えるのが、本論文の基本的な立場である。

### 3.6.3 「副詞的」の規定

ここで論じる「副詞的」とは、複合動詞において、後項（V2）が「副詞的」なものになるということで、「程度の強さ」、「主体や対象物の量の多さ」、「動作の時間の長

さ」、「頻度の高さ」などを表すものを指す。具体的に言うと、「強く～」、「激しく～」、「ずっと～」、「何度も～」、「無理に～」などのような意味を表すものである。

上述したように、本論文は、移動動詞を中心に生産性の高い複合動詞後項を取り上げ、それぞれの意味的抽象化を4段階に分けて分析を行なっている。その中の第3段階「副詞的修飾」について、以下のような基準を決定している。

#### 基準A 項の生起

三宅(2005)では、現代日本語における文法化について議論されている。そのうち、動詞の文法化の認定基準について、「項の生起」を挙げている。例えば、以下のような例を挙げて説明している。

- (8) 彼はその虫を箱からつまみ出した。
- (9) 虎が檻から逃げ出した。
- (10) 赤ん坊が泣き出した。

上の例(8)の「～出す」は起点を表す項「箱から」が生起していることから、本動詞としての性質を維持しているが、(10)の「～出す」ではそのような項の生起は見られず、意味も抽象化され、アスペクト的な意味になっていることから、文法化が進んでいるとみなし得る。そして(9)のような「～出す」は両者の中間段階とみなすことができる。起点を表す項も生起し、移動という本来の意味も残している点では本動詞性を完全には失っていないが、本来他動詞であるものが自動詞的に使われるという他動性の不調和が見られるという点では、本動詞性が多少失われ、脱範疇化が起こっているとも言えるからである。

(三宅 2005 : 66 をもとに作成)

本論文では、複合動詞後項が「副詞的」意味になるものの認定基準について、三宅(2005)の認定基準を援用している。これを複合動詞「～上げる」に適用してみると、以下ようになる。

- (11) 冷蔵庫を一階から二階に運び上げた。
- (12) 彼は弟子を立派な料理人に育て上げた。

(11)の「～あげる」は、項「一階から二階に」が生起していることから、本動詞と

しての性質が維持されていると言える。それに対して、(9)の「～あげる」は、項「料理人」の生起が見られない。この場合、(12)の「～あがる」の意味が抽象化していることが認定できる。

基準 B 複合動詞全体が「副詞＋前項動詞」に言い換えられる

副詞といっても、いろいろなタイプのものがある。具体的に、①強い程度を表す「強く、激しく、ひどく」など、②量の多いのを表すもの、例えば、「大量に、たくさん、いっぱい」など、③時間の長さを表すもの、例えば、「ずっと、長時間にわたって」など、④頻度の高いものを表す、例えば、「頻繁に、よく」などがある。

例えば、以下の例文があげられる。

(13) 男たちに殴りつけられるたびに、剛太の悲鳴がどんどん大きくなっていた。

(BCCWJ 中納言辻仁成『ニュートンの林檎』)

この文において、複合動詞の後項を程度の強さを表す程度副詞に言い換えてみると、以下ようになる。

(14) 男たちに {○強く/○ひどく/○激しく} 殴られるたびに、剛太の悲鳴がどんどん大きくなっている。

これは問題なく成立できる。量の多さや時間の長さを表す副詞あるいは頻度の高さを表す副詞に言い換えてみると、次のようになる。

(15) 男たちに {＊たくさん/＊長時間にわたって/＊頻繁に} 殴られるたびに、剛太の悲鳴がどんどん大きくなっている。

いずれも成立しない。また、程度の弱さや時間の短さ、頻度の低さを表す副詞にも言い換えられない。

(16) 男たちに {＊少し/＊優しく/＊たまに} 殴られるたびに、剛太の悲鳴がどんどん大きくなっている。

上の例はいずれも成立しない。これは「殴りつける」という複合動詞の後項「-つ

ける」は程度の強さを表すものであると説明できる。

主な副詞的ものを以下のような種類がある。

- (17) a. 程度の強さ, 激しさを表す ex. おびえあがる, 叱りつける, 冷えこむ  
b. 様態を表す ex. 睨みつける, 調べあげる, 頼みこむ  
c. 動作の繰り返し・時間の長さを表す ex. 座りこむ, 使いこむ, 走りこむ  
d. 量にかかわるもの ex. 買いこむ, 着こむ

#### 基準 C 前項動詞 V1 が複合動詞の意味の主要部

この点については、松本（1998）でも論じられている。松本（1998）では、2.2.1.6 節でも述べたように、日本語の複合動詞には「前項動詞を意味的主要部とするものⅠ：比喩的様態」及び「前項動詞を意味的主要部とするものⅡ」という2つの分類が認められて、前者は〈あたかも V2 するかのように、V1 する〉という意味関係であり、後者は前項動詞が意味的主要部であり、後項動詞が特定の意味を前項動詞の意味構造の中に加えている、と述べている。それぞれの例は以下のように挙げられている。

#### (18) 前項動詞を意味的主要部とするものⅠ：比喩的様態

咲き誇る, 咲き溢れる, 踊り狂う, 泣き狂う, 咲き狂う, 荒れ狂う, 咲きこぼれる, 思い乱れる, 咲き乱れる, 書き殴る

#### (19) 前項動詞を意味的主要部とするものⅡ

- a. 言い差す, 鳴りやむ  
b. 晴れ渡る, 叱りつける, 静まり返る, 撫で回す, 居合せる, 見上げる  
c. 拾い残す, 取りこぼす, 言い落とす, 聞き逃す

（松本 1998 : 59-60）

本論文の「副詞的なもの」と関連しているので、ここでもう少し詳しく見ていくことにする。「前項動詞を意味的主要部とするものⅠ：比喩的様態」については本論文の研究対象ではないため、ここでは除外しておく。「前項動詞を意味的主要部とするものⅡ」の一部は本論文の研究対象と同じである。研究対象から見れば、松本（1998）は複合動詞全体を研究の対象としていて、本論文と異なる。また、分析の視点から見ると、松本（1998）は項構造の制約の観点から複合動詞の前項と後項の関係について論じた上で、複合動詞を分類した。本論文は後項の意味的抽象化の観点から後項の意味が本義からどのように抽象化しているのかについて分析している。分析の視点と分

類の基準も異なる。

また、ここで論じている「意味の主要部」と「左側主要部」は違う概念である。影山（1993）により、日本語の複合動詞は一般的に「右側主要部の規則」が成立し、「古本」「奥深い」のように、それぞれ右側の「本」「深い」という部分が複合語全体の品詞性を決めているので、右側が主要部になる（影山 1993 : 21）。しかし、複合動詞の場合、どちらの構成要素も動詞なので、(20)のように V2 の選択制限が複合動詞に継承される現象が見られる。すなわち、V2 が語彙的複合動詞の主要部であることがわかる。

- (20) a. 服を洗う, 汚れを落とす  
→ 汚れを洗い落とす, \*服を洗い落とす  
b. ビンを振る, 中身を混ぜる  
→ 中身を振り混ぜる, \*ビンを振り混ぜる

(影山 1993 : 104)

「左側主要部」における「主要部」は統語的概念で、合成語全体の範疇（品詞性）を決定する要素である。「意味の主要部」における「主要部」はただ意味から見れば、合成語の意味の中心的要素であることがわかる。

### 〈注〉

1. 主体や対象物の位置が変化することを表す動詞。例えば、「流れる」、「転がる」、「回る」などは移動動詞に属する。
2. 本動詞「こむ」には「移動」という意味を表さないが、姫野（1999）と同じように、複合動詞後項として、その基本義が「内部移動」を表すものとして扱う。

## 第4章

### 本研究の目的とその構成

#### 4.1 はじめに

本章は、本研究の目的を述べて、その構成及び既発表論文の関係についてまとめるものである。

#### 4.2 本研究の目的

本論文は、複合動詞の中の生産性の高い複合動詞後項に注目して、同じ後項でも、前項動詞によって、意味が異なることに基づき、それをきっかけにして、生産性の高い複合動詞後項をいくつか取り上げて、それぞれの意味がどのように変わってくるのかについて分析を行ったものである。また、それぞれの意味の抽象化を段階的なものとして捉えて、それぞれの意味は「原義・方向」、「アスペクト」、「副詞的修飾」、「モダリティ（評価・感情的意味）」の4段階に分け、それぞれの意味が「原義・方向」→「アスペクト」→「副詞的修飾」→「モダリティ（評価・感情的意味）」という方向性を持っていると論じる。移動動詞を後項とする複合動詞のグループで、このような意味的抽象化の傾向が観察されることが考えられる。また、4段階の中で、「副詞的修飾」というものは今まで先行研究では詳しく論じられていないことで、本研究においてその規定を記述し、意味的・統語的特徴を分析することによって「副詞的修飾」のグループを明らかにすることを目的とする。なお、ここで述べた「方向性」は通時的概念だと思われるが、本論文では、通時的ではなく共時的概念になることを断っておく。



### 4.3 本論文の構成

本論文は「序論」、「本論」と「結論」3つの部分、計12章から構成されている。各部および各章の主な内容は以下になる。

「序論」：4章から構成される。本研究の導入として、「複合動詞の後項の意味的抽象化」という概念および現象について紹介する。また、複合動詞の先行研究と本研究の立場、目的と構成などを述べておく。

第1章：複合動詞後項の意味的抽象化の現象および概念を説明し、本論文の論じようとするものの前提を提示する。

第2章：複合動詞の全体に関する先行研究の概観、後項の意味的抽象化に関わりのある先行研究をまとめる。

第3章：先行研究を概観した上、先行研究の問題点を提示する。また、本研究の立場を述べる。

第4章：本研究の目的、各部と各章の構成について紹介する。

「本論」：2つの部、8章から構成されている。第Ⅰ部は、個別の複合動詞を取り上げて、それぞれの後項において、本動詞の意味から拡張義までの意味派生のプロセス、意味的特徴などを考察することによって、後項における意味的抽象化の方向性の傾向について論じるものである。第Ⅱ部は、これらの複合動詞後項における意味的抽象化の方向性における「副詞的修飾」を表すグループについて考察し、それぞれの意味的特徴、「副詞的修飾」のあり方及び生じる要因について論じるものである。

第Ⅰ部：「複合動詞後項における意味的抽象化のケーススタディー」：4章から構成されている。複合動詞後項の例をいくつか取り上げて、それぞれの意味的抽象化を分析している。

第5章：認知意味論の観点から、日本語複合動詞「～こむ」類と中国語複合動詞「～进／入」類の意味について、どのように拡張しているのかを考察している。

第6章：認知意味論と文法化の視点から、上昇を表す日本語複合動詞「～あげる」と中国語複合動詞「～上」の意味について、基本義から拡張義までの意

味発展のプロセスを明らかにするものである。

第 7 章：本動詞と複合動詞の後項との関連から複合動詞「～つける」の意味的抽象化について考察している。

第 8 章：移動を表す場合の複合動詞後項における意味的抽象化の方向性について論じている。

第Ⅱ部：「複合動詞後項における「副詞的修飾」について」：4 章から構成されている。後項動詞が具体的にどのように前項動詞を副詞的に修飾しているのかについて説明している。

第 9 章：強調を表す複合動詞後項の場合，そのあり方について考察している。

第 10 章：複合動詞後項「～こむ」について，後項がどのように前項を修飾しているのかについて論じている。

第 11 章：複合動詞「～つける」について，後項が前項を副詞的に修飾する場合のあり方およびその成立要因を分析している。

「結論」：本研究のまとめ，研究の意義と残った課題について述べる。

#### 4.4 既発表論文との関係

本論文の第 5～10 章は，これまでに発表した論文を加筆修正したものである。以下，各章と既発表論文の関係を記しておく。

第 5 章：

王秀英 (2012) 「日本語の複合動詞「～こむ」類と中国語の複合動詞“～进/入”類との対照研究－認知意味論からのアプローチ」『言語科学論集』16

第 6 章：

王秀英 (2014) 「上昇を表す複合動詞の日中対照研究－「～上げる」と「～上 (shang)」を対象として－」『文化』77，第三・四号，東北大学文学研究科研究年報

第 7 章：

王秀英 (2015) 「複合動詞「～つける」の後項の意味について－本動詞との関連から

一」『国語学研究』54, 東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会

第8章:

王秀英(2016)「複合動詞後項における意味的抽象化」『言語科学論集』20, 東北大学大学院文学研究科

第9章:

王秀英(2014)「強調を表す複合動詞後項の成立要因についてー「～こむ」と「～きる」を対象としてー」『言語科学論集』18, 東北大学大学院文学研究科

第10章:

王秀英(2014)「複合動詞の後項が前項を意味的に修飾する場合についてー「～こむ」を対象としてー」『国語学研究』53, 東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会

# 本 論

## 第 I 部

# 複合動詞後項における意味的抽象化の ケーススタディー

## 第5章

### 日本語の複合動詞「～こむ」類と中国語の

### 複合動詞“～進/入”類との対照研究

### －認知意味論からのアプローチ－

#### 5.1 はじめに

日本語の複合動詞は日常生活の中でも使用率が高い語彙である。しかし、同じ複合動詞が異なったいろいろな意味を持つという現象も少なくなく、複合動詞の意味を体系的に捉えるのは難しい。

認知意味論では、ある単語がいくつかの意味を持つこと、即ち意味の拡張には人間の身体的経験が背景になっており、また基本義と拡張義との間には関連性があると考ええる。

認知意味論のメタファー、メトニミー、シネクドキーの3つの比喩を用いれば、一つの語の持つ異なる意味同士の間に関連性を明らかにすることが可能であり、山梨（2000：139-140）でも、日常言語の概念構造は、外部世界の知覚、経験を基盤とする様々なイメージ・スキーマによって動機付けられており、我々は、空間認知、運動感覚等に関わる具体的な経験を通して外部世界を意味づけして、状況によって具体的なイメージ・スキーマを拡張し、この拡張されたイメージ・スキーマを介してより抽象的な対象を理解できる、と指摘されている。

そこで、本章では、認知意味論の観点（3つの比喩とイメージ・スキーマ）に基づいて、複合動詞「～こむ」の意味合いと基本義から拡張義までの拡張プロセスについて分析し、日本語の「～こむ」類の複合動詞とそれに対応する中国語の動補式“～進/入”の異同点を明らかにする。

## 5.2 先行研究

姫野（1999）は日本語複合動詞「～こむ」の用法を大きく内部移動と程度進行に2分類している。内部移動を表す表現は「移動先の領域が有する形態の特徴」によって「閉じた空間、固体、流動体、集合体または組織体、動く取り囲み体、自己の内部、その他」の7つに分けられ、程度進行を表す表現は「前項動詞の意味特徴」によって「固着化、濃密化、累積化」の3つに分けられるとしている。

中村（1998）は複合動詞の前項と後項の関係や各項の役割から、複合動詞を性質の異なったいくつかの型に分けて、それぞれの型ごとに多様な表現領域が存在することを指摘している。言語認知の立場から複合動詞「～こむ」の前項動詞の特徴を詳しく分析し、後項動詞との結合の特性について考察している。

松田（2004）は認知意味論の観点から日本語複合動詞「～こむ」が有するスキーマ的な意味についてコア図式を用いて（学習者が理解しやすい一つのモデルで）捉えようとしている。前項動詞に「内部への位置的移動」の意味を含むかどうか、及び、助詞「に」に接続するかどうかの二つの基準によって複合動詞「～こむ」を4つのタイプに分類している。

郑（2007）は日本語の複合動詞「～こむ」には姫野（1999）が指摘した2種類のほか、「ずっと、絶えず」の含意もあると指摘している。

金（2009）は日本語の複合動詞「～こむ」と中国語の“～进”を比較して、中国語の“～进”は、「内部移動」という意味しか持たないが、日本語の「～こむ」は「移動した後の位置に入って、なかなかその中から出てこない」という意味のほか、主体或いは客体が物理的移動をした後の状態をも表すことができると述べた。また、それぞれの構文的特徴についてもまとめている。

金（2010）は「私たちが有する概念構造は身体性を反映するものである」という認知言語学の基本理論に基づき、日本語複合動詞「～こむ」と関わっている身体的・経験的動機付けを3つの側面から検討している。図式を用いることによって、内部移動のほかに、反復の意味にも解釈できる中間段階を経て、反復の意味を有する新しい構文スキーマが抽出できるようになることを示している。また、反復の意味を表す「～こむ」において、前項動詞は、学習やトレーニングのようなドメインを持つ表現に限られる傾向が強いと指摘している。

睦（2012）は「程度進行」の意味を持つ「～こむ」をカテゴリーカルな意味や構文構造により、自他合わせて11のグループに分けた上で、前項動詞の意味特徴、構文構造、例文内で共起する名詞や副詞の意味特徴について、グループ間での比較を行って

いる。

以上、先行研究を概観したが、先行研究においては、複合動詞「～こむ」に含まれるすべての意義を分析しているが、各意味間の関連性、基本義から拡張義までの発展プロセスについては、まだ十分に明らかにされていないのが現状である。

### 5.3 認知意味論について

どのような言語においても、二つ以上の意味を持つ語が数多く存在する。社会の発展にしたがって、言語が際限なく増えていく中で、言語の豊かさを保つとともに、言語使用者の記憶の負担が大きくなるように、既存の言葉を新しい事物や考え方にも用いることになる。語義の拡大はその一種であると言えよう。

言語学習者が、二つ以上の意味を持つ語の意味体系、特に抽象的意味を捉えるにあたっては、山梨（2000：7）によって、言語現象の背後にある感覚的な経験、外部世界との相互作用に根ざす身体的な経験と関連づければ理解が得られやすいである。身体化の立場をとる認知意味論の考え方を利用すれば、それぞれの語の基本義と拡張義の間の関連性、基本義から拡張義までの発展プロセスについて、感覚的に捉えることができると考えられる。

本章では、日本における佐藤（1992）らのレトリック研究の成果（メトニミーの概念を大きく拡張して、接触や部分などの隣接性だけでなく、隣接性は広く理由や因果関係などとしてもよい）を踏まえ、意義拡張のプロセスとしてメタファー、シネクドキー、メトニミーという3つの比喩とイメージ・スキーマを用いて、松本（2003）の3つの比喩の定義に基づき、日本語の「～こむ」類の複合動詞と中国語の動補式“～進/入”を一例として取り上げ分析する。

#### 5.3.1 松本（2003）における比喩の定義

A. メタファー：二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩。

（例）正月休みに食べ過ぎて、ブタになってしまった。

「ブタ」の太っている（と一般に思われている）体型-文を発した人の体型

B. シネクドキー：より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、或いは逆により特殊な意味を持つ形式を用いてより一般的な意味を表す比喩。

（例）花見 「花」-「サクラ」（一般的なもの-特殊なもの）



人はパンのみにて生きるにあらず。「パン」－「食べるもの一般」（特殊なもの――一般的なもの）

- C. メトニミー：二つの事物の外界における隣接性，さらに広く二つの事物・概念の思考内，概念上の関連性に基づいて，一方の事物・概念を表す形式を用いて，他方の事物・概念を表す比喻。

（例）部屋を片付ける。 「部屋」－「部屋の中にある何らかのもの」  
黒板を消す。 「黒板」－「黒板に書かれた文字など」

### 5.3.2 イメージ・スキーマ

辻幸夫（2003：70，135）はイメージ・スキーマ（image-schema）について、「身体が世界と出会うことから直接的に立ち現れてくる知識構造として，イメージ・スキーマがある。イメージ・スキーマには〈上/下〉〈前/後〉〈内/外〉〈中心/周縁〉〈部分/全体〉〈容器〉〈連結〉〈起点/経路/終点〉などがある。イメージ・スキーマは，「イメージ図式」とも呼ばれ，知覚や運動（物の動き）のパターンが反復的に経験されることを通じて抽象化され，形成される前言語的な表象である。身体性を基礎に持つところが特徴的で，①前言語的なレベルで設定されること，②生得的なものがある一方，運動・身体的に繰り返される経験から形成されること，③物理的な事象だけでなく抽象的な事象を把握するための基本ツールになること，に特徴がある」と記述している。また，Johnson（1987：29）は，「イメージ・スキーマとは，私たちの行動，知覚，概念の中に繰り返し現れるパターンや形，規則性のことである」と述べている。

## 5.4 今回の研究対象

日本語の複合動詞「～こむ」は中国語に訳す際，通常は動補式（複合動詞）“～进/入”に訳される場合が多いが，先行研究で指摘されている「内部移動」，「程度進行」，「ずっと，絶えず」，「反復」という意味のみでは，複合動詞「～こむ」の全体の意味を十分に捉え切れていないと考えられる。また，同じ語形の複合動詞が持つ異なる意義同士に関連性も明らかにされていない。

辞書においては，日本語の「～こむ」類の複合動詞と中国語の動補式“～进/入”について，次のように記述されている。（なお，本章では現代語を対象とし，古典語についての記述はここでは含めない）

(1) 日本語の複合動詞「～こむ」

動詞の連用形に付けて用いる。

- ① (自動詞に付けて) あるものの中に入る。「上がりこむ」、「溶けこむ」、「吹きこむ」、「逃げこむ」など。
- ② 十分にする。過度にする。また、長く続ける。「走りこむ」、「老けこむ」、「煮こむ」、「寝込む」など。
- ③ 心がとざされ、他を受け付けない状態です。「考えこむ」、「沈みこむ」、「塞ぎこむ」など。

(『日本国語大辞典』(2001) 第二版より)

(2) 中国語の動補式“～進”と“～入”

・ “～進”

動詞の後に付属してその動作が中へ入り込むことを示す。

闯进去 (飛び込んでいく), 买进一批货来 (品物を買って込んだ) など。

(『岩波中国語辞典』(1990) 簡体字版より)

・ “～入”

外から中に入る。流入 (流れ込む) など。

(『中国語大辞典』(1993) より)

姫野 (1999) は, 「「～こむ」の複合動詞のうち約 8 割は, 主体或いは対象がある領域の中へ移動することを表している。これを「内部移動」と呼ぶ」と述べているが, 以上に挙げた辞書の記述からは中国語の動補式“～進/入”も「内部移動」の意味を表すことがわかる。また, 筆者が日中対訳コーパス (以下「日中対訳」と略する) のデータを分析した結果, 「内部移動」を表す日本語複合動詞「～こむ」のうち中国語の動補式“～進/入”に訳される例が約 85% を占めることがわかった。(以上の辞書における中国語の動補式“～進”と“～入”の解釈はほぼ同じであるため, 本章では“進”と“入”の区別を扱わないこととする。)

## 5.5 「～こむ」と“～進/入”の意味分類

### 5.5.1 「～こむ」の表す意味合い及び意味ごとの統語的特徴

## I 内部への移動を表す

①物理的内部移動を表す……ex. 運び込む, 担ぎ込む, 差し込む, 押し込む, 巻き込む, 飛び込む, 住み込む, 投げ込む, 紛れ込む, 踏み込む, 誘い込む。

動態性の強い動詞が「こむ」と結合した場合, 基本的な用法における動作の移動先は具体的な場所である場合がほとんどである。前項の動詞の影響を受けて, 主体が具体的な場所の中に入ることを表す。

- (1) いっその事角屋へ踏み込んで現場を取って抑えようと発議した。(日中対訳コーパス (以下は「日中対訳」と略する)『坊ちゃん』)
- (2) 窓を開けると、冷え冷えとした秋の夜気が室内へ流れ込んで来た。(日中対訳『あした来る人』)

このタイプの複合動詞「～こむ」は数が多く, イメージ・スキーマ<sup>1</sup>は次の図1のように示すことができる。

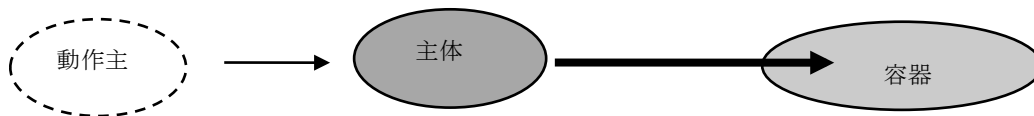


図1 物理的な内部移動を表す複合動詞「～こむ」のイメージ・スキーマ

② 抽象的内部移動を表す……ex. 巻き込む, 押し込む, 落ち込む, 溶け込む, 追い込む, 切り込む, 食い込む, 差し込む, 振り込む, 払い込む, 滑り込む。

派生的な用法としては, 比喻によって物理的な内部移動の意味から派生した用法で, 普通は移動先として具体的な場所が示されないが, 明示されることもある。その場合の動作の移動先は無形になっているため, メタファーの用法を経て意味①から生じた拡張義と言える。

- (3) 日露戦争はこの青年をもまきこんでいった。(日中対訳『近代作家入門』)
- (4) だが, 記憶はそこで, とだえてしまう。あとは, ながい, 息づまるような夢のなかにまぎれこむ。(日中対訳『砂の女』)

このタイプの複合動詞「～こむ」は例文によって, 物理的内部移動と抽象的内部移動を表すことができる。用例数が多く, 上に述べた「物理的内部移動」の意味から拡張

体的なものや場所を指し、「抽象的内部移動」の場合は、移動の主体と容器は抽象化され、具体的なものや場所は無形になって、抽象的なものになる。メタファーの用法を経て生じたものと言える。その時の複合動詞において前項動詞の表す主体の静態性は強いと考えられる。このタイプの複合動詞「～こむ」の表すイメージ・スキーマは次の図2のように示すことができる。

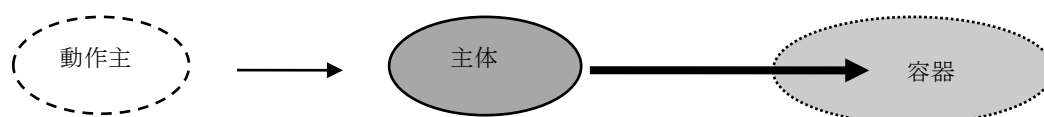


図2 抽象的な内部移動を表す複合動詞「～こむ」のイメージ・スキーマ

Ⅱ 程度進行を表す…… ex. 考え込む、思い込む、決め込む、老け込む、信じ込む、話し込む、せがみ込む、頼み込む、磨き込む、塞ぎこむ、当て込む。

このタイプの複合動詞「～こむ」は、前項動詞が主に主体の状態、感覚、知覚、意識的なもの、或いは状態性を表す場合が多い。

- (5) しかし父は跳びかかるかわりにぐったり身を倒し、そのまま再び眠りこむ様子だった。(日中対訳『飼育』)
- (6) でもね、その女の子の親はそう信じこんでいて、近所の人みんなにそのこと言いふらしてるのよ。(日中対訳『ノルウェイの森』)

このタイプの複合動詞「～こむ」は上に挙げた例のように、前項動詞が主に主体の感覚、知覚、意識、状態的なものであり、「十分に」、「すっかり」、「しっかり」、「ぐっすり」などの程度の強さを表す副詞と共起させることができ、抽象的内部移動を表す意味から転じていると考えられる。これらのプロセスは次の通りである：主体がある「容器」の中に入って、この「容器」の中から「容器」の中心部に移動して、移動した後の状態や結果を保持し続け、結果として「動作・作用の進行にしたがって程度が深くなる」という意味になる。抽象的内部移動からメタファー（経路は抽象的内部移動と同じである）を経て生じると考えられる。これらの複合動詞「～こむ」の表すイメージ・スキーマは次の図3のように示すことができる。

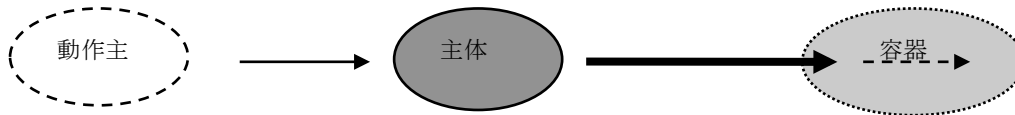


図3 程度進行を表す複合動詞「〜こむ」のイメージ・スキーマ

Ⅲ 前項動詞の動作が長く続くことを表す…… ex. 座り込む, 黙り込む, 走り込む, 鍛え込む, 泳ぎ込む, 歌い込む, 使い込む。

このタイプの複合動詞には, 前項動詞の動態性の強いものと静態性の強いものの両方が存在している。

(7) ただ何をするともなく座りこんだりした。(日中対訳『ノルウェイの森』)

(8) さらにレベルアップを目指し, 冬場は体を鍛え込んだ。(『朝日新聞』2002年3月30日 朝刊)

このタイプの複合動詞はトレーニングに関する動詞が多く, 長時間にわたってある動作や行為を行って, 累積して一定の結果を生じると考えられる。ただし, (7) のような例では, 前項動詞の静態性が強く, 複合動詞全体がある状態の続くことを表すのに対して, (8) のような例では, 前項動詞は動作性が強く, ある動作や行為の続くことを表す。これらの複合動詞の後項動詞「こむ」は副詞「ずっと」或いは動詞「続ける」に言い換えられると考えられる。動作性の強い例文において, 時間の長さを表す時間副詞や頻度の高さを表す成分と共起する場合が多いため, 主体の意図性が強い。これらの複合動詞「〜こむ」の表すイメージ・スキーマは次の図4のように示すことができる。

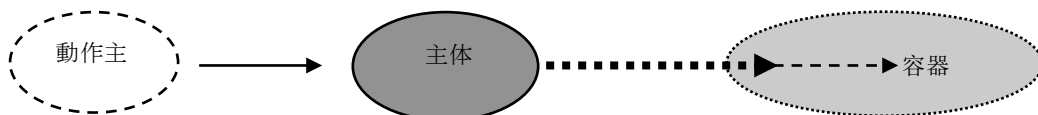


図4 前項動詞の動作が長く続くを表す複合動詞「〜こむ」のイメージ・スキーマ

Ⅳ 前項動詞の動作や行為の量の多さ(過度)を強調する…… ex. 着込む, 立て込む, 使い込む, 買い込む。

これらの複合動詞の後項「こむ」は主に主体や客体の動作は一定の量をオーバーするという意味を強調している。

- (9) 彼女は風邪のせいで、浅ましく着込んでいました（現代日本語書き言葉均衡コーパス 『天才博士の奇妙な日常』 2001）
- (10) 災害に備えて食料品を買い込む。（『三省堂 スーパー大辞林』）

このタイプの複合動詞は、副詞「たくさん」と共起させることができる、複合動詞における前項動詞の動態性が薄く、静態性が目立っていると言える。特に後項の「こむ」と結びつくことによって、複合動詞全体の静態性がより強くなると考えられる。イメージ・スキーマは次の図5のように示すことができる。

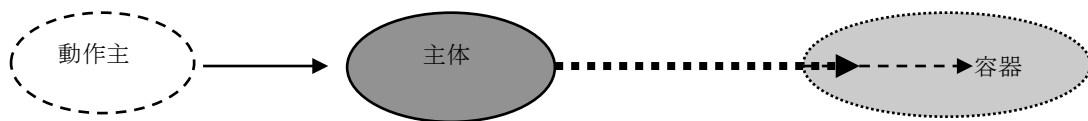


図5 動詞の動作の量の多さを表す複合動詞「～こむ」のイメージ・スキーマ

上に述べたⅢ類とⅣ類の複合動詞「～こむ」は、Ⅱ類の「程度進行」の意味からメトニミー（前項動詞の動作を長く続けることによって程度が深くなる或いは前項動詞の動作を多くすることによって結果として程度が深くなる）を経て生じたものである。このⅢ類とⅣ類の間にもまた、因果関係が存在し、メトニミーによって「前項動詞の動作を長く続ける」の意味から「前項動詞の動作の量の多さ」の意味を生じる（動作・行為の量は動作・行為を長く続けるにしたがってだんだん多くなるという点で、両者の間に因果関係が存在している）と考えられる。

以上の複合動詞「～こむ」の4つの分類のうち、「物理的移動」と「抽象的移動」を表すタイプの場合、前項動詞は動作主或いは主体の動作や行為を表し、後項動詞「こむ」は方向性を表し、前項動詞の補足的な働きをしている。「程度進行」（意味Ⅱ）、「前項動詞の動作を長く続ける」（意味Ⅲ）と「前項動詞の動作の量の多さ」（意味Ⅳ）のタイプにおいて、後項動詞「こむ」の表す意味は程度の強さや量の多さ（意味Ⅳ）と関連性が強く、前項動詞を修飾する役割をしていると言える。

日本語の複合動詞「～こむ」の意味ネットワークは以下の図6のように示すことができる。

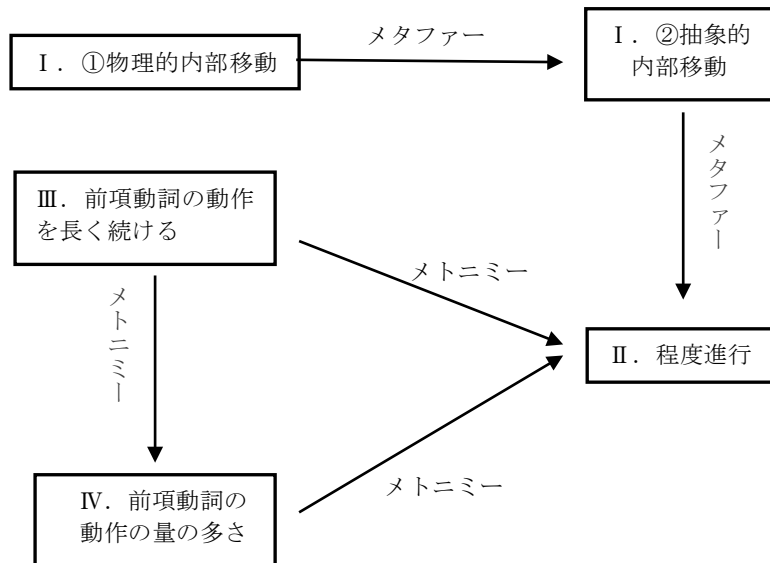


図6 日本語の複合動詞「〜こむ」の意味ネットワーク

複合動詞「〜こむ」には、マイナスの意味で使われる例，プラスとマイナス両方の意味で使われる例，中立的な意味で使われる例なども観察される<sup>2)</sup>。しかし，それらの意味合いは複合動詞自体が持つものではなく，文脈により生じていると考えられる点を補足したい。

### 5.5.2 “〜進/入”の表す意味合い及び意味ごとの統語的特徴

これらの動補式も日本語の「〜こむ」類の複合動詞と同じように，物理的移動を表す用法と抽象的移動を表す用法に分けられる。

内部移動を表す

① 物理的内部移動を表す……ex. 卷進，插進，拍進，插入，流入など。

この用法の場合は移動先として具体的な場所やスペースが明示される例が多い。

(13) 一个人不行，圆木会把人也拖进洪流。(日中对訳《插队的故事》)

訳文：ひとりが失敗すると，丸太は人間を濁流の中に巻きこむ。

(14) 维嘉趁机纵身跳下高台，混入人群。(日中对訳《轮椅上的梦》)

訳文：維嘉は演壇の下に身を踊らせ、聴衆の中に紛れ込む。

② 抽象的内部移動を表す……ex. 卷进，走进，跌进，渗入，陷入など。

前項動詞は，主体が目に見えない「容器」の中に入ること，後項の補語は動作の発

生後の主体の状態を表す。「容器」が無形化した、抽象的な用法である。

(15) 不是倪萍也被汹涌前进的革命的洪流卷进去了吗？（日中对訳《活动变人形》）

訳文：倪萍でさえほうはいと逆巻く革命の激流に巻き込まれていったではないか。

(16) 他知道自己已经落入了深渊，已经没顶。（日中对訳《活动变人形》）

訳文：底なしの淵に陥ちこんで頭まで没した彼であったが、やがてそのガニ股の足で再び立ちあがったのは正に奇蹟であった。

この用法は例（15）と例（16）のように、主にある動作によってある結果或いは状態をもたらす、という意味を表す。これは基本義（物理的内部移動）からメタファーを経て拡張された意義（抽象的内部移動）と言える。この場合は動作の移動先は無形になり、「物理的移動」の意味を表す場合は前項動詞の動態性が強いのに対して、「抽象的移動」の意味を表す場合には、前項動詞の静態性が顕著である。

「内部移動」を表す中国語の動補式“～进/入”のイメージ・スキーマは内部移動を表す複合動詞「～こむ」（図1と図2を参照のこと）と全く同じであるため、ここでは省略する。

中国語の動補式“～进/入”の意味ネットワークは以下の図7のように示すことができる。

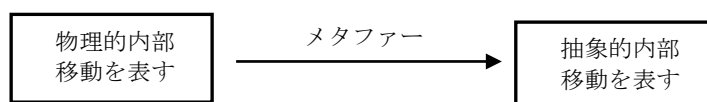


図7 中国語の“～进/入”の意味ネットワーク

## 5.6 まとめ

以上、日本語の複合動詞「～こむ」と中国語の動補式“～进/入”のそれぞれの意味合いと意味ごとの統語的特徴を認知意味論の立場から分析した。その結果、以下の3点が明らかになった。

①日本語の複合動詞「～こむ」類と中国語の動補式“～进/入”類のそれぞれの各意味間の関連性と意味拡張のプロセスが明らかになった。

②物理的内部移動と抽象的内部移動（意味Ⅰ）を表す時、「～こむ」類と“～进/



入”は対応しているが、日本語の複合動詞「～こむ」の持っているほかの意味（意味ⅡⅢⅣ）を中国語の動補式“～進/入”は持っていないため、両者は完全には対応していないことが判明した。

- ③意味拡張の方法において、日本語の複合動詞「～こむ」はメタファーとメトニミーを経て、意味の拡張を実現させているが、中国語の複合動詞“～進/入”は、メタファーのみを通して意味を拡張させていることがわかった。

日本語の複合動詞「～こむ」が中国語の動補式“～進/入”よりも広義であることの原因については今後の課題として、方向性を表す複合動詞の日中対照を通して明らかにしていきたい。

### 〈注〉

1. 本章の図1から図6において、細い点線は抽象的な場所を表し、太い点線は必ずしも存在するわけではないことを表し、実線は必ず存在することを表す。細線矢印は動作主が主体に力を加えることを、太線矢印は主体の移動を表し、細い点線矢印は主体の状態変化を表し、太い点線矢印は時間の経過を表す。また、自動詞の場合、動作主と移動の主体がイコールの関係である場合が多い。
2. マイナスの意味で使われる例：「泥棒が入り込む」、「他人の家に住み込む」、「肉片を丸ごと飲み込む」、「学生がテスト中に禁じられた本を持ち込む」、「自宅へ人質を連れ込む」。プラスとマイナス両方の意味で使われる例：「公金を使い込む」と「使い込んだ万年筆」、「売り込んだ商標」と「情報を売り込む」（修飾成分として使われる場合はプラスの意味、述語成分として使われる場合はマイナスの意味を表すことが観察される）。具体的な位置移動を表す場合は中立的な例が多い。

## 第6章

### 上昇を表す複合動詞の日中対照研究

#### －「～上げる」と「～上(shang)」を対象として－

##### 6.1 はじめに

現代中国語において、動詞に方向性概念を付与する場合、動詞の後ろに方向性を示す趨向動詞（例えば上への移動を表す動詞“上”と下への移動を表す“下”などが挙げられる）を後接するが、それは日本語の「運び上げる」、「舞い落ちる」などの複合動詞に相当する（混乱を避けるため、本章では日本語複合動詞を「」で示し、中国語複合動詞を“”で示す）。この方向性を表す後項動詞は「方向補語」と呼ばれ、『現代中国語文法総覧』（1996）によると、中国語の方向補語は単純方向補語の“上・下・来・去・进・出・回・过・到・起・开”と、“来・去”が他の単純方向補語と結びついた複合方向補語に分けられる<sup>1</sup>。中国語の「動詞＋方向補語」は日本語の複合動詞に相当するので、本章ではこれを中国語の複合動詞として扱う。

先行研究の中で、上昇を表す日本語複合動詞を考察対象として分析を行ったものとしては主に姫野(1999)、日中の複合動詞を対照させたものとしては待場(1992, 1993)、左(2008)、陳・王(2011)がそれぞれ指摘できる。また、中国語の「V＋方向補語」を考察対象として分析を行った先行研究としては主に黄(2002)などが挙げられる。それぞれ方向性を表す日本語の複合動詞と中国語の複合動詞を考察し、両形式の意味特徴などを分析しているが、同じ複合動詞の持っている異なった意味間の関連性、両言語の相違点が生じる原因についてはまだ解明されていない。

本章では、上昇を表す日本語の複合動詞「V＋上げる」（以下「～上げる」と略す）と中国語の複合動詞「V＋上」（以下“～上”と略す）を取り上げて、それぞれの意味による特徴を明らかにし、両者の意味拡張における異同点を考察した。

## 6.2 先行研究

待場（1992, 1993）は中国語の形容詞または動詞の後ろにくる方向補語で、空間的移動の方向性を表すではなく、派生義を表す場合について、「(1) 動詞または形容詞と方向補語の組み合わせが限定的であるかどうか、(2) 限定的なものについて、動詞または形容詞に共通の類型が認められるかどうか、(3) 語義的に見て、日本語との対応関係が成り立つかどうか、(4) 日本語と対応関係が成り立つ時の訳語が適当かどうか」という4点から考察している。

姫野（1999）は日本語の複合動詞「～あがる」と「～あげる」を後項動詞の意味的役割によって分類し、それぞれの用法について考察した。また、語構成の面から「自立V+自立Vのグループ」（「V」は「動詞」を表す、以下同様）と「自立V+付属Vのグループ」の2つのグループに分け、主に「自立V+自立Vのグループ」に対して詳しく分析し、この2つの複合動詞の構文形式、格助詞、前項動詞の自他性、後項の担う意味をそれぞれ考察した。結果をもとに、「～あげる」をその意味によって次のように分類した。①上昇、②上位者が下位者へ或いは下位者が上位者への社会的行為、③体内の上昇、④完了・完成、⑤強調、⑥その他の6分類である。

黄（2002）は「低位置から高位置へ移動する」意味を表す“V+上+L”（文中に共起する場所目的語を「L」とする。例えば、“他跳上椅子”“彼は椅子に飛び上がった”）構文において、“上”が表す意味と統語的機能を、Lに付加される方位詞の観点と別の方向性動詞が構成する“V1+V2+L”（例えば、“他刚才跑出教室”“彼は先ほど教室を走り出た”）構文との比較によって、明らかにすることを試みている。結論として、“上”と共起する名詞的成分「L」を「着点」とするには不整合性があるということ、“V+上+L”構文は、移動の「地点」に焦点が置かれるのではない、即ち「着点」指向ではなく、“上”と共起する名詞的成分は、上向きの移動動作が作用するモノ（「地点」）を対象化し取り立てる機能を有しているということ、を指摘した。

左（2008）は「上」と「下」のイメージ・スキーマの日本語と中国語におけるパターンを提示することによって、それぞれのタイプの比較を行い、それぞれのイメージ・スキーマの認知プロセスにおける捉え方について考察した。その結果、「トラジェクター、経路、ランドマークの3つの要素とその間の相互関係は認知的な構成になっている。「上」と「下」の表現を考える場合、場所・空間の認知のドメインを背景としてプロファイルされるトラジェクターとランドマークの関係から分析すれば、人間の認知構造が明らかになると思われる」と指摘している。

陳・王（2011）は日野資成によって定められた文法化の基準（意味の稀薄化）に従

い、日本語の複合動詞「V-上げる」と中国語の“V-上”に関し文法的・表現的機能から両者における文法化の相違点について考察した。陳・王（2011）では、日本語の複合動詞「V-あげる」を①文法的機能（「終了」というアスペクト）と②表現的機能（強意の意味添加、謙譲の意味添加、プラスイメージ添加）に分類した。また、中国語の“V-上”を文法的機能（「終了」というアスペクト表現、「開始」というアスペクト添加）と表現的機能（プラスイメージの意味添加）に分けた。

以上、上昇を表す日本語の複合動詞と中国語の複合動詞についての先行研究を概観した。それらの先行研究の記述を踏まえると、同じ形式の複合動詞の持つ異なった意味間の関連性、上昇を表す日中両言語の複合動詞の意味派生のプロセス、意味派生上の共通点と相違点について、先行研究ではまだ十分に解明されていないと言える。

### 6.3 研究対象及び研究方法

上昇を意味する複合動詞は日本語には主に「～上がる」、「～上げる」、「～のぼる」がある。中国語には2種類あり、単純方向補語の“～上”、“～起”と複合方向補語の“～上来”、“～起来”を指摘できる。先に述べたように、日本語複合動詞「～のぼる」は上昇を表すが、造語力が弱く、用法も限られているため、本章では扱わないこととする。また、「～上がる」の用法は多岐にわたっているが、紙幅の制限のため、これも本章の研究対象の範囲に入れず、他の機会に譲りたい。また、中国語複合動詞“～起”の後ろには普通“来”「てくる・ていく」という視点が入ってくるので、本章はこれを扱わないことにして、日本語複合動詞「～上げる」とそれに対応する中国語“～上”を取り上げて分析した。

本章で扱った日本語複合動詞の例文は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下「BCCWJ」と略す）、『中日対訳コーパス』（第1版、北京大学日本学研究センター、以下「中日対訳」と略す）から検索したもので、中国語の例文は『北京大学中国語言語学研究センターコーパス』（以下「CCL」と略す）、『中日対訳コーパス』と『現代中国語文法総覧』から収集したものである。

### 6.4 文法化における位置づけ

宮下（2004）によると、文法化（grammaticalization）とは、文法が生じてくるプロセスを指す用語である。宮下（2004）は次のように述べている。

- (1) 例えば日本語の格助詞や、「見た」の「た」や「食べている」の「ている」のような時制・アスペクトの標識は、文法機能を担う言語形式だと言える。このような解体論的な文法の捉え方に立つと、文法化とは開いたクラスに属する形式が、格助詞や時制・アスペクト標識のような閉じたクラスに属する形式へ、さらに閉じたクラスに属する形式が、別のさらに閉じたクラスの形式へと変化する過程と捉えることができる。文法化研究では、文法化の流れが大局的に見てレキシコンから文法へと進んでゆくと把握されることも多い。その際、両者の境界は連続的なものと見なされる。

(宮下 2004 : 21 をもとに作成)

## 6.5 「～上げる」の意味的特徴及び文法化のプロセス

### 6.5.1 日本語複合動詞「～上げる」の意味と特徴

本章では姫野 (1999) の分類をもとに、日本語複合動詞「～上げる」の意味と特徴をまとめて以下のように5種類に分ける。

- ① 上への空間的移動を示す。ex. 抱き上げる, 持ち上げる, 拾い上げる, 吸い上げる, 押し上げる, 投げ上げる
- (2) トラ吉は、子犬を抱き上げるとアパートに入っていった。(BCCWJ 那須正幹 (著)『どろぼうトラ吉とどろぼう犬クロ』)
- (3) ポンプで水を吸い上げて, それをかけて火を消します。(BCCWJ『自動車・飛行機』)
- (4) 海岸まで流された冷蔵庫も運び上げ, がれきを手作業で取り除いた。(BCCWJ『西日本新聞』)

このタイプの複合動詞の後項は動作主が上へある動作を行うことを表し、前項動詞は主体自身或いは客体の空間的移動を発生させる動詞である。動作主の動作によって主体或いは客体が位置の低いところから高いところへ移動する<sup>2</sup>ことを表し、空間的移動と呼ばれる。これは両言語の複合動詞の基本義と言えよう。

- ② 上への抽象的移動を表す。ex. 繰り上げる, 競り上げる, 切り上げる

- (5) 二千四年度改定で、基礎的財政収支が黒字化する目標年度を二千十二年度に、  
一年繰り上げました。(BCCWJ『国会会議録』)
- (6) 彼は、私が患者を見舞う時間を早く切り上げさせようとはしなかった。(BCCWJ  
ディック・フランシス (著) 菊池光訳『告解』)
- (7) 担当者が、事故後、六百万円を支払うはずだったにもかかわらず、二百五十  
万円から交渉して小刻みに競り上げたことにたいする彼の怒りだった。(BCCWJ  
鎌田慧 (著)『この国の奥深く』)

このタイプは対象物が時間や数字などを表すもので、空間的移動ではなく、抽象的な数字や序列などの上昇を示していると考えられる。これは数字や序列の低い方より高い方が上の位置に置かれているためと想像できる。(5) と (6) は時間を表すものであり、(7) は金額の量を表し、両者とも同じように数字で示されているものであると考えられる。このタイプは空間を表すものから時間或は抽象的なものへの拡張である。

- ③ 社会的行為の上下関係を示す。ex. 借り上げる、買い上げる、召し上げる、差し上げる、存じ上げる、申し上げる
- (8) 紀ノ国屋は、買い上げる品物が多ければもちろん配達してくれる。(BCCWJ  
江藤淳 (著)『妻と私』)
- (9) 中村雅敏の息子をどう思いますか？  
ごめんなさい、存じ上げません。(BCCWJ『Yahoo!知恵袋』)
- (10) 所得の半分は国に召し上げられる。(BCCWJ 大前研一 (著)『新・国富論』)

このタイプにおいて、前項動詞は思考、言語活動を表す動詞或いは活動動詞であることが観察される。主体と客体の間に地位的な差異が存在する、国、官庁、大手会社と国民、個人、小さい会社の間の社会行為を表す。尊敬或いは謙譲として使われる場合もあり、日本語の敬語において広く使われる。地位が自分より高い相手に対して、ある動作を行う時、その動作も相手を高いところに置くように使う。この場合、主体にとって、相手を自分より地位の高い方とみなしている心理的イメージを表す。「空間的移動」と同じように下から上への移動を表し、空間的移動から心理的移動への拡張であると考えられる。

- ④ 程度の強さを強調する。ex. 鍛え上げる, 締め上げる, 調べ上げる, 絞り上げる

- (11) ところが度々雑誌記者におだて上げられる中に, この成功者は自分を若いものの師表と思い込むようになった。(BCCWJ 佐々木邦 (著) 『ガラムサどん』)
- (12) 相手組織の幹部を尾行して, 待機場所から本人の自宅, 女の住所, 勤め先…と, みんな調べ上げてますよ。(BCCWJ 向谷匡史 (著) 『ヤクザという生き方』)
- (13) 毎夜クラブで即興的にパフォーマンスを繰り広げ, 観客の反応を確かめながら, 作品を練り上げていく。(BCCWJ 三重亀太郎 (著) 『weekly ぴあ』)

このタイプの複合動詞は前項動詞に強意の意味を添え, 「十分に～する」, 「強く～する」, 「すっかり～する」などに言い換えられる。意味①は単純に位置的上昇を表すが, 意味④は動作の程度や状態を高くすることを意味する。これは「空間」から「質」への拡張と考えられる。複合動詞「～上げる」の場合, 強意の意味を添加した後の意味は単独の前項動詞の意味と比べると, 高い「程度」を表している。或いは, 状態が高くなるということを意味している。元の状態に比べて, 強意の意味を添加した後の方がもっと高い「位置」に置かれていると考えられる。このタイプの複合動詞は後項動詞が前項動詞を修飾する働きをしている。

- ⑤ 完成・完了を表す。ex. 炊き上げる, 築き上げる, 作り上げる, 焼き上げる, 刷り上げる

- (14) 一体どうやったらこんな複雑な糸を絡ませること無く, 一本に編み上げることが出来るのか……。 (BCCWJ 『Yahoo! ブログ』)
- (15) 歳月に洗われ, 織り上げられた事件の糸目だけが残っていく。(BCCWJ 松谷みよ子 (著) 『松谷みよ子の本』)
- (16) 國男氏は今日の武田薬品を築き上げた五代目の祖父と六代目の父のもとで育った。(BCCWJ 小林隆次・武田国男 (著) 『落ちこぼれタケダを変える』)

このタイプの複合動詞の後項は終了を表す「終える」或いは「終わる」に言い換えることができる。また, 前項動詞にアスペクト (動作の終了) の働きを加えている。主体はある目的を達成するために, 絶えず努力してきて, やっとある動作・行為を完成させる, というプロセスを有している。動作全体のプロセスから見ると, 段階的に

上へ発展するようなイメージを与えており、上への方向性が観察される。それと同時に、動作・行為の進行に伴って、完成した量も次第に多くなっており、全体から見れば、累積した結果として見ることも可能である。まだ完成していない動作に比べて、完成した動作の質が高いというニュアンスもあるため、意味①から生じた派生義と考えられる。動作が時間軸において「動作の完了」という点まで到達していることを表している。

以上の5分類で日本語複合動詞「～上げる」の意味・用法のすべてが明確に分けられるわけではなく、各分類の間に曖昧なところも存在している。その他、文脈によって同じ複合動詞の有する意味が変わってしまう場合もある（例えば、「読み上げる」は場合によっては「大きな声で読む」とも「最後まで読む」とも読み取れる）。また、前項動詞が後項動詞と一体化していて、分離できない例（例えば、「でっち上げる」）もある。この点については、おそらく歴史的な問題もあると考えられる。本章では、それらの文脈による意味と歴史的な問題を扱わないこととして、研究対象から除外した。

## 6.5.2 日本語複合動詞「～上げる」の文法化のプロセス

上で見たように、日本語複合動詞「～上げる」の持っている意味はお互いに独立したものではなく、関連しているものであることがわかった。つまり、同じ形式を持っている複合動詞の各意味間には連続性が見られるということである。各拡張義は基本義「空間的上昇」から派生したことが観察されるが、これは後項動詞の文法化であると言える。

上で述べたように、複合動詞「～上げる」は次の5種類の意味を持っている：①上への空間的移動を示す、②上への抽象的移動を表す、③社会的行為の上下関係を示す、④程度の強さを強調する、⑤完成・完了。

「上への空間的移動」は基本的意味で、具体的に対象物が実際にあるところ（A）から他のところ（B）へ移動することを表す。図で示すと以下の図1のようになる。（白い丸は対象物、実線矢印は移動そのものを表す）

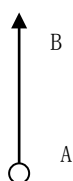


図1 「上への空間的移動」を表す意味



これに基づいて考えると、意味②は視線、数字、時間や序列などの移動を表し、移動先が空間的場所ではなく、目に見えない抽象的場所であり、対象物も具体的なものではなく、視線や時間、金額を示す数字などの抽象的なものである。この場合、「上への空間的移動」を表す意味と同じような経路を持っているので、全体的に上への移動として理解できると思われる。時間の前後順序を表す場合では、ある時点を基準にして、この基準点の前の段階に位置する時間帯は「上」として捉えられる。視線の移動を表す場合は「見上げる」が例として挙げられる。前項動詞「見る」は移動動詞ではなく、動作主自身は移動せず、ただ視線が上へ移動することを表すので、前者と違ったところがある。これは複合動詞「～上げる」の意味拡張の最初の段階であると思われる。

日野（2001）では、文法化は3つのタイプに分けられている：抽象化（意味は具体から抽象へと変化し、具体的な意味がなくなる代わりに抽象的な意味が現れる。つまり、意味の喪失は伴わない）、抽出化（もともとの意味の一部が失われる）、意味の希薄化（もともとの意味が失われる。つまり、意味の喪失である）。

日野（2001）の説明を適用すれば、この用法は意味の抽出化であると見なすことができる。つまり、もともとの「対象物全体の上への空間的移動」から「動作主の一部が動作を実施する時に伴った上への方向性」への派生過程である。

これらは「具体的な空間」から「抽象的な空間」への派生であると考えられる。もともとの「空間的移動」の意味が残っているため、移動先が「抽象的な空間」に変わると、複合動詞全体の意味も抽象化してしまう。

意味③の「社会的上下関係を示す」ということは、話者が自分より身分の高い相手にとって、敬意或いは尊敬を表す時に使う。この場合、動詞「上げる」のもともとの「空間的移動」の意味はさらに薄れて、「移動」ではなく、相手を高い位置に置くように対応する「心理的上昇」として捉えられる。この用法は話者の主観性に関わると考えられる。「敬意」の抽出化の段階に属する。この場合、複合動詞「～上げる」の後項はもともとの動詞から離れて、敬語としての働きが見出される。

意味④の「前項動詞の表す動作の程度を強調する」ものにおいては、後項動詞は動詞の働きを失って、だんだん修飾的な働きが現れるようになる。このグループにおいては、前項動詞の表す動作と対象によって、後項動詞「上げる」の表す意味も違ってくる。次の例を見てみよう。

- (17) 後手に縛り上げられた手首が感覚をなくしている。(BCCWJ 野田昌宏(著)『銀河乞食軍団』)

- (18) 刀は重いのでみんな研ぎ上げて細身になっている。(BCCWJ 峰隆一郎 (著)『土方歳三』)
- (19) 参加者たちは、訪れる人の喜ぶ顔を想像しながら心を込めて丁寧に塗り上げている。(BCCWJ『市報かみのやま』)
- (20) バブルの時期に過剰な融資を行って不良債権を積み上げたのは銀行ではなかったのか。(BCCWJ 吉川元忠 (著)『円がドルに呑み込まれる日』)
- (21) もちろん、博奕を打つというわけでもないし、女に入れ上げることもない  
(BCCWJ 峰隆一郎 (著)『奥州の牙』)

上の例を見ると、(17) の場合は、前項動詞に強意の意味を添加しているのみで、動作の実施によって完成物が生まれることはない。(18) と (19) はいずれも対象物の質に関わるもので、前項動詞の表す動作の実施によって完成物の質が高いレベルに達することを表している。(20) と (21) はいずれも対象物の量に関わるもの(例文(20)における対象物は「お金」を指す)で、前項動詞の表す動作と対象物の性質によって、複合動詞「～上げる」の後項動詞が対象物の質を表したり、量を表したりする。動作の程度性の強調は具体的に対象物の量や質によって表現する。「程度の強さを強調する」という意味は意味①「上への空間的移動」を表すものから派生したと考えられる。

意味⑤の「動作の完成・完了」を示すアスペクトの働きは、「上への空間的移動」から「動作の時間軸における完成段階への移動」へ、という発展プロセスとして理解できると思われる。なぜならば、アスペクトは動作が時間軸上で示す段階として捉えられるからである。「空間」から「時間」への派生は日本語だけではなく、多くの言語においても見られる現象である。動作の完成は時間軸上で終了点に置かれ、完成した動作は未完成の動作に比べて、より高い位置にあるものとして捉えられやすいために、「～上げる」は完成度の高い動作・行為を表すようになる。このことは、以下の図2のように示すことができる(Aは動作の開始段階を、Bは動作の完成段階を表す)。

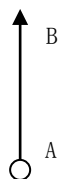


図2 「動作の完成・完了」を表す意味

以上をまとめると、複合動詞「～上げる」の意味派生関係は以下の図3のように示

することができる（矢印は意味派生の方向を表す）。

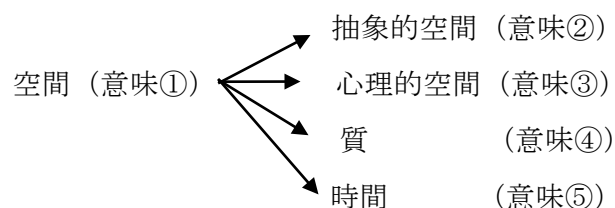


図3 日本語複合動詞「～上げる」の意味派生関係

上で述べたように、複合動詞「～上げる」の意味は意味①から意味⑤まで、もともとの動詞の意味が次第に薄れて、文法化の現象がはっきり現れてくる。それぞれの文法化のプロセスを次のように表1に示すことができる。

表1 日本語複合動詞「～上げる」の文法化プロセス

意味分類	派生関係	文法化の過程	文法化の機能
上への空間的移動 (意味①)	基本義	/	/
上への抽象的移動 (意味②)	抽象的空間への派生	「空間移動」の抽象化	動詞の意味が残っている
社会的上下関係 (意味③)	心理的移動への派生	「敬意」の抽出化	動詞の意味が薄れ、表現的機能が注目される
程度の強調 (意味④)	質への派生	意味の希薄化	修飾的成分 (副詞など)
完成・完了 (意味⑤)	時間への派生	意味の希薄化	アスペクト (終了)

## 6.6 “～上” の分類, 意味的特徴及び文法化のプロセス

### 6.6.1 中国語複合動詞 “～上” の分類及び意味的特徴

本章の中国語複合動詞 “～上” の分類は主に先行研究『現代中国語文法総覧』<sup>3</sup> に拠る。

- ① 上への空間的移動を表す。ex.抱上, 抬上, 扶上, 运上, 拉上

中国語の移動動詞 “跑 (走る)”, “跳 (跳ねる)”, “爬 (這う)”, “飞 (飛ぶ)”, “浮

(浮かぶ)”(日本語の「～上がる」の前項動詞に対応している)、及び客体の位置を変化させる移動動詞“搬(運ぶ)”, “抬(担ぐ)”, “抱(抱く)”(日本語の「～上げる」の前項動詞と対応している)などの動詞と結合して、主体や対象物の低いところから高いところへの移動を表す。これは“～上”の基本義と考えられる。日本語の複合動詞「～上げる・上がる」と同じように、前項動詞の動作によって主体或いは対象物が上へ移動する<sup>4</sup>ことを表し、具体的空間的移動と抽象的移動の両方とも見られる。

- (21) 它是被火焰龙卷风吸上去, 因为滴溜乱转了一阵, 所以圆得象团子一样了。

火焰の大竜巻に吸いあげられて, きりきり舞いしたから団子のように丸まったらしい。(日中対訳『黒い雨』)

- (22) 中国教育也要跟上经济发展的步伐。(CCL)

中国の教育も経済発展のスピードを追い上げなければならない。(筆者訳)

- ② 動作の結果を表す。ex. 考上, 当上, 过上, 买上, 买上

このグループは、前項動詞が主に“吃(食べる)”, “买(買う)”, “还(返す)”, “考(受験する)”, “当(〈職業や身分を表す名詞〉になる)”であり、それと結びついて、「初期の希望や目的を達成した」という意味を表すが、「なかなか達成しにくい」, 「一生懸命がんばったからこそこの好ましい結果」というニュアンスを含んでいる。前項動詞の動作によって主体に望ましい結果が生じるということが注目されている。前項動詞には意志性の強いものが多い。

- (23) 考上大学。(CCL)

大学に合格する。

- (24) 当上演员。(CCL)

俳優になった。

- (25) 为了你, 为了咱们今后能过上好日子, 我什么也不管了! (中日対訳《金光大道》)

あんたのため, おれたちが, これから幸せになるためなら, ほかのことはどうでもいい!

このタイプは動作の累積した結果とみなしてもいいと思われる。“考上”, “当上”の後項動詞“上”は前項動詞の動作を行った主体の変化後の結果を含む、動作が完成

した後の好ましい結果が読み取れる。意味①から生じる拡張義と考えられる。前項動詞の動作によって、良い結果が出てくることを表す。対象物がある基準点に達した時の結果として捉えられる。例えば、“考上”の場合、受験する（“考”）という動作によってある点数（レベル）に達したら、「合格した」（“考上”）になる（つまり、受験する（“考”）という動作だけでは「合格」（“考上”）したかどうかわからない）。動作と結果の間に因果関係があると考えられる。

③ 密着，付着している状態を表す。ex. 缝上，关上，闭上，穿上，戴上

(26) 戴上眼镜。(『現代中国語文法総覧』)

メガネをかけている。

(27) 穿上衬衣。(『現代中国語文法総覧』)

ワイシャツを着ている。

(28) 关上门。(『現代中国語文法総覧』)

ドアが閉まっている。

このタイプは意味②と違って、動作を行った結果、対象があるものに付着・密着した状態を表す。「過程」から「状態」への変化である。つまり、「メガネをかける」（“戴眼镜”）という動作の終了に伴って、その結果「メガネをかけている」という状態が生まれ、「ドアを閉める」（“关门”）という動作をした結果として「ドアが閉まっている」という状態が生まれるということである。もともと動作の過程を指していた語が、動作が完了した後の状態を指すようになったものと考えられる。これは意味①から派生した用法である。前項動詞の動作によって対象物の移動した後の状態（ある物に付着・密着した）になるものと捉えられる。動作の完成と同時に対象物の状態も変化しているため、動作と結果の間に因果関係が存在していると思われる。これはアスペクトの働きをしていると考えられよう。また、このタイプは前項動詞が動作主の意志的・瞬間的動作を表す場合が多いことが観察される。

④ 動作や状態の開始を表す。ex. 好上，喜欢上，爱上，看上，骂上

(29) 看上书了。(『現代中国語文法総覧』)

本を読み出した。

(30) 这之后大约半年，随随和碧莲好上了。(中日対訳《插队的故事》)

それからおよそ半年後、随随は碧蓮といい仲になった。

- (31) 据说玲子爱上了这个青年。(中日対訳《红高粱》)

玲子はその若者が好きになったらしい。

このタイプは、新たな事態の発生として認識され、動作が起こるイメージを“上”で表す。前項動詞に「開始」のアスペクトの意味を添加すると考えられ、よくテンス・アスペクトの標識“了”と結びついて、「無から有」、「静態から動態」への状態変化といった概念を用いて説明できる。着目点は動作の時間軸における段階にあって、動作そのものより、動作の時間軸における段階をより重視している。例えば、“喜欢上”(「好きになった」)の場合、好きになっていない状態から好きになった状態への変化を表し、意味①から拡張したものである。このタイプは前項動詞にアスペクト付与の働きをして、時間軸において開始の段階に位置している。このタイプは、意味③や日本語複合動詞「～始める」と違って、複合動詞全体は意志性を持っていない場合が多いことが観察される。

- ⑤ 軽く行う語気を表す。ex.跑上(几圈), 玩上(几天), 喝上(几盅)

- (32) 停了工，歇了活，痛痛快快地玩上几天。

仕事をやめ、骨休みをして数日を思い切り楽しむことにした。(中日対訳《金光大道》)

- (33) 他买上一股截烤白薯，一边就着冷风吃一边吃...

焼き芋を一本買い、寒風の吹き散らす中をかじりながら歩き...(日中対訳《活动变人形》)

- (34) 父亲每天下了班回来总得喝上三两白干。

父親は仕事から帰るときまって強い焼酎を飲む。(中日対訳《钟鼓楼》)

このタイプは“上”という動詞が実質的な意味を持っておらず、“上”がなく単独の前項動詞だけでも文全体の意味が変わらない。例えば、“买上”と“买”は意味が全く同じで、ただ“上”を付けることによって、ユーモラス、諧謔のニュアンスを添加する働きを持つようになる。この場合、“上”は常に軽音の傾向を帯びる。また、対象の前に普通は数量を表す成分(例えば、“几天(何日)”, “一股(一筋)”, “几盅(何杯)”など)が来る。

## 6.6.2 中国語複合動詞“～上”の文法化

6.6.1 節で述べたように、中国語の複合動詞“～上”は以下のような意味を持っている。①上への空間的移動、②動作後の好ましい結果、③密着・付着の結果状態、④動作や状態の開始、⑤軽く行う語気。

意味①において、普通は前項動詞は移動動詞であり、日本語複合動詞「～上げる」と同じように、対象物が動作主の動作によってあるところから上の他のところへ実際に移動することを表す。これは中国語の“～上”の基本義と言える。図で示すと日本語複合動詞「～上げる」の意味①と同じであるため、ここでは省略する。

意味②は前項動詞の表す動作の終了後の好ましい結果、或いは目的の達成を表す。これは日本語複合動詞「～上げる」の「動作の完成・完了」の意味と似ているが、日本語の方は動作自身の完了のみに焦点を当て、結果を問うことはない。それに対して、中国語の方は動作終了後の好ましい結果が求められる。このグループにおいて、前項動詞は活動動詞であり、動作主がある目標を達成するために、一生懸命努力する必要がある。例えば、“他考上大学”（彼は大学（の入学試験）に合格した）という場合、「彼は大学の入学試験に参加し、試験をちゃんと受けて、結局合格した」という過程であるが、「試験を受ける」という過程は「合格した」の前提条件となる。前項動詞の“考”（受験する）と“上”「合格する」の2つとも欠かせないもので、単に“他考大学”（彼は大学の入試を受ける）或いは“他上大学”「彼は大学に通う」では完全に複合動詞“考上”の意味を表せないのである。つまり、単なる前項動詞の完成では必ずしも目的を達成するとは限らない。動作の完成後の段階において、いい結果も悪い結果も生まれる可能性があるが、複合動詞“～上”は好ましい結果（好ましい質のもの）に焦点を当てると考えられる。

意味③において、前項動詞は活動動詞で、前項動詞の動作によって対象物があるものに付着・密着した状態を表す。

意味④は動作の開始の段階を表し、動作の開始の前から動作の開始への時間軸上における変化に着目していると言える。つまり、静態から動態への変化を表す。

意味⑤においては、もともとの動詞“上”の表す意味が完全に失われて、話者の軽く行う語気を添加する働きを有する。この時、複合動詞“～上”の意味は単純な前項動詞の表す意味と同じで、後項動詞の“上”がなくても意味が変わらない（例えば、“玩上几天”＝“玩几天”，“跑上几圈”＝“跑几圈”）。この場合、複合動詞“～上”の意味は完全に希薄化し、徹底的に文法化した段階であると考えられる。単純動詞の場合は、普通の語気を表すが、“上”を添加することによって、前項動詞の動作を軽

く行うという話者の気持ちを表すようになる。普通の語気に比べて、話者の快い気持ちを“上”の性質を持つものとして捉えやすいので、この意味は基本義の「上への空間的移動」から発展してきたと考えられる。

以上の分析からわかるように、中国語複合動詞“～上”の拡張義は基本義の「上への空間的移動」から派生したものである。全体から見れば、中国語複合動詞“～上”の拡張義にある「動作後の（質的）結果」（意味②）と「軽く行う語気」（意味⑤）という意味は空間に関わっており、「動作後の結果状態」（意味③）と「動作や状態の開始」（意味④）は動作の時間軸における位置として捉えられて、内的時間に関わっていると言える。動作後の状態、動作の開始などは動作の開始や終了の後の変化を表し、動作後の状態は動作の終了を前提として成立するものであり、それらは動作が時間軸における位置を前提として捉えられるからである。これらのことを踏まえ、中国語複合動詞“～上”の意味派生関係を以下のように示すことができる。

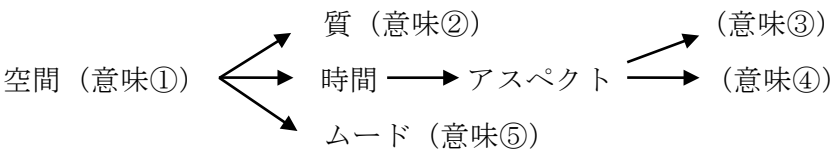


図 4 中国語複合動詞“～上”の意味派生関係

また、以上で述べた中国語複合動詞“～上”の文法化過程は次の表 2 にまとめることができる。

表 2 中国語複合動詞“～上”の文法化プロセス

意味分類	派生関係	文法化の過程	文法化の機能
上への空間的移動 (意味①)	基本義	/	/
動作の結果 (意味②)	空間から質への派生	「空間移動」の抽象化	動作の完成後の結果
付着・密着した状態 (意味③)	時間への派生	意味の希薄化	アспект (結果状態)
動作・状態の開始 (意味④)	時間への派生	意味の希薄化	アспект (開始)
軽く行う語気 (意味⑤)	主体の心情	意味の希薄化	ムード (表現的機能)



## 6.7 「～上げる」と“～上”の共通点と相違点

日本語複合動詞「～上げる」と中国語複合動詞“～上”についてそれぞれの意味拡張のプロセスを述べた。両者の意味拡張における共通点と相違点を以下のようにまとめることができる。

### ● 共通点

#### A. 有する意味

意味において、両者とも「動作対象の上への移動」と「動作の完成・完了」の2点において共通している。

#### B. 派生の方式

両者の各拡張義は共通する基本義「動作の上への空間的移動」から派生したという点で同じである。

#### C. アスペクトの機能を果たしている

拡張義において両者ともアスペクトの働きをしている用法がある。

### ● 相違点

A. 「動作の完成・完了」を表す意味において、日本語の方は単純に動作の終了に焦点を当てて、必ずしも結果は求めない。中国語の場合は、動作終了後の結果に着目し、好ましい結果或いは対象の変化を求める。中国語の動詞には結果性を持っていないものが多く、動作が完成したといっても結果がどうなるかは明確にならないため、常にその後ろに結果性を表す成分を付けることによって結果性を明確に示すようになる。

B. 拡張義において、両者ともアスペクトの働きをする例が見られるが、日本語の方は動作の完成のみを表すのに対し、中国語の方は動作の完成と開始を表す。アスペクトを表す用法に関しては、中国語複合動詞“～上”の意味範囲がより広い。

C. 全体から見ると、中国語複合動詞“～上”の方が意味拡張の範囲が広く、文法化の度合いもより高いと思われる。6.6.1 節の分析結果から見ると、中国語複合動詞“～上”の後項動詞には「語気」という意味を表す場合があって、これは後項動詞が完全に文法化したものであり、なくても文全体の意味は変わらない。それに対して、日本語複合動詞「～上げる」の後項は複合動詞全体の意味にとって欠かせないもので、削除したら全体の意味が変わってしまう。

D. 中国語複合動詞“～上”の持っている用法は、意味⑤を除き、全て「ある動作・

行為の実施によって結果としてその動作・行為が実行された」という点にまとめられるが、日本語の「～上げる」は動作とアスペクトの関係だけではなく、動作の程度（前項動詞に副詞の修飾的働きをもたらすもの）及び動作に関与する人物間の社会的上下関係まで幅広い範囲に使われる。この点から見ると、日本語複合動詞「～上げる」の意味は中国語の“～上”よりはるかに広いと言える。

- E. 文法化のプロセスにおいて、日本語複合動詞「～上げる」の拡張義は「空間」から「抽象的空間」への発展過程であるが、中国語複合動詞の拡張義は「空間」から「抽象的空間」・「時間」への発展過程である。後者の中でも「動作後の状態」を表す場合では、動作の終了の段階に行かないと、状態の現れが不可能であるため、動作の内在的時間は「動作後の状態」の前提条件であると考えられる。このことから、中国語複合動詞の拡張義は、「空間」から「抽象的空間」・「時間」への発展過程であると言える。

以上で述べた内容をまとめて、日本語複合動詞「～上げる」と中国語の“～上”の表す意味を図で示すと、以下のようになる。

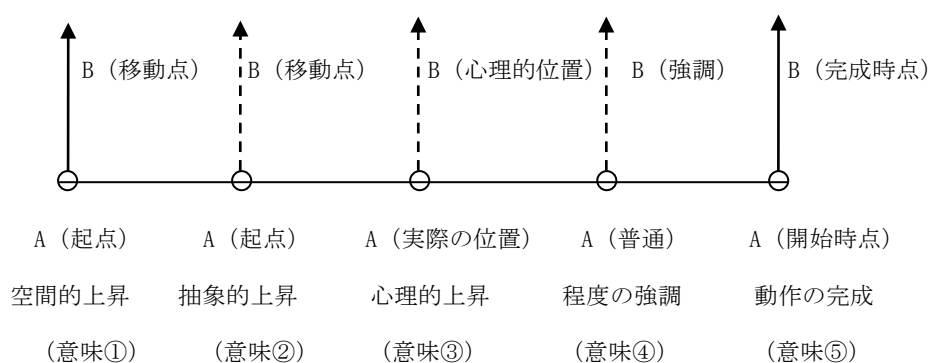


図5 日本語複合動詞「～上げる」の表す意味

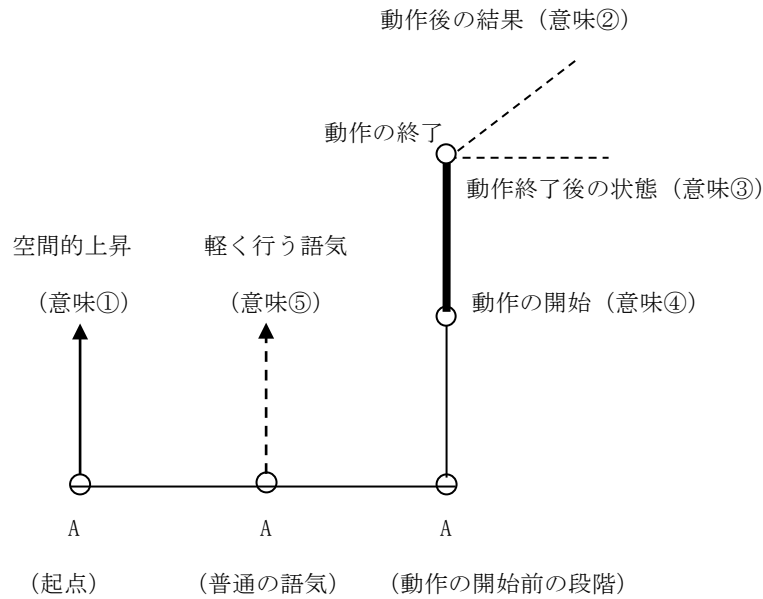


図6 中国語複合動詞“～上”の表す意味

上の図5と図6において、Aはそれぞれの起点を、細線矢印は動作を、実線は具体的意味を、点線は抽象の意味を、太線は注目されている段階を表す。

図5を見ると、全体的に、日本語複合動詞「～上げる」の意味は常に上への動作を有しており、それぞれの意味が「空間的上昇」に深く関わっていることが明らかになった。それに対して、図6の中国語複合動詞“～上”の意味には上への動作のみならず横への動作も存在し、動作の空間的と内在的時間の両方に関わっていると考えられる。また、意味の範囲から見ると、日本語の「～上げる」とも中国語の“～上”とも「空間的上昇」の意味を持っている。それと並列の位置に並んでいる「抽象的上昇」と「強調」の意味は日本語「～上げる」しか持っていない。「変化を表す」の意味は中国語の方のみ持っており、「動作の終了」は両者とも持っている（実は中国語複合動詞“～上”には「動作の終了」という意味を含んでいる）。動作終了後の延長線として「動作後の好ましい結果」と「動作後の結果状態」は中国語“～上”だけの意味範囲に属していることがわかった。

## 6.8 まとめ

本章は上昇を表す日本語複合動詞「～上げる」と中国語複合動詞“～上”を取り上げて考察した。上への方向性を表す日中両言語において、動作が上への移動を表す時、日本語の「～上げる」は中国語方向補語“～上”と対応すること、アスペクトの働きをする時、日本語の「～上げる」は「動作の終了」を表すが、中国語の“～上”は「状

態の変化」の意味を有することがわかった。さらに日本語の「～上げる」は動作そのものの終了を表しているが、中国語の“～上”は動作の結果までも表せることが明らかになった。また、それぞれの意味派生のプロセスを文法化の過程として扱い、文法化のプロセス及び意味派生上の共通点と相違点を明らかにした。日本語複合動詞「～上げる」は空間的上昇に深くつながっていて、拡張義も「空間的移動」から派生している。それに対して、中国語複合動詞“～上”は全体的に空間と動詞の内在的時間に関わっていて、意味の派生は空間と動作の時間軸における位置によって捉えられると考える。

本章は上昇を表す日中両言語の複合動詞を取り上げて考察した。これは移動事象を表すものが言語の多義派生に影響する一例であると考えられる。両言語にそれらの差異が生じる原因を明らかにするのに更なる研究が必要である。例えば、日本語にも中国語にも動作の結果性を含む動詞と含まない動詞が存在しているが、それぞれどのような特徴があるか、複合動詞全体の意味にどう関わっているか、まだはっきりしていないところがある。今後そういった原因を深く探求するため両言語に対して体系的に考察していきたい。

### 〈注〉

1. 用語は、『現代中国語文法総覧』からそのまま借用している。
2. このグループには、「獵犬は洗い熊を追い上げたあと、しばらくは木の下にいるよ。」(BCCWJ ウィルソン・ロールズ (著) 和田穹男 (訳)『ダンとアン』) という例も見られる。特に主体の低位置から高位置への移動を強調せず、前項動詞の動作によって主体が元の場所を離れて他の場所へ移動することを表す。中国語複合動詞“～上”にもそのような例が見られた。
3. 『現代中国語文法総覧』には、中国語の動補構造“～上”の分類に関し、本章の分類に加えて「能力を表す」という分類も見られる。本章はこの類の動補構造を「可能補語」として別扱いしたので、本章の考察対象から除いた。
4. 陳 (2003) によると、主体の元の場所から他の場所への移動を表し、特に低い場所から高い場所への移動を強調しない例が見られる。日本語複合動詞「追い上げる」と同じように“他追上了汽车 (CCL)”「彼はバスを追い上げた (筆者訳)」という例が挙げられている。

## 第7章

### 複合動詞「～つける」の後項の意味について

#### —本動詞との関連から—

##### 7.1 はじめに

日本語複合動詞には、後項が意味的に前項を修飾する働きを持ち、前項動詞の動作や行為の強さなどを表すもの（以下、「副詞的修飾」の用法とする）が多く見られる。例えば、「叱りつける（激しく叱る）」、「信じきる（完全に信じる）」、「恥じ入る（非常に恥じる）」、「育てあげる（一人前になるまで育てる）」などのものが挙げられる。

本動詞「つける」の意味が多岐にわたっている。その意味は、『岩波国語辞典』（第7版）では、以下のように示されている。

##### ㊦【付ける・附ける・着ける】

- ① ある物・人と触れあう、または離れない状態にする。手にインクをつける。取り付ける。職を手につける。家庭教師をつける。あとをつける。彼に目をつけている。
- ② 新たに要素を加える。景品をつける。知恵をつける。火をつける。
- ③ そう決めて、それ以前に不定だった状態を終わらせる。紛糾に結末をつける。
- ④ 《「……につけ」の形で》……に関連して。……につれて。……があると、それに伴って。雨風につけて子を思い出す。

##### ㊦【着ける・就ける・即ける】

- ① ある位置にすえる。席につける。
- ② 指導を受けさせる。先生につけて習わせる。

「一つける」は複合動詞の後項として、その意味も多様であるが、そのうち、前項を意味的に修飾するものとして捉えられるものがあり、先行研究ではそれらの意味を「強意」、「指向」、「強度」などとして扱っている。先行研究でも指摘されているように、複合動詞の意味は単純に前項と後項の加算で理解できるわけではない。前項と後項の2つの要素はいずれかの意味が拡張したり、希薄になったりすることによって、複合動詞に新しい意味をもたらす例が多く見られる。

上記の辞書に見られる本動詞「つける」の各意味の全てが複合動詞後項「一つける」の意味と一致するわけではないことがわかる。「一つける」は複合動詞後項として、各意味の間にどのような共通点を持っているかについては、先行研究ではまだ明らかにされていない。本章は、複合動詞「～つける」の後項の各意味の関連性を明らかにして、その中の「副詞的修飾」を表すグループについて詳しく論述することを目的とする。

## 7.2 先行研究

長嶋（1976）は、複合動詞の前後項における修飾関係から複合動詞を2つに分類した。

I類：「N が（を・に）V2」と言えるもの。ex. 「（木を）切り倒す」「（町内を）見廻る」「（木に）よじのぼる」など。（修飾要素 v1+被修飾要素 V2）

II類：「N が（を・に）V1」とは言えるが、「N が（を・に）V2」とは言えないもの。  
ex. 「（本を）読み通す」「（インクが紙に）しみこむ」など。（被修飾要素 V1+修飾要素 v2）

複合動詞「～つける」の分類について、長嶋（1976）は先行研究武部（1953）を引用しているものを、筆者なりにまとめれば、以下の表1のようになる。

表1 複合動詞「～つける」の分類（武部 1953）

分類		語例
強意的意味を添えるもの		痛めつける、踏みつける
動作の方法を示すもの	「定める」に似た意味の形	植えつける、縛りつける、つくりつける
	「至る」に似た意味の形	駆けつける、漕ぎつける、乗りつける
	「与える」に似た意味の形	送りつける、貸しつける、割りつける
	「かける」に似た意味の形	射つける、蹴りつける、切りつける

	「渡す」に似た意味の形	言いつける, 仰せつける, 申しつける
	「出す」に似た意味の形	嗅ぎつける, 見つける
	「寄せる」に似た意味の形	受けつける, 呼びつける
	「馴らす」に似た意味の形	飼いつける, しつける, 乗りつける
動作の起り方を示すもの（「常に―」という意味の形）		食べつける, 遣いつける

「強意的意味を添えるもの」と「動作の方向を示すもの」の違いについて、後者は、例えば、「卵を岩に生みつける→卵を（生んで）岩につける」、「ワッペンを上着に縫いつける→ワッペンを（縫って）上着につける」、のような言い換えが可能であるが、前者はこのように言い換えることができない、と指摘されている。

姫野（1999）は、複合動詞「～つける」を語彙的複合動詞と統語的複合動詞の2つに分類し、さらに語彙的複合動詞「～つける」の意味を「接着・密着」を表すものとし、二格を取るか取らないかによってそれぞれ下位分類している。統語的複合動詞「～つける」の意味を「習慣」を表すものとしている。それぞれの下位分類は以下の表2～4に示している。

表2 接着・密着の「～つける」語彙的複合動詞（「に」をとるもの）

「～つける」の複合動詞	自動詞か他動詞か	意味特徴	
① 場所 [に/へ/まで] （乗り物）を ～つける 現場 に 駆けつける 現場 に 車を乗りつける	自+つける=自 他+つける=他 自+つける=他	場所への到着	
② 対象 [に/へ/と] 物を～つける 壁 に 板を 打ちつける 鎖 と 紐を 結びつける	他+つける=他	対象への接着・密着	
③ 対象 [に/へ/に向かって/をめぐって] 物を ～つける 相手 に 皿を 投げつける ④ 人 [に/へ/に向かって/に対して/から]～を ～つける 子供 に 用を 言いつける 農家 から 米を 買いつける	他+つける=他	物理的接触	対象への指向—完全な 接触を目指す
		対人行為接触	

⑤ 場所 [に/へ/まで] 人を～つける 自宅 に 部下を呼びつける		主体者近接	
⑥ 対象 [に/へ/に向かって] ～つける 道路 に 照りつける	自+つける=自 他+つける=他	対象への強度の接触 指向	

表3 接着・密着の「～つける」語彙的複合動詞（「に」をとらぬもの）

① 対象 [を] ～つける  馬 を 押さえつける	他+つける=他	物理的接触	強調
② 人 [を] ～つける  子供 を 叱りつける		対人行為接触	
③ 情報 [を] ～つける  秘密 を かぎつける	他+つける=他	対象の捕捉	
④ 対象 [を] ～つける  木 を 燃しつける	他+つける=他	状態移行	
⑤ 決めつける			

表4 習慣の「～つける」統語的複合動詞

[意志的動作を表す動詞]+つける 辛い物 を 食べつけている	他+つける=他 自+つける=自	習慣
-----------------------------------	--------------------	----

(姫野 1999:111-112)

語彙的複合動詞「～つける」(表2, 表3)について,「自立語「つける」の本義「接着, 密着」を何らかの形で含むものであり, その上に,「中途半端ではなく, 動作をしっかりと完全に行う」というニュアンスを伴う」と指摘している。また, その中で特に本章で言う副詞的修飾に関わりがある「物理的接触」を表す場合,「強さを表す修飾語を伴うことが多い。「つける」は, 動きの強さ, 速さ, 動作主の攻撃性を含む」ということを述べ,「対人行為接触」の場合,「「つける」は, 強調を表し, 相手の意向にかまわず, 一方的に行為がなされるというニュアンスを含む」と指摘している。

李(2004)は, 先行研究では,「「嗅ぎつける・漕ぎつける・はねつける」などの複合動詞は, その内部構造を見るだけでは意味を捉えられない」と指摘し, 複合動詞「～つける」の意味用法について連語レベルにおける名詞句の意味素性から V1 ある



いは「～つける」の意味を考察している。複合動詞「～つける」の意味を〈一次的意味〉（語構成要素レベルにおける中核的意味を引き継いだ意味）と〈二次的意味〉（名詞句に抽象名詞（コトガラ）という語構成要素レベルでは考えられていない結びつきが実現した時に顕在化する意味（〈一次的意味〉から派生したもの）に分け、その結果、V2 における語構成要素「～つける」の中核的意味（＝「くっつける」）と「～つける」複合動詞の一次的意味との関係、また、一次的意味と二次的意味との関わりが統一的に説明できる、と述べている。

陳・王（2012）は、意味論的、語用論的変化の理論に基づいて、複合動詞「～つける」の意味拡張を分析し、それらの意味拡張を「抽象化による意味拡張」、「抽出化による意味拡張」、「抽象化と抽出化による意味拡張」、「希薄化による意味拡張」に分けて、具体的な例を挙げながらそれぞれの拡張関係を図の形でまとめている。例えば、「壁に頭を打ちつける」、「停車場へ駆けつける」、「開催に漕ぎつける」という文において、「物→空間的→心理的」という拡張関係だと主張している。また、「真夏の太陽が照りつける」の「つける」を「強度の様態」と述べ、姫野（1999）では「対人行為接触」（語彙的）として扱った「申しつける」及び「習慣」（統語的）として扱った「食べつける」を「希薄化されるもの」とされている。複合動詞「～つける」の用法を「接尾辞」、「強調」、「与える」の3つにまとめている。しかし、その拡張関係については十分に論述されていない。

以上の先行研究を概観して、先行研究では、複合動詞「～つける」の意味・用法を詳しく分析されているが、各意味間の関連性について論述されておらず、複合動詞「～つける」の意味には、本動詞「つける」の意味がある程度生きている、と姫野（1999:110）でも指摘しているが、どのように生きているかについては詳しく考察されていない。本章はこの2つの問題点を解決することを試みる。

### 7.3 研究方法

本章は姫野（1999）の複合動詞のリストに挙げられている107語を用い、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）から複合動詞「～つける」の用例を収集し、それを意味・用法によって再分類する。検索された96語のうち、「当てつける、落ちつける」2語は一語化していると捉え、また、「仰せつける」は「N+つける」の形であると考えられるため、考察対象から除外する。「おっつける」のような語は「押しつける」の音便化形式であり、「押しつける」と同様に扱うことにする。以上のことから、93語を考察対象とした。

複合動詞「～つける」の意味・用法を分類するのは本章の目的ではないが、それぞれの意味の間の関連性を説明するため、それらの意味・用法によって分類するのが不可欠な作業と言える。先行研究の分類そのままでは、意味の関連性について説明しきれないところがあるので、本章では、影山 (2013) の複合動詞の新しい分類に従って、複合動詞後項「一つける」の意味を 3 大別にして、また、それぞれの意味関連性について説明してみる。

## 7.4 考察

影山 (2013) は、先行研究において、今まで図左側の 6 つのグループに分けられていた語彙的複合動詞を図右側のように「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」の 2 つに分類している。

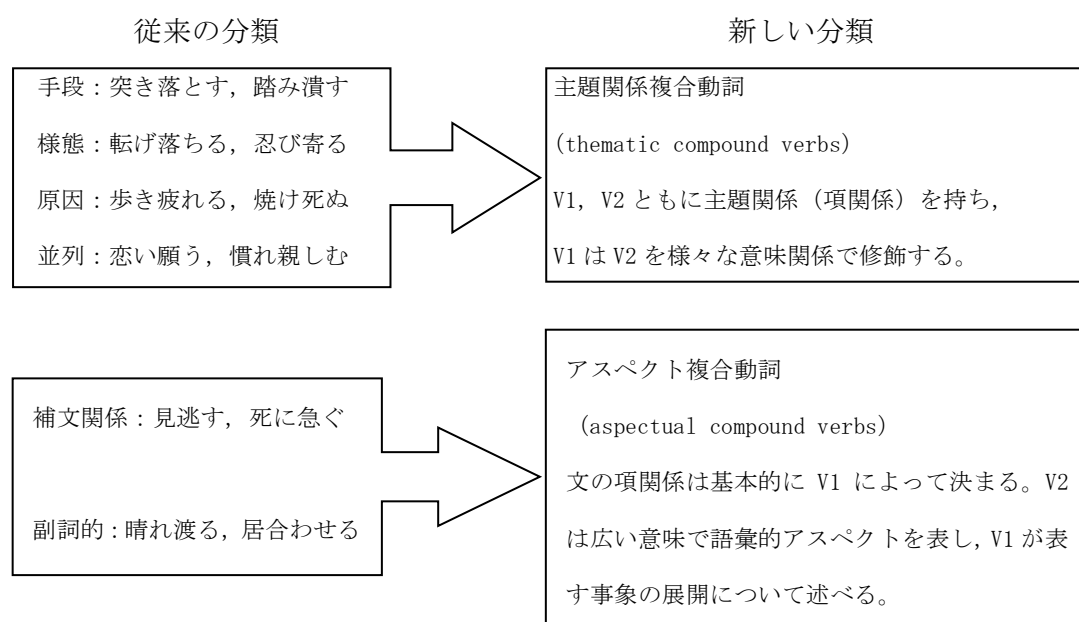
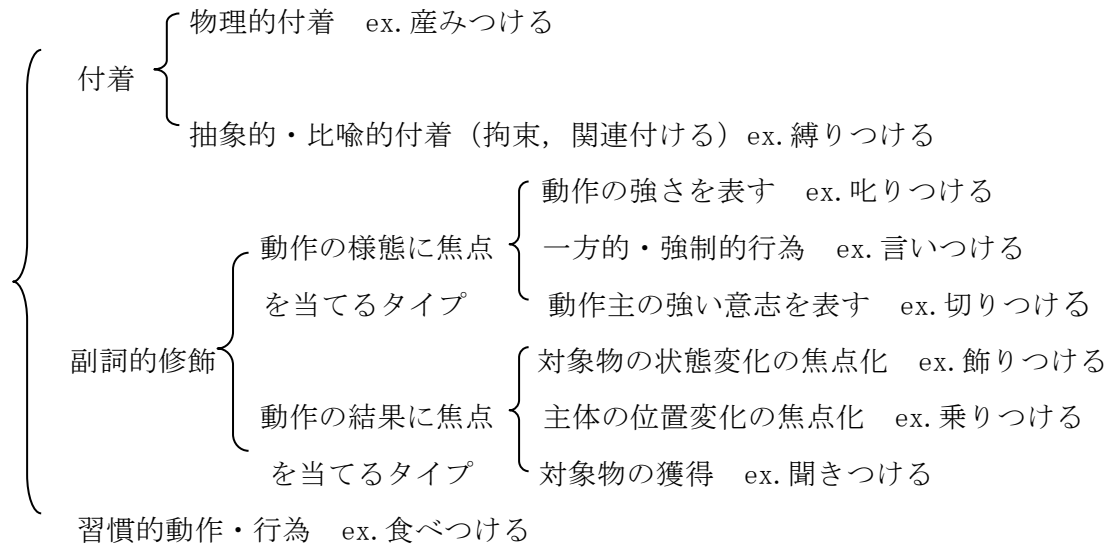


図 1 語彙的複合動詞の種類 (影山 2013)

本章は上述の影山 (2013) の分類を踏まえて、前項動詞の意味特徴、前後項の意味関係によって複合動詞後項「一つける」を「付着」、「副詞的修飾」、「習慣的動作・行為」の 3 つに分けて、それぞれ影山 (2013) の「主題関係複合動詞」、「アスペクト複合動詞」と「統語的複合動詞」に対応させる。また、それぞれのタイプを更に下位分類して、「副詞的修飾」を表すものを動作のどの段階 (過程か結果か) に焦点が当てられるかによって「動作の様態に焦点を当てるタイプ」と「動作の結果に焦点を当て

るタイプ」に分ける。全体を以下のように示す。



#### 7.4.1 付着

このグループの判断基準は以下の通りである。前項動詞（以下 V1 で示す）が手段を表し、後項動詞（以下 V2 で示す）が付着の結果状態を表す。すなわち、前項動詞の表す動作・行為によって、対象物がある空間的到達点に至ると、捉えられる。これは複合動詞「～つける」後項の基本義で、本動詞「つける」の基本義も同じものである。このグループはすべて手段複合動詞である。また、対象物には普通場所ニ格を取り、「対象物ヲ場所ニ〈～つける〉」という形式になる。

例：編みつける、貼りつける、巻きつける、縫いつける、塗りつける、備えつける

- (1) 長さ五尺、広さ一尺八寸、厚さ一寸、頭には馬髪を編みつけ、赤白土墨でもって鉤形を画いていた。(森浩一『日本神話の考古学』)
- (2) 産卵期になると、適当な岩とか石の下側にからだをさかさまにしてもぐり込み、卵を一つずつついでいねいに産みつけていくのです。(古川教元『ギョッ魚！とびっくり魚のオモロイ話がいっぱいの本』)
- (3) 屋根に据えつけた太陽電池モジュールが太陽光を吸収し発電する。(エムシーエー総研編著『人脈資本革命』)
- (4) 一方、伸び盛りの若い企業内記者にとって、大手報道機関に縛りつけられる弊害は大きい。(鎌田慧『壊滅日本』)

上の例（1）～（3）において、対象物はそれぞれ「馬髪」，「卵」，「太陽電池モジュール」のような具象物であり，いずれも具体的なもので，二格には「頭」，「岩とか石の下側」，「屋根」のような具体的な場所名詞を取ることがわかる。これらを「物理的付着」の例として扱う。例（4）においては，主体の「弊害」は抽象名詞であり，この場合は「抽象的・比喩的付着」の用法に分けられる。対象物は主体の影響で，いつも主体に付着しているような，拘束され，関連付けられているような関係として捉えられる。この場合，主体は対象物にとって抽象的な到達点の存在として捉えられる。

#### 7.4.2 副詞的修飾

このグループの複合動詞は「付着」の意味を持っているグループと違って，複合動詞の後項は意味的に前項を修飾する働きを持っている。これらの複合動詞「～つける」の文における意味用法に注目し，前項動詞の特徴や複合動詞の前後項の意味関係によって，「動作過程における動作の様態に焦点を当てるタイプ」と「動作の結果に焦点を当てるタイプ」に分ける。さらに前者を「動作の強さを表す」，「一方的・強制的行為」と「動作主の強い意志を表す」に，後者を「対象物の状態変化の焦点化」，「主体の位置変化の焦点化」，「対象物の獲得」に分ける。

「動作の様態に焦点を当てるタイプ」と「動作の結果に焦点を当てるタイプ」は，それぞれの前項動詞と共起する修飾成分が違うところからわかるように，前者の前項動詞は活動動詞で，結果性を持っておらず，複合動詞は動作の様態を表す修飾成分と共起する例が多い。例えば，「ぎゅっと押しつける」，「ひどく痛めつける」，などはこのタイプに当たる。それに対して，後者の前項動詞は移動動詞あるいは結果性を持つ動詞であり，このタイプは結果性を表すものと共起する例が多く見られる。例えば，「豪華に飾りつける」，「甘めに煮つける」，などが該当すると考えられる。それをまとめて，以下の表5のように示す。

表5 「副詞的修飾」を表す複合動詞「～つける」の特徴

「副詞的修飾」のタイプ	前項動詞の特徴	文における共起成分
動作の様態に焦点を当てる	活動動詞	動作の様態を表すもの
動作の結果に焦点を当てる	移動動詞，結果性を持っている動詞	動作の結果を表すもの

#### 7.4.2.1 動作の様態に焦点を当てるタイプ

動作の様態は、動作の発生に伴う要素を指す。このグループの複合動詞の前項は活動動詞であり、結果を持たないため、その動作に伴う要素も結果性を持たないはずである。例えば、「叩く」、「叱る」という動作において、対象者あるいは対象物に変化をもたらさないため、「ドアを叩いたが、ドアに何の変化もない」、「太郎は次郎を叱ったが、次郎に何の変化もない」と言うことができる。それに対して、「飾る」、「煎る」という動作の場合、「\*部屋を飾ったが、部屋に何の変化もない」、「\*豆を煎ったが、豆に何の変化もない」とは言えないことからわかるように、「飾る」、「煎る」は「叩く」、「叱る」と違って、結果性を持つ動詞である。この場合は、動作・行為の実行によって、対象者あるいは対象物には何らかの変化をもたらすものに限定されると考えられる。

##### 7.4.2.1.1 動作の強さを表す

副詞的修飾を表すグループは、V1 が意味の主要部であり、V2 「つける」は V1 を修飾する働きをしている。このグループの後項「—つける」は具体的に「厳しく、ひどく、強く、力を入れて、力強く、固く、激しく、あれこれと、きちんと、荒々しく、手荒く、力いっぱい、力を込めて、じっと」などの意味を表し、前項動詞の表す動作を意味的に修飾する機能を持っていると言える。これらは全て動作の様態に焦点を当てるものであり、動作の過程に関わると考えられる。

例：押しつける、締めつける、叱りつける、縛りつける、放りつける、睨みつける

- (5) 中山氏はソファに坐るなりドーンとテーブルを叩いた。それも尋常な叩きようではない。殴りつけるような仕草だった。(石井英夫『産経抄』)
- (6) あんな楽しい子はいなかった。たしかに怒って怒鳴りつけることもあったが、よく笑わせてくれた。(アレックス・シアラー(著)/金原瑞人(訳)『青空のむこう』)
- (7) 僕はあとずさりして彼から離れ、小さな机の自分の席につくと、粘土を何度も叩きつけて、ただの汚い色のかたまりを作った。(ブレイディ・ユドール『エドガー・ミント、タイプを打つ』)
- (8) 「なんだ、その態度は！」とジェイムズは息子を叱りつけた。(ジュード・デヴロー『心すれちがう夜』)

上の例 (8) の「叱りつける」をもとに説明すると、後項の「一つける」は前項動詞「叱る」の表す動作・行為の「効果」がある到達点に至ることを意味し、その到達点に至らない限り、動作の強さを表せないと考えられる。このグループの後項は前項動詞の動作の強さなどを表し、弱さを表す修飾語と共起しない。以下の例を見てみよう。

- |                          |                         |
|--------------------------|-------------------------|
| (9) a. 子供を叱った。           | (10) a. 彼を殴った。          |
| b. 子供を叱りつけた。             | b. 彼を殴りつけた。             |
| c. 子供を <u>少し</u> 叱った。    | c. 彼を <u>少し</u> 殴った。    |
| d. *子供を <u>少し</u> 叱りつけた。 | d. *彼を <u>少し</u> 殴りつけた。 |

上に挙げた例 (9) において、動詞「叱る」が単純動詞として使う場合と複合動詞前項として使う場合「叱りつける」の (9a) と (9b) は両方とも自然な文であるが、「程度が小さい」という意味を表す副詞「少し」と共起させた (9c) は自然な文であるが、同じ副詞と共起する場合の複合動詞「叱りつける」の (9d) は不自然である。例 (10) も同じように説明できる。

#### 7.4.2.1.2 一方的・強制的行為

後項「つける」は「一方的・強制的」意味を表す。

例：決めつける、売りつける、送りつける、言いつける、貸しつける、見せつける  
以下 BCCWJ からの例文をいくつか挙げて説明していく。

- (11) 点数で人を決めつけるなんて許せない。(稲葉稔『かまち』)
- (12) 単なる“健康食品”を“特効薬”であるかのように思わせて、売りつけてしまう。  
(山本鐘博『サギ師のまさかの騙しテクにのるな!』)
- (13) 「お客の荷物を寝室に運んでくれ」そう言いつけてから、私に言う。(ジョギンダー・パウル(著)/工藤道子(訳)『現代インド短編小説集』)
- (14) アメリカ最初の銀行が創立され、企業家たちに必要な資金を貸しつけはじめた。(西村三郎『毛皮と人間の歴史』)

「決めつける」で検索すると、(11) の「...許せない」か (12) の「...しまう」のように、マイナスイメージを表すものと共起する例が多く、また、「無理やりに...」,

「勝手に…」のようなマイナス評価を表すものと共起する例が多く見られる。後項「-つける」は動作主の「一方的行為」として捉えられる。(12)の「売りつける」の場合は、動作主が相手の意志に関わらず、「無理やりに買わせる」という意味として捉えられる。「化粧品を売ると、相手が喜んでくれた」は言えるが、「\*化粧品を売りつけると、相手が喜んでくれた」は言えない。「売る」と「売りつける」を比べると、前者は動作主の動作と受け手の意志には関係がなく、後に「相手が喜んでくれた」が来ても問題なく使えるが、後者の場合、「売りつける」という動作は受け手に不快感を与えるので、「相手が喜んでくれた」と矛盾が生じてしまう。この点から見ても、「売りつける」には「強制的」なニュアンスが読み取れる。

また、(13)と(14)のうち、(13)の「言いつける」は個人の間で使われるが、(14)の「貸しつける」は銀行や政府などの組織から個人への行為を表す。興味深いのは、「言いつける」は2種類の意味を持っており、(13)のような場合は、上から下へ「命令する」という意味であるが、「太郎は次郎の悪口を先生に言いつける」の場合は、下から上へ一方的な行為(告げ口する)に限られると思われる。両者の方向性は逆であることがわかる。

上の例から、前項動詞は全て社会的行為を表す動詞、或いは心理動詞であることがわかる。複合動詞において、前項動詞の表す社会的行為の「効果」がある到達点に至ることによって、その後項が「一方的・強制的」意味が表せるようになると考えられる。

#### 7.4.2.1.3 動作主の強い意志を示す

このグループの複合動詞は数が少なく、1語しか見られない。

例：切りつける

- (15) 思えば、祐介は昨日もやくざ者に腕を切りつけられている。(綾乃なつき『夢見る乙女じゃいけない』)

上の例において、前項動詞「切る」は、動作主は相手を襲うという意図あるいは意志が強く、その目的を達成させるため、前項動詞の動作「切る」を強くするということを意味している。この場合、動作主の相手への攻撃性が読み取れる。後項動詞「-つける」は動作主がある度合いを超えて前項動詞の動作・行為を行うことを意味している。この度合いは「ある到達点」として捉えられる。つまり、ある目的を達成させ

るため、動作主の意志は「ある到達点」に至ることがわかる。

上に述べた「動作の強さを表す」、「一方的・強制的行為」と「動作主の強い意志」の3つの下位分類は動作の結果性に関わらないものであり、すべて動作の過程の段階に所属すると言える。このグループにおいて、後項「—つける」は前項動詞の動作・行為の「過程」を修飾する働きを持っていると考えられる。

#### 7.4.2.2 動作の結果に焦点を当てるタイプ

このタイプは前項動詞の動作や行為によって、対象物（主体）の変化結果に焦点をあてるものであり、「対象物の状態変化の焦点化」、「主体の位置変化の焦点化」、「対象物の獲得」の3つに分けられる。

##### 7.4.2.2.1 対象物の状態変化の焦点化

このグループの複合動詞「～つける」の意味焦点は動作主・対象物の状態変化に当てられる。

例：飾りつける、煎りつける、説きつける、煮つける、割りつける、盛りつける

- (16) さらに卵、酢の順に煎りつけながら加えて仕上げ、さましておく。(『おせちと気軽なおもてなし』)
- (17) 街には、クリスマスソングが流れ、ウインドウは豪華に飾りつけられて、サンタクロースが街角で踊る。(加藤諦三『アメリカインディアンの教え』)
- (18) 婚約を破るようなことはしたくないので、彼女は泣いて父を説きつけ、愛川と結婚したのだった。(山本有三『路傍の石』)
- (19) 魚をさっと煮つけたり、時間はかかっても、オーブンに入れておけばすむようなものばかり。(おおくにあきこ『メイプル』)

上の例(16)～(19)の後項「—つける」はそれぞれ前項動詞の動作によって「対象物の水分がなくなる」、「工夫して全体が美しく見えるように」、「相手が自分の考えに従わせるように」、「食物をよく汁がしみこむまで」という結果に焦点が当てられる。

「動作の様態に焦点を当てる」タイプと違って、このグループの前項動詞には結果性が含まれており、後項「—つける」は前項動詞の「結果」に焦点を当てる働きを持っていると考えられる。複合動詞後項「—つける」は前項動詞の動作・行為によって主



体や対象物の変化がある到達点に至ることを表すものである。

#### 7.4.2.2.2 主体の位置変化の焦点化

前項動詞の動作によって主体が目的地に到着することを表す。前項は動作を、後項は目的地への到着を表す。前項動詞はすべて移動動詞である。

例：漕ぎつける、駆けつける、乗りつける、馳せつける

- (20) そうして、ようやく千九百九十六年十二月に募集をかけるところまでこぎつけました。(亀山始『やさしい人をつくる公園へ』)
- (21) 救急車が駆けつけると、久美子夫人は既に愛ちゃんを抱いて、玄関先に出ていた。(阿部寿美代『ゆりかごの死』)
- (22) そのまま集会所へ行ったり、講演会場へ乗りつけたりします。(志茂田景樹『背後霊は殺しが好き』)
- (22) それから直ちに四ツ手駕籠の大早というものをやとって、そうして赤羽へはせつけました。(平尾道雄『維新暗殺秘録』)

上記の複合動詞後項「～つける」は前項動詞（移動動詞）の動作によって主体がある到達点（目的地）に至ることを意味していると考えられる。

#### 7.4.2.2.3 対象物の獲得

前項動詞の動作によって新たな対象物が出てくる、或いは、何らかの新しい情報をもらうという結果に焦点を当てるグループである。これらの複合動詞「～つける」はある到達点に至る（新しい情報をもらう）ことを目指して、前項動詞の動作・行為を行うことを表すものであり、動作主は新しい情報を手に入れるため、この動作・行為を行うという意図を持っていると考えられる。

例：見つける、嗅ぎつける、聞きつける

- (23) 警察が嗅ぎつけてこなければ、男から金が入る。(西村寿行『残像』)
- (24) テントの中からもれてくる異様な声を聞きつけて、助手たちは顔を見合わせました。(柴田都志子『動物研究者ダイアン・フォッシー』)

このグループの複合動詞前項には、ある程度結果性が内包されていると考えられ、後項「一つける」はその結果に焦点を当てると考えられる。例えば、「聞きつける」の前項動詞「聞く」の場合、「授業を聞く」と「情報を聞く」のいずれも言えるが、複合動詞「聞きつける」の場合、「情報を聞きつける」とは言えるが、「\*授業を聞きつける」とは言えない。なぜなら、「聞く」は、ただ動作を表すが、「聞きつける」は、動作によって意味焦点がその結果である「情報を手に入れた」という部分に移されてしまうからだと考えられる。

### 7.4.3 習慣的動作・行為

検索結果から見ると、姫野（1999）が挙げている複合動詞リストには、このグループに分類できる複合動詞は8例しか見られない。

買いつける、書きつける、聞きつける、着せつける、吸いつける、乗りつける、見つける、呼びつける

(25) だいたい普段から乗りつけないものに乗るから、自転車の運転がフラフラしてるよ。(疋田智『大人の自転車ライフ』)

これらの複合動詞は習慣的動作・行為を表す以外、他のグループの意味用法と重なる場合がほとんどである。また、前項動詞はいずれも人間の活動動作であり、人間の日常生活に関わると考えられる。国広（1970:165）の指摘した「習慣的連続を意味している」ものだと考えられる。このグループの複合動詞は前項動詞の表す動作・行為の回数・頻度がある到達点に至り、後項「一つける」は習慣になるまでその動作・行為を繰り返すということを意味している。例えば、「乗りつける」の場合は、前項動詞「車に乗る」という行為を繰り返して、後項「一つける」の意味が、動作が数回だけではなく、複数回を繰り返して、動作・行為の回数・頻度がある到達点に至ることを表すと言える。

### 7.5 まとめ

以上論述したように、複合動詞「～つける」後項の意味はいずれも「ある到達点に至る」という点で同じであると考えられる。それぞれの「到達点」の性格が異なると思われる。前項動詞の特徴及び前項と後項の意味関係によって後項の意味が決まって

いると言える。つまり、前項動詞の動作・行為のどの側面を修飾するのかはその前項動詞の特徴によって決まる。各意味の間の関連性について以下の表 6 のようにまとめられる。

表 6 複合動詞「～つける」の意味特徴

意味の分類	意味のタイプ	下位分類	到達点の性格
付着	物理的付着	/	空間的到達点に至る
	抽象的付着	/	抽象的到達点に至る
副詞的修飾	動作の様態に焦点を当てるタイプ	動作の強さ	動作・行為の「効果」がある到達点に至る
		一方的・強制的行為	社会的行為の「効果」がある到達点に至る
		動作主の強い意志	動作主の意図がある到達点に至る
	動作の結果に焦点を当てるタイプ	対象物の状態変化の焦点化	対象物の状態変化がある到達点に至る
		主体の位置変化の焦点化	主体の位置変化がある到達点に至る
		対象物の獲得	新しいものを獲得するに至る
習慣的動作・行為	動作・行為の アспект	動作・行為の 回数・頻度	動作・行為の繰り返しがある到達点に至る

以上の分析結果から見られるように、複合動詞「～つける」の意味は「付着」、「副詞的修飾」、「習慣的動作・行為」に 3 つに分けられ、さらにそれぞれの特徴や内実などが明らかになった。特に先行研究では「強調」、「強意」などとして扱われたものを検証し、複合動詞において後項「一つける」は前項動詞の動作のどの側面を修飾するかを詳しく分類し、考察した。また、「副詞的修飾」の意味用法をさらに「動作の様態に焦点を当てるタイプ」と「動作の結果に焦点を当てるタイプ」の 2 タイプに分け、それぞれ動作・行為のどの側面を修飾するかについて論述した。さらに、本動詞「つける」の意味に照らし合わせて、複合動詞「～つける」後項の意味において、本動詞の意味がどのように生きているかを分析するによって、各意味はいずれも動作のある要素が「ある到達点に至る」という共通点を持っていることを明らかにした。また、その中の「副詞的修飾」を表すものをさらに詳しく分析し、前項動詞の結果性を持つかどうかによって複合動詞後項「一つける」の意味焦点が変わることを示した。前項動詞が結果性を持っている場合、後項「一つける」はその結果性に焦点を当てるが、前項動詞が結果性を持っていない場合、後項「一つける」は前項動詞の動作・行為の

「過程」の様々な側面に焦点を当てることがわかった。今後は「副詞的修飾」を表す複合動詞の意味の内実について詳しく考察していきたい。

## 第 8 章

### 複合動詞後項における意味的抽象化

#### 8.1 はじめに

複合動詞には、「～あげる」「～こむ」「～つける」「～きる」などのような生産性の高いものも多く見られる。しかし、同じ形式の後項動詞でも異なる前項動詞と結びつくことによって、その後項動詞の意味も変わることが窺える。以下の例を見よう（以下の例文は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）からのものである）。

- (1) 一歩踏み出すごとに板の割れ目から得体の知れぬ海虫が走り出て、水中に飛びこんでいく。（東郷隆『御町見役うずら伝右衛門』）
- (2) 翌朝はテレビの前に座りこんでニュースを見る。（向谷匡史『ヤクザという生き方』）
- (3) どうしてわたしが私立女子高の出身だと決めこんでいるの？（ノーラ・ロバーツ（著）竹生淑子（訳）『恋人たちの航路』）

以上の例では、同じ後項動詞「～こむ」が「飛ぶ」「座る」「決める」と結びつき形成した複合動詞において、その意味が違っていることが分かる。(1)の「飛びこむ」は「飛んで、水の中に入る」という「内部移動」の意味であり、(2)の「座りこむ」は「ずっと座る、長い間座る」という前項動詞の意味を修飾する「副詞的」意味を表し、(3)の「決めこむ」は、「勝手に決めて、それ以外考えない」という「動作のマイナス評価の強め」的な意味を表すと言える。

そういった複合動詞の後項をどのように捉えたらよいであろうか。影山(2013)は、従来の複合動詞の二分類、すなわち「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の前者を新たに「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」に下位分類している。上の

例で言えば、(1)の「飛びこむ」は主題関係複合動詞で、(2)と(3)における「座りこむ」と「決めこむ」はアスペクト複合動詞に属すると思われる。このアスペクト複合動詞の後項について、影山(2013:19)は、「これらの補助的な動詞は元来は一人前の自立語であったものと想定されるが、アスペクト複合動詞に組み込まれると、項構造や格支配の力を失い、Lexical-aspect という機能的な役割になる。この現象は、認知言語学の研究で文法化(grammaticalization)と呼ばれる変化過程の一つと捉えられる。」と指摘している。

また、それらの複合動詞後項について、先行研究では、「補助動詞的要素」(武部良明 1953)、「具象性の薄い、形式化した意味を表すもの」(坂倉 1966)、「意味上の発展」(森田 1978)、「複合動詞後項の接辞化」(斎藤 1992)、「文法化」(田辺 1996, 三宅 2005)、「助動詞化」(西山・小川 2013)といった名称で扱われている。

本章では、これらのものを統一的に「複合動詞後項の意味的抽象化」と呼ぶことにし、抽象化の各段階の意味的特徴について考察する。

## 8.2 先行研究

### 8.2.1 複合動詞一般

本章に関わる複合動詞のまとまった先行研究としては、影山(1993)、松本(1998)、由本(2005, 2013)、姫野(1999)、影山編(2013)、などが挙げられる。複合動詞は影山(1993)以来、語彙的複合動詞と統語的複合動詞に二分されるが、特に前者の下位分類や分類間の関係等については、語彙概念構造(LCS)や特質構造(Qualia Structure)といった概念装置を用いて様々に分析されている(由本 2005 など)。松本(1998)は、語彙的複合動詞において、動詞の組み合わせにどのような制約があるかを考察している。また、語彙的複合動詞と統語的複合動詞との連続性についても、陳(2013)などで考察されているが、意味的には十分に捉えきれていないところがある。一方、姫野(1999)は多義的後項動詞の意味・用法を分析し、類義語との意味的差異を詳細に記述している。

### 8.2.2 複合動詞後項における意味的抽象化と文法化

複合動詞後項について、先行研究では、意味的抽象化の様相の観点から捉えるものとして武部(1953)と森田(1978)が挙げられる。意味的抽象化を文法化の観点から

捉えるものは三宅（2005）があり、意味的抽象化を文法化の観点から段階に分けるものは田辺（1996）がある。

武部（1953）は、複合動詞における後項動詞の中で、原義が希薄になって助動詞化するものは、前項動詞に附属的意味を添えるということである、と述べている。複合動詞後項を「補助動詞的要素と考えられない形」と「補助動詞的要素と考えられる形」に分け、そのうちの「補助動詞的要素と考えられる形」（210 語）を「強意的な意味を添えるもの（ex. 縮み上がる、叫び上げる、嘆き余る、恐れ入るなど）」、「動作の方向を示すもの（ex. 積み込む、逃げ出すなど）」と「動作の起こり方を示すもの（ex. 読み切る、飛び損なう、思いそめる、乗り続けるなど）」の3つに分ける。

森田（1978）は、複合動詞を意味の度合いによって5つの段階に分ける。第1段階から第5段階までそれぞれ以下のように述べている。

- ① 並列関係（二つの動詞が結びついて生ずる意味関係として最も単純なものは、両動詞が対等の関係で並列する「-して-する」形式）
- ② 主述、補足の関係（上下の動詞がそれぞれ独立した意味を持ち、それが並列関係でなく、一歩進んで「主語-述語」の「が」格の関係を構成する）
- ③ 具体的意味から抽象的意味へ（主述関係や補足関係を取る複合動詞の中には、複合するどちらか一方の動詞が本義から離れて転義的に用いられている）
- ④ 造語成分への移行（下接部分がそれ自体独立した動詞としては用いられないが、複合語の中で生き残り、しかも実質的意味をまだ残している場合。動詞的造語成分と考えられる）
- ⑤ 実質的意味から形式的意味へ（抽象化がさらに進めば、実質的意味を失い、形式化されてしまう。極度に抽象化されて動詞の意味を失い、単なる強意の添え言葉（接辞）と化してしまう）

三宅（2005）は、現代日本語における文法化現象について説明している。そのうち、複合動詞の文法化については、「つまみ出す」「逃げ出す」「泣き出す」という「～出す」を対象にして様々に分析するとともに、「～かける」について、「同じ“～かける”でも“子供に話しかける”というような場合は語彙的，“本を読みかける”というような場合は統語的であるが、後者の方が、本来の意味が抽象化されている（アスペクト的な意味を新たに得ている）と言える。このようなことを考慮すると、この統語的複合動詞の後項は、文法化されたものとみることも可能であると思われる。」と述べている。さらに、一つの形式が持つ複数の用法間にも連続性があることも考え合わせ

ると、複合動詞における語彙的・統語的という二分類を、文法化の視点から捉え直してみるものの有効性も否定できない、と指摘している。なお、文法化の規定について、三宅（2005:62-63）では、以下のように述べている。

実質的な意味を持ち、自立した要素になりうる語のことを「内容語」(content word) と呼び、逆に、実質的な意味、及び自立性が希薄で、専ら文法機能を担う要素になる語のことを「機能語」(function word/grammatical word) と呼ぶことにすると、「文法化」(grammaticalization) とは、概ね「内容語だったものが、機能語としての性格を持つものに変化する現象」と言えるであろう。(中略) 文法化には、二つの異なった側面が存在する。一つは、実質的な意味が抽象化、希薄化、あるいは消失する、という意味的な側面である。他の一つは、自立性を失い、もっぱら文法機能を担う要素になる、という形態・統語的な側面である。

一方、複合動詞の文法化を体系的に論述したものに、田辺（1996）が挙げられる。田辺（1996）は、本動詞の辞書的意味が複合動詞形成後どの程度生きているかによって、複合動詞を以下の3種類に分けている。

- A. 二つの動詞のそれぞれの辞書的な意味が生かされているもの—意義素融合型 ex. 拾い上げる、飛び出す、叩き壊す
- B. 前項動詞が、接頭辞化しているもの ex. 取り決める、突っ込む、こみ上げる
- C. 後項動詞が接辞化しているもの—文法化型 ex. 読み切る、作り上げる、騒ぎ立てる

この中の「意義素融合型」と「文法化型」の双方の型を有する複合動詞「～こむ」「～きる」「～ぬく」「～あげる/あがる」を対象として、文法化の二つの判断基準①後項動詞の自・他の区別が複合動詞の自・他を拘束するか、②内の関係の連体修飾節内の複合動詞が動的述語となるか性状規定となるか）を用いて、意義素融合型（文法化の第一段階）と文法化型（文法化の第二・三段階）に属する各段階の複合動詞の文法的特徴を考察している。判断基準①に関しては、文法化を始めた後項動詞が自動動しか前項動詞に取らない、または他動動しか許容しないといった動詞の自他の区別をめぐった接合制限の有無が考えられる。判断基準②に関しては、田辺は、寺村（1984:194）の「連体修飾のテンス・アスペクトの現れ方を説明する項目の中で、修飾語が動的述語か状態性のものかということを考えなければならない」ということを



引用し、これを複合動詞に適用し、「後項動詞の文法化は、複合動詞の動的述語から状態性への移行に反映していることが認められた」と述べ、「文法化の第一・第二段階では、連体修飾節内の複合動詞は、動的述語として考えられるが、第三段階では性状規定的述語の文法的特徴を示すのである」と論じている。

以上、先行研究を概観したが、意味の面から見ると、それらの先行研究は主観的なものの扱いが不十分なところがあると考えられる。例えば、田辺（1996）では、「膨れあがる」と「思いこむ」を第三段階の文法化型に属させるが、この段階における後項動詞「―あがる」と「―こむ」の意味合いがどのように異なるかについては論述していない。「かま猫の体は何倍にも大きく膨れ上がり、金色を帯びていきました。」（宮沢賢治『賢治のトランク』）において、後項動詞「―あがる」は前項動詞「膨れる」の状態を強調する働きを表している。これに対し、「人の出入りと一緒に勝手に出たり入ったりしているので、近所の人是我が家の飼犬だと思い込んで、文句の電話がかかってきた。」（佐藤愛子『犬たちへの詫び状』）の「思いこむ」は「近所の人のお考えは間違っている」という意味になり、後項動詞「―こむ」には話者のマイナス評価の意味が含まれると考えられる。この点について、田辺（1996）では言及されていない。

### 8.3 考察対象と分析方法

複合動詞には、同じ形式の後項でも、異なる前項と結びつくことによって意味が異なることが認められる。本章は、生産性の高い、7つの複合動詞後項「―だす」「―かける」「―つける」「―こむ」「―あげる/あがる」「―ぬく」を取り上げ、それぞれの意味的違いを段階的に捉えて、本動詞の意味がどのように抽象化しているのかについて考察するものである。意味上から、複合動詞後項における段階区分は以下のように設定することにする。

第一段階 本動詞の意味がそのまま生きている。（原義・方向）

第二段階 動詞の意味が抽象化しているが、動詞的性質を失っていない。（アスペクト）

第三段階 本動詞の意味が失われて、副詞的意味になる。（副詞的修飾）

第四段階 動詞の意味が感情的意味になる。（モダリティ、評価・丁寧さ）

また、第一段階から第四段階まで、後項の意味は次第に抽象化するが、それぞれ次のような意味的・統語的基準によって区別する。

【基準 A】本動詞の意味が生きているかどうか

【基準 B】本動詞の意味が抽象化して、動詞的性質を失っているかどうか

【基準 C】全体の意味を「副詞＋前項」で表せるかどうか

【基準 D】動作主の動作に対しての評価・丁寧さなどの有無

基準 A の「本動詞の意味がそのまま生きているかどうか」というものは、原義或いは動作の方向を判断するものである。例えば、「一あがる」と「一あげる」の場合、「飛びあがる」、「持ちあげる」のように、動作主や対象物が前項動詞の動作によって物理的に上の場所に移動した場合、本動詞「上がる」「上げる」の意味がそのまま生きていると考えられる。「見上げる」のように、動作主の目ではなく、視線だけが「上」へ移動するので、この場合は、動作の方向を表す。

基準 B の「動詞の性質を失っているかどうか」は本章では第二段階の「アスペクト的意味範疇」に適用する。この場合、後項動詞は前項動詞の動作や行為が時間軸上の段階として捉えられる。例えば、「降り出す」「書き上げる」において、後項「一だす」「一あげる」は元々の動詞の意味が薄れて、それぞれ「降るのが始まる」「書くことを終了させる」という意味であり、動詞の本来的な性質をまだ失っていない。

基準 C の「全体の意味を「副詞＋前項」で表せるかどうか」は、第三段階の「副詞的修飾」になるかどうかを判断するものである。このグループの複合動詞後項は意味的に副詞に似ているものであり、前項の表す動作・行為を強度、程度、時間の長さなどの面で修飾しているものとして捉えられる。例えば、「叱りつける」は「強く叱る」「厳しく叱る」という意味であり、後項の「一つける」は「強く、厳しく」というような意味として捉えられる。「考えこむ」の場合は、「深く考える、深刻に考える」という意味であり、前項は「深く、深刻に」というような意味として捉えられる。

基準 D の「動作主の動作に対して話し手の評価・丁寧さの有無」は第四段階を判断するのに用いる基準である。例えば、「決めつける」は「一方的に断定する」という意味であり、後項の「一つける」は「一方的に」というマイナス評価が含まれていると言える。

## 8.4 考察

以下、各段階の例文を見ながらそれぞれの特徴を考察してみる。

#### 8.4.1 第一段階

- (4) 日本海でロシアのタンカー「ナホトカ号」が転覆し、多くの重油が海に流れだしました。(内山裕之監修『生き物とすみかの関係を知ろう』)
- (5) お兄さんはこっちを向いて、私ににっこりと笑いかけてくれた。(風見潤『黒幕をやっつけろ』)
- (6) 長さ五尺、広さ一尺八寸、厚さ一寸、頭には馬髪を編みつけ、赤白土墨でもって鉤形を画いていた。(森浩一『日本神話考古学』)
- (7) 間もなく、トラックでベッドが運びこまれる。(大森実『わが闘争わが闘病』)
- (8) 『結び』の手品師は二重にした紐を軽く手のひらで持ち上げています。(ジェフリー・バドワース (著) 乙須敏紀 (訳)『結びのテクニック』)
- (9) 人差し指に冷たいものが触れた。ケルトンの禿げあがった後頭が迫った。(新堂冬樹『闇の貴族』)
- (10) 光はもう一度走り、今度はコウモリ男を射ぬいた。(和田登『魔界の使者コウモリ男』)

第一段階においては、本動詞の意味がそのまま複合動詞後項の中に生きている。例

- (4)「一だす」の場合、自動詞の前項動詞と結びついて、複合動詞全体が前項動詞と同じく、自動詞になる。「流れだす」の後項は前項動詞の表す動作「流れる」の「内から外へ」という方向を表し、本動詞「だす」の元々の動作性が少し薄れて、方向だけが残っている。例(5)の「一かける」は「相手に向かって」という方向を表す。例(6)の「一付ける」は元の動詞の「付着させる」という意味をそのまま残している。例(7)～(9)はそれぞれ本動詞の物理的移動の意味が生きている。例(10)の「一ぬく」は、物がある空間の中からある方向に向かって「貫く」という意味を表す。

この段階では、後項には、「動作そのもの」と「動作の方向」の両方の意味が含まれている場合があり、区別するのが難しい場合があるので、ここで区別せず全て第一段階として扱っている。

#### 8.4.2 第二段階

- (11) 娘子軍の兵士たちも一斉に、声を上げて泣きだした。(安能務『隋唐演義』)
- (12) 僕は何かを言おうとして口を開きかけたが、言葉は出てこなかった。(村上春樹『国境の南、太陽の西』)

- (13) 乗り付けてきたクルマを発進させると、男はすぐに携帯電話を取り出しました。(横田濱夫『騙しのカマクリ』)
- (14) 白いビーズで細長く編み上げたベルギーのシャンデリア。(岡崎英生『BISES』)
- (15) 魚は焼きあがってから直ぐに網から取り出した方が取りやすいのか。  
(Yahoo!知恵袋)
- (16) たとえ世界を敵にしてもキミだけは守りぬきたいんだ。(Yahoo! 知恵袋)

この段階では、「一だす」の場合は自動詞とも他動詞とも結合して、動作の開始段階というアスペクト的意味を表す。「一かける」の場合は、前項の動作が始まる直前或いは途中まで行うというアスペクト的意味を表す。この段階において、前項動詞には「挫折しかける」「反論しかける」「枯渇しかける」「沈没しかける」のようなスル動詞の形、及び「行き過ぎかける」「思い出しかける」「作り立てかける」のような「V+V」の複合動詞も観察される。「一つける」はいつもある動作・行為を行うというアスペクト的意味(習慣)を表す。「一あげる」「一あがる」は動作の完了を表し、「一ぬく」は動作を「最後まで」やるというようにそれぞれ時間軸における位置づけを表す。例えば、「一ぬく」の場合、「結局空港へ着くまで六台の車を追いぬく。」(はた万次郎『北海道田舎移住日記』)を「それぞれのテーマでおおむね五年は考えぬく…」(日垣隆『エースを出せ!』)と比べて、前者は動作「追う」の移動を表すが、後者は動作「考える」の継続時間を表す。逆に、「走者は10分にわたってアメリカ人を追いぬいた」とは言えない。以上で述べたように、動作の開始・開始の直前・途中・終了・習慣などのような時間概念はどの動作においても存在しているので、第一段階に比べて、より広範囲の動詞(活動動詞, 移動動詞, 変化動詞)が前項動詞になりうる。

#### 8.4.3 第三段階

- (17) 家の中に入ると、お金や宝石のかくし場所をたちまち見つけたした。(那須正幹『どろぼうトラ吉とどろぼう犬クロ』)
- (18) 男たちに殴りつけられる度に、剛太の悲鳴がどんどん大きくなっていた。(辻仁成『ニュートンの林檎』)
- (19) 養母が焼死したと告げられた途端、その場に座り込んでしまったそうですが、… 佐野洋『巡查失踪』)
- (20) 後手に縛り上げられた手首が感覚を失くしている。(野田昌広『銀河乞食軍団』)

- (21) 木村は膨れあがった唇を痛そうに動かして、それでも直の顔を見ると、まず強がりを言った。(三朱門『ささやかな不仕合わせ』)
- (22) ユダヤ人たちはどうしてよいか分からず、困りぬいたあげく、カバラ学者たちのところへ行って、なんとか掬ってくれるように頼み込んだ。(澁澤龍彦『黒魔術の手帖』)

第三段階では、後項動詞は動詞の実質的意味を失って、「動作の強さ、動作の量、時間の長さ」などの範疇を表し、この範疇の意味を表す副詞と同じような働きを持っていると考えられる。従って、前項動詞の範囲も広く、自動詞とも他動詞とも結びつく。例えば、「殴りつける」の「つける」は前項の動作動詞「殴る」の動作の強さを修飾し、「強く殴る」といった意味になるので、「動作過程」を修飾する例となり、「老けこむ」の「こむ」は前項の変化動詞「老ける」の結果状態の程度を修飾し、「すっかり老けてしまう」のような意味になるので、「状態結果」を修飾する例となる。「見つけだす」の「一だす」は動作「見つける」の結果を強調する働きを持っていて、単に「見つける」に比べて、「見つけた」結果対象物を明るみに出すというような意味を示していると考えられる。「聞きだす」の場合も同じように、単なる「聞く」だけではなく、相手の「考え方」を聞いて、自分の情報として入手するという意味である。「膨れあがる」は「大きく膨れる。数量などが、基準や予想を大きく上回る」という意味を表し、後項は「大きくなる」、或いは、唇が膨れて、結果状態として「大きくなった」という副詞的なものに相当して、前項の表す動作を強調し、或いは副詞的に修飾しているものとして捉えられる。「涸れあがる」は「すっかり涸れる」という意味で、後項「一あがる」は前項「涸れる」の状態を修飾しているものとして捉えられる。

#### 8.4.4 第四段階

- (23) ある研究者は、人格異常者は「人間の素質的な変種」と決めつけ、治療を施してもその異常性は生涯変わらない、と**いって**さじを投げています。(ゲーリー・ブーカフ (著) 松浦俊輔 (訳) 『カルマは踊る』)
- (24) それは、私たちの信じこんできた価値観を揺さぶり、思わず目をそむけ否定したくなることであるかもしれない。(中島由佳利『新月の夜が明けるとき』)
- (25) 大切な人への想いを切々と歌いあげる彼女の情感豊かな歌声が印象深い。(『Weekly ぴあ』)

第四段階の「モダリティ（感情的意味）」は「評価」「丁寧さ」などのようなものが含まれている。「評価」は、動作主の動作や行為に対する話し手の評価を表す。「丁寧さ」は、話し手と聞き手の間に、上下関係、尊敬、謙譲などの要素が入ってくる現象であり、社会的階層関係の現れであると言える。例えば、「そこで、規格外米を自主流通米でやってもらって、それで余った分は政府が買いあげることを検討しておく。

（『国会会議録』）」の「買いあげる」のような動詞は、政府と国民、或いは客と店員の間に使われるが、ここでは国民から見ると、政府は上、店員から見ると客は上、というような地位的差異が反映されている。

## 8.5 考察の結果

ある動作・行為が行われる場合、その動作は主に動作主、対象者、対象物、話し手、などの要素に関わっていると思われる。そのうち、動作主は動作・行為の実行者であるので、動作に一番近い関係として扱われる。動作の方向は実際の動作の意味から少し離れて、その方向だけ残っていると言える（第一段階）。動作は時間の流れに従って行われるものであり、その時間軸における位置づけは第一段階より離れているが、その動作的意味がまだ失っていない（第二段階）。動作の強度、時間の長さ、動作の量などの要素は動作を行う時の付加的要素であり、動詞の実質の意味を失っており、動作・行為の強さ、時間の長さ、強度などを修飾する役割を果たしているものとして捉えられる（第三段階）。話し手の評価、尊敬などの要素は動作そのものから一番離れた言語主体に関わるものとして捉えられる（第四段階）。

複合動詞後項「一ぬく」を取り上げて説明してみる。原義の「引きぬく」は「引っ張って外に取り出す」という移動意味を表す。「守りぬく」の場合は、元の移動の意味が薄れて、「最後まで」という時間的意味を表す。「困りぬく」の場合は、後項の意味はさらに抽象化し、「困る」状態の程度的強さを表すようになった。「このように、後項「一ぬく」の意味が段階的に抽象化している。

上述の四段階において、各段階の区別は難しい場合も考えられる。これは、動詞の意味は動詞自身の多義性及び文脈の要素からの影響を受ける場合があるからだと思われる。

以上の考察に基づいて、複合動詞後項「一だす」「一かける」「一つける」「一こむ」「一あげる/あがる」「一ぬく」の意味抽象化の段階を分類した。その結果は以下の表1のようにまとめられる。ただし、同じ形式の複合動詞でも文脈によってその意味が

変わる場合もあるため、各複合動詞の個別的な多義性についてはここでは考慮せず、代表的な意味に基づいて分類した（文脈によって意味が変わってもその意味が以下に示した表の中のいずれかの段階に所属すると考える）。

表 1 複合動詞後項の意味的抽象化の段階とその語例

<div>段階</div> <div>後項</div>	1	2	3	4
	原義・方向	アスペクト	副詞的修飾	モダリティ (感情的意味)
—だす	流れだす	泣きだす	見つけたす	/
—かける	笑いかける	読みかける	/	/
—つける	編みつける	乗りつける	聞きつける	決めつける
—こむ	運びこむ	/	座りこむ	信じこむ
—あげる	持ちあげる	編みあげる	縛りあげる	買いあげる
—あがる	飛びあがる	焼きあがる	膨れあがる	/
—ぬく	引きぬく	守りぬく	困りぬく	/

以上の分析結果から、本章では複合動詞後項の意味的抽象化における方向性を以下のように提案する。ただし、ここに述べた方向性はあくまで傾向であり、絶対的なものではない。

方向→アスペクト→副詞的修飾→モダリティ（感情的意味）

第一段階の「方向」から第四段階の「感情的意味」まで、後項の意味が原義から離れて、元々の意味を次第に失っていくと考えられる。それぞれの複合動詞において、具体的な抽象化のルートは「方向→アスペクト」、「方向→モダリティ（感情的意味）」、「方向→副詞的修飾」、「副詞的修飾→モダリティ（感情的意味）」というように、様々なタイプが見られると考えられる。また、田辺（1996:2）にも、「空間領域の移動を示す動詞が文法形式に転換しやすいことは、他言語にも認められる事実である。」という指摘があるが、これらの動詞は主に移動を表すものであり、複合動詞の後項として文法化しているものとして考えられる。本章の考察では、移動動詞のみならず、「—つける」「—かける」などのような動作動詞の場合もそういった意味的抽象化の傾向が見られることが予想される。

## 8.6 まとめ

以上、本章では、複合動詞後項における意味的抽象化の方向性を探ってきた。本章に提示した複合動詞文法化の一般的傾向に基づけば、従来の語彙的複合動詞と統語的複合動詞（の一部）及び語彙的複合動詞の下位区分（影山（2013）の言う「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」）の連続性を統一的に説明できる可能性があるのではないかと考える。ただし、ここで述べた「統語的複合動詞」は「～出す」「～切る」「～直す」などのような複合動詞を指し、「～始める」「～終わる」「～続ける」などのような複合動詞を除外する<sup>1</sup>。

本章の考察結果は以下のようにまとめられる。

- ①複合動詞後項の意味的抽象化は「方向」「アスペクト」「副詞的修飾」「モダリティ」（感情的意味）の4段階に分けられる。
- ②日本語複合動詞の後項における意味的抽象化の方向性は「方向→アスペクト→副詞的修飾→モダリティ（感情的意味）」である。

本章は複合動詞後項における意味的抽象化の方向性を考察した。この方向性は従来指摘されてきた日本語の述部のカテゴリーの配列順と対応しているが、同じ形式の複合動詞の多義性についてはどのように捉えたらよいか、更なる検討が必要である。また、この7つの複合動詞後項は抽象化段階において、4つの段階がすべて備わるものもあり、2つや3つの段階しかなく、他の段階が欠如しているものも観察される。それぞれの抽象化の特徴が異なるからであると思われるが、より詳しく考察しなければならない。これも含めて今後の課題とする。

### 〈注〉

1. 寺村（1984:174）では、「V ハジメル」は、ほぼ、〈V することを始める〉という意味であるが、その〈V する〉は自動詞でも他動詞でも、また意志動詞でも非意志動詞でもよい。V の文法的性質が、V ハジメル全体の文法的性質を決定する。」という指摘があるように、複合動詞「～始める」において「開始」という意味はその本動詞「始める」の中にすでに含まれていると考えられる。一方、複合動詞「～出す」において、「開始」の意味はその本動詞「出す」には含まれていないものであり、元の意味から拡張されているものとして認められる。従って、同じ統語的複合動詞といっても、「～始める」と「～出す」は異なるタイプとして捉



えるのが妥当であると思われる。同様に、「～終わる」「～続ける」と「～切る」「～直す」も性質の異なるものとして扱うのがよいと考えられる。

## 第 II 部

複合動詞後項における「副詞的修飾」について

## 第 9 章

### 強調を表す複合動詞後項の成立要因について

#### －「～こむ」と「～きる」を対象として－

##### 9.1 はじめに

複合動詞「～こむ」と「～きる」の意味・用法については、従来様々な視点で分析されている。複合動詞後項に着目すると、いずれも前項動詞の動作や変化を副詞的に修飾する用法が見られる（ex.実を摘んでいるうちに疲れて眠りこんでしまった。経済産業新聞は腐りきっています）。先行研究では、これを「強調」などとして扱っている。しかし、それぞれの側面を強調するのかについては、まだ明らかにされていない。また、これらの複合動詞後項に関する今までの研究は、分類に留まっており、その意味派生については詳しく論述されていないと考えられる。

本動詞「こむ」について、『日本国語大辞典』（第2版）では、「こむ」（込む、籠む）の語義として、㊦「ある場所いっぱいに入や物が入り合う、また、用事などが一度に重なりあう」と㊧「複雑に入り組む、精巧に作られる」の2つの意味があることが示されている。本動詞「きる」について、同辞典では、「きる」（切る、伐る、斬る、截る、剪る）の語義として、「つながっているもの、続いているものなどを断つ。また、付いているものを離す」の意味があることを示している。

本章の言う「強調」とは、複合動詞の後項動詞が前項の表す行為や動作の強さを表し、後項を付けることによって対象に与える影響がより強い、或いは、動作がより強く行われる（状態変化が強くなる）ように感じることを指す。例えば、「信じきる」、「分かりきる」、「信じこむ」、「考えこむ」、「踏みつける」、「叱りつける」、「締めあげる」、「縛りあげる」、「震えあがる」などの下線部である。本章は、これらを「強調を表す複合動詞後項」と呼ぶ。本章は、「～こむ」と「～きる」という2つの複合動詞

を対象として、それぞれの具体的な前項動詞及び例文における特徴を分析し、また、強調を表す複合動詞後項が、それぞれの複合動詞の中でどのように成立したのかについて明らかにすることを目的とする。

## 9.2 先行研究

今までの先行研究では、本章の言う「強調を表す複合動詞後項」をそれぞれ「確認・強調」（斎藤 1992：327）、「極度」（姫野 1999：77）、「程度進行」（姫野 1999：60）、「強調」（姫野 1999：42）などとして扱っている。

武部（1953）は、「後項動詞」を「複合動詞における補助動詞的要素」として扱われ、「～こむ」の意味を「強調」に、「～きる」の意味を「強調」と「完遂」に分けている。しかし、「強調」を表す「～こむ」と「～きる」について詳しく論述していない。

森田（1989）は、複合動詞「～こむ」について、本章の言う「強調」の用法を、「終了意識が、それ以上は進まないという限界意識、完全に行き着く限度まで達したという強調意識となり、「非常に」、「完全に」の意を添えることにもなる」ということを指摘しているが、詳しく分析していない。

田辺（1996）は複合動詞の V2 の意味の抽象化を文法化という視点から考察している。複合動詞の構成する動詞の辞書的意味が、複合動詞形成後もどの程度生きているかによって、大きく以下のように 3 種類に分けている。

- (1) a. 2 つの動詞のそれぞれの辞書的な意味が生かされているもの－意義融合  
ex. 拾い上げる, 飛び出す, 叩き壊す  
b. 前項動詞が、接頭辞化しているもの  
ex. 取り決める, 突っ込む, こみ上げる  
c. 後項動詞が接辞化しているもの－文法化型  
ex. 読み切る, 作り上げる

また、田辺は後項動詞の文法化の段階についても詳しく論じている。例えば、「～こむ」における文法化の段階を以下のように 3 つに分けて論じている。

- (2) 第一段階：ボールを投げ込む。（動作性の前項動詞+（中へ）入る/入れるという意味）

第二段階：このバットは、よく打ち込んでいる。(動作性の前項動詞+程度  
や密度が高いという意味の補助動詞化)

第三段階：じっと考え込んでいた。(非動作動詞+状況の程度の強さを表す  
補助動詞化)

姫野(1999)は、多義的後項動詞の意味・用法に着目して、複合動詞「～こむ」の用法を「内部移動」と「程度進行」の2種類に大別している。本章の言う複合動詞後項「～こむ」の「強調」の用法を「程度進行」と呼び、それに対して、「動作・作用の進行により程度が高まり、ある密度の濃い状態に達することを表している」と述べている。さらに前項動詞の意味特徴によって「固着化」、「濃密化」、「累積化」の3つに下位分類している。複合動詞「～きる」の用法に関しては、①切断・終結、②完遂、③極度の3つに分けている。また、本章の言う「強調」を表すものを「極度」としている。

それ以外の先行研究としては、複合動詞「～こむ」を分類しているもの(黄 2004, 松本 2009 など)、「～きる」の意味について分類しているもの(杉村 2008, 新沼 2010 など)が多く見られた。

以上の先行研究を概観すると、複合動詞の後項を「強調」などとして扱うことに留まり、その意味派生については詳しく論述されていないと言える。なお、「～きる」、「～ぬく」、「～とおす」、「～果てる」などを「完遂」として扱う先行研究も見られたが、本章で論じる「強調」とは違っているので、本論では言及しないこととする。

### 9.3 研究方法と強調を表す複合動詞後項の位置づけ

本章は姫野(1999)の複合動詞のリストをもとに、国立国語研究所によって開発された中納言(BCCWJ)、「複合動詞レキシコン」から複合動詞「～こむ」と「～きる」の用例を収集し、その中から強調を表すものだけを抽出して、研究対象とする。ただし、「勢いこむ」、「意気こむ」など「こむ」の前に名詞が来る場合、「馬鹿にしきる」のような「きる」の前に動詞以外のものも一緒に入っている場合があるが、それらは全て研究の対象から除外する。

例文収集の方法は次の通りである：

- (3) BCCWJからの例文を優先的に収集する。例文における動作の主体、共起する成分ごとに集める。

- (4) 姫野 (1999) のリストに挙がっている語で BCCWJ からの例文が見られない場合は、複合動詞レキシコンと [www 検索ツール www.goo.ne.jp](http://www.goo.ne.jp) から検索し、補足する。

なお、複合動詞の分類について、影山（2013）では、「語彙的複合動詞を主題関係複合動詞とアスペクト複合動詞に区分することを提案し、アスペクト複合動詞が、従来の語彙的複合動詞と統語的複合動詞の間をつなぐ位置にあるだけでなく、歴史的変化や多言語との対照においても重要な役割を果たすことを示唆している」、と述べている。影山（2013）は語彙的複合動詞を以下のように新たに2分類している。

- (5) 主題関係複合動詞
- 手段：V1 することによって，V2。ex. 突き落とす，切り倒す
  - 様態：V1 しながら V2。ex. 流れ着く，転げ落ちる
  - 原因：V1 の結果，V2。ex. 歩き疲れる，抜け落ちる
  - 並列：V1 かつ V2。ex. 忌み嫌う，恋い慕う
- (6) アスペクト複合動詞
- 補文関係：V1 という行為／出来事を（が）V2。  
ex. 聞き逃す，編み上がる
  - 副詞的：V2 が副詞的に V1 の意味を補強。ex. 晴れ渡る  
（=すっかり晴れる），使い果たす（=全部使う）

強調を表す複合動詞後項の位置づけについて、本章は上に示した影山（2013）の分類に基づき、「アスペクト複合動詞」の「副詞的」とされているものの一種として扱う。

#### 9.4 強調を表す複合動詞後項「～こむ」「～きる」の前項動詞について

#### 9.4.1 前項動詞の種類

考察対象は姫野（1999）の「程度進行」を表す「～こむ」と「極度」を表す「～きる」である。具体的には以下の表 1 に示す（語数は必ずしも姫野（1999）のリストと一致するとは限らない。検索しても出ない語がいくつかあるためである）。

表 1 姫野（1999）の分類

「～こむ」の前項動詞		
固着化（18）	濃密化（14）	累積化（14）
眠る，寝る，黙る，塞ぐ しょげる，思う，考える 決める，覚える，話す，喋る， 構える，気負う，惚れる，溺れ る，困る，弱る，信じる	老いる，老ける，やつれる へばる，冷える，枯れる，咳く， 急く，じれる，立てる，めかす， しゃれる，化ける，騙す	歌う，泳ぐ，さらう，磨く 拭く，練る，読む，漬ける 履く，煮る，炊く，洗う 食べる，鍛える
「～きる」の前項動詞		
自然現象（30）	生理的現象（19）	感情や精神的働き（37）
枯れる，静まる，萎ぶ，乾く 腐る，沈む，熟す，売れる，育 つ，伸びる，撓む，歪む，緩む， 煮える，固まる，衰える，汚れ る，明ける，清まる，冴える， 浸る，冷める，抜ける，落ちる， 暮れる，開く，消える，寂れる， くすみる，すすける	疲れる，くたびれる，息せく，む くむ，やつれる，飢える，空く 酔う，青ざめる，かすれる，ただ れる，凍える冷える，火照る，う だる，かじかむ，なおる，しわ がれる，痩せる	困る，苦る，慌てる，いじ ける，荒む，だれる，だらけ る，溺れる，惚れる，ふざけ る，浮かれる，狂う，のぼせ る，しょげる，怯える，白け る，奢る，甘える，興じる， 慣れる，馴染む，恐れる，諦 める，バカげる，忘れる，わ かる，決まる，頼る，張る 弾む，なめる，信じる，塞ぐ 任せる，心得る，悟る，割る

本章は複合動詞の後項に着目し，その中で前項の表す動作や変化を副詞的に修飾する働きを持っているものを分析対象として，前項動詞のどのような側面を修飾するのかについて分析するものである。考察対象となる複合動詞において，前項は複合動詞の意味的中心であり，後項動詞は修飾的な働きをしている補助成分となっている。そのため，前項動詞の細かい分類が非常に重要なので，動詞の分類については陳（2013）にならい，Vendler（1967）の動詞の4分類に従って「状態動詞」，「活動動詞」，「変化動詞」，「使役動詞<sup>1</sup>」の4つに分ける（もともとは状態動詞，活動動詞，達成動詞，到達動詞となっているが，達成動詞と到達動詞は混乱されやすいため，それぞれ変化動詞と使役動詞として示した）。また，その中の「変化動詞」の進展性・非進展性については，佐野（2006）などの先行研究に従って説明する。考察対象の前項動詞を分

類し、その結果は以下の表 2 に示している。

表 2 強調を表す複合動詞「～こむ」と「～きる」の前項動詞の種類

	活動動詞	変化動詞	使役動詞	状態動詞
両方とも結合できる前項動詞	2	13	0	0
「～こむ」しか結合できない前項動詞	30	13	7	0
「～きる」しか結合できない前項動詞	12	55	3	0

#### 9.4.2 「こむ」と「きる」両方とも結合できる前項動詞

強調を表す場合、後項動詞「きる」とも「こむ」とも結合できる前項動詞には、以下に示した 13 語がある。

塞ぐ、しょげる、枯れる、惚れる、信じる、(恋愛に)溺れる、困る、冷える、  
やつれる、騙す、(喜びに)浸る、(心の根が)腐る、弱る

そのうち、「騙す」と「信じる」は活動動詞<sup>2</sup>で、他は変化動詞である。また、変化動詞は、人の気持ちを表すものと物事の状態を表すものに分けられる。具体的に同じ前項動詞（塞ぐ、しょげる、信じる、惚れる、冷える）を持っている例文をいくつか抽出して、以下のように示す。

- (7) 病人は回復し、塞ぎこんでいた連中も、一挙に溜飲を下げた。(加藤仁『定年百景』)
- (7') ほんの数カ月の間に、思いもよらない出来事ばかりで沈んで塞ぎきっていました。(http://schwarz777.exblog.jp/m2013-04-01/)
- (8) 苦しい闘病生活の末、医者からは手術を告げられ、なんの心の準備もなかった張先生は、すっかりしょげこんでしまった。(鷹木敦『お笑い超大国中国の真実』)
- (8') すっかりしょげきってしまう患者さんを見ていると、気の毒になってくる。(五木寛之『凍河』)
- (9) 病気ではないのに、自分は病気だと信じこんで煩悶する。(小野繁『ドクター・ショッピング』)



- (9') お前はものすごくかわいい、普通の子と違うって言われて、そう信じきっ  
ていて… (伊藤比呂美『プチタンファン』)
- (10) 名前を変えさせ、発行スケジュールを無理矢理にくりあわせて、大急ぎで  
掲載したのは、彼がいかにその作品に惚れこんでいたかを物語っている。  
(野田昌宏『「科学小説」神髄』)
- (10') 男は女に惚れきっていたから、別れたくないし、自分のものにしておきた  
かった。(佐江衆一『被害者の刻印』)
- (11) 雪の中に立ちつくしていたので、からだの芯まで冷えこんだぞ。(安西篤子  
『義経の母』)
- (11') たしかに佐知の手は冷えきっている。(阿部牧郎『出合茶屋』)

これらに共通している前項動詞を持っている「～こむ」と「～きる」の例文を考察  
すると、複合動詞の後項「こむ」と「きる」は強調を表すという点で共通しており、  
意味的にも近いと考えられる。例えば具体的な例文を見てみると、複合動詞「冷えこ  
む」と「冷えきる」は、いずれも人の体やものの温度が下がる、或いは関係が冷める  
という意味を表すことがわかる。以下に示したものがその例である。

- (12) 夫婦関係が冷え込んでしまった。(作例)
- (12') 夫婦関係が冷え切ってしまった。(作例)

上の例文(12)と(12')を見てみると、主体は両者とも「夫婦関係」であり、同  
じ状況を指していると捉えられる。「夫婦関係がすっかり冷えてしまった」というよ  
うに、後項動詞「こむ」と「きる」は程度の強さを表す副詞成分「すっかり」などに  
相当すると考えられる。しかし、異なった形態の後項動詞を持っている以上、何らか  
の異なるところがあると考えられる。次は用例の多い「冷えこむ」と「冷えきる」を  
取り上げて、分析していく。

#### 9.4.3 「冷えこむ」と「冷えきる」の特徴

紙幅に限りがあるため、複合動詞「冷えこむ」と「冷えきる」のみを抽出し、それ  
ぞれの用法を具体的な例文の中から考察する。田辺(1996:9)の「後項動詞の文法  
化は、複合動詞の動词的述語から状態性への移行に反映していることが認められた」と  
いう記述を踏まえ、本章は収集した例文を連体修飾か主述か、及び主体が具体的なも

のか抽象的なものかによって分類した。その結果は以下の表 3 にまとめて示す。

表 3 からわかるように、複合動詞「冷えこむ」と「冷えきる」いずれも連体修飾関係と主述関係の例文に使われていて、主体は具体的なものと抽象的なものの両方に見られる。「冷えこむ」の連体修飾関係を見ると、主体が具体的なものを表す例は見られなかった。連体修飾の例自体が少ないが、主体は抽象的なものに限られている。主述関係に使われる例は連体修飾関係に比べて圧倒的に多い。主述関係において、主体が具体的なものの場合は気温や人の身体に限られている。主述関係の抽象的なものの修飾は、主体が多様であり、経済、市場、就職、夫婦関係や両国関係などに使われていて、使用範囲が広い。

表 3 複合動詞「冷えこむ」と「冷えきる」の例文における特徴

冷えこむ (64)		
連体修飾関係	具体的な物	／
	抽象的なもの (8)	日中関係, 消費マインド, 東京市場, クリーニングや花業界, アジア外交, 夫婦の愛情, 夫婦仲, 様子
主述関係	具体的なもの (14)	夜半, 今朝, 今日, 夕暮れ, 夜の空気, 寝具, 高地, 肩先, 手足, 背中, 足腰, 朝晩, 場所, 明け方
	抽象的なもの (42)	実体経済, 消費意欲, 景気, 消費, 住宅業界, 住宅の販売, 企業マインド, 消費者マインド, 個人消費, 海外旅行市場, 世界貿易, 中小企業の設備投資, 日本経済, 対西側関係, 地方経済, 株価, 両者の関係, 世界的な IT 需要, 日朝関係, インターネット, 世界の皮毛需要, 自動車市場, 市場心理投資マインド, 裸商売, 携帯電話市場, イケメンドラマ市場, 高額品やブランド品の市場, 住宅建設, 受注, 町の林業, 対日感情, 女子学生の就職不動産市場, リート市場, 夫婦の関係, 日中関係, 夫婦の仲, 内需, 政治, 就職事情, 家庭生活
冷えきる (58)		
連体修飾関係	具体的なもの (25)	身体, 弁当, オフィス, 天気, 足, 冬場の車内, 校舎, 冷凍食品, 空気, 朝, 山頂, スペアリブ, 指, 夜明け, MacBook, エンジン, 卵巣と子宮, 場所, 館内, 水, 倉庫, 頬, 海, 生徒, コカ・コーラ
	抽象的なもの (21)	与野党, 日中関係, 心, 中国と北朝鮮の関係, 夫婦仲, 復讐消費, 世界, 実体経済, 現場力, 内需刺激, 集团的感情, 結婚生活, テンション, 政治, 熟年カップル, 宇宙, 愛, 人体機能, 経絡, 消費ムード

主述 関係	具体的な もの (7)	手, 身体, 部屋, 指先や足先, 胃腸, ビール, 現代の女性の子宮
	抽象的な もの (5)	日韓関係, 人間関係, 懐, 市場, 景気

それに対して、「冷えきる」の場合では、連体修飾関係の使用率が高く、主体は具体的なものと抽象的なものの両方とも多く見られる。具体的なものの場合では、主体は人の身体、気温、物事、場所など幅広く使われていて、この点から見ると、「冷えこむ」の連体修飾関係に比べて範囲が広い。抽象的なものの場合では、「冷えこむ」より例が少ないが、同じように経済に関するものや国と国の関係、夫婦関係を表す場合が多い。主述関係の例は連体修飾関係より少なく、そのうち、具体的な主体の場合は、主に人の身体や物事の温度に用いられる。つまり、「冷えこむ」と「冷えきる」は抽象的なものを主体とする時に、同じ用法を持っている、すなわち、重なっている部分が多いが、「冷えこむ」の方が修飾する主体の範囲が広いと言える。また、具体的なものを表す場合には、「冷えきる」の方が修飾する主体の範囲が広いと指摘できる。

## 9.5 「～こむ」と「～きる」の前項動詞及び派生関係

### 9.5.1 複合動詞「～こむ」の前項動詞及び派生関係

先行研究では、複合動詞「～こむ」の意味を「内部移動」と「程度進行」に2大別している。姫野（1999）が「内部移動」として扱うグループの複合動詞「～こむ」は、前項動詞が主に移動や様態を表し、後項は主体や対象物の移動を表すものである。「程度進行」は本章の「強調」に相当する。表2に示したように、「～こむ」の前項動詞は活動動詞が一番多く、その次に多いのは変化動詞であることがわかった。変化動詞の場合、「主体変化動詞に変化は必須であるが、動詞によって変化の仕方も様々である」（佐野（2006：8））。佐野（2006）は変化動詞句を「+進展的变化」と「-進展的变化」に分け、さらに「+進展的变化」を「進展性に限界を持たない動詞句<sup>3</sup>」と「進展性に限界を持つ動詞句」に下位分類している。「進展性」という概念について、森山（1988）は、「過程を持つ動きであると同時に、その過程において変化が漸次的に進むという意味」としている。佐野（1998）は、「程度副詞と主体変化動詞との共起から見ると、程度副詞によって、共起する動詞（進展性に限界を持つか否か）、修飾の仕方が大きく異なる」と述べている。強調を表す複合動詞後項は前項を副詞的に修飾

する働きをしていて、この場合の後項動詞は程度副詞と似ている機能を持っているため、前項動詞の進展性の有無は後項動詞の意味に影響をもたらすと考えられる。本章は、佐野（1998）動作の「進展性」についての分析を踏まえて、以下のようなテストを設定し、進展性に限界を持つか否かを判断する。

- (13) a. 「少し V した」と共起できるか否か  
 b. 主体が単数の場合、「次第に V してくる/いく」と共起できるか否か  
 c. 「もっと V した」と共起できるか否か

例えば、「温まる」を例として説明して、次の例文を見よう。

- (14) a. 少し温まった。  
 b. 次第に温まってくる（いく）。  
 c. もっと温まる。

この 3 つのテストを用いて検証してみると、各例文において、「温まる」は主体の量ではなく、動作（変化）の量を表すことが判断できるため、変化動詞「温まる」は「進展性に限界を持たない動詞」であることがわかった。佐野（1998）では、「「温まる」は「変化達成が漸次的に累加され、そのたびに程度の異なる結果状態が成立する」という原理的には無限に起こりうる変化であり、ほんのわずかでも温度が上昇すれば一定の変化が達成された」ことになる」と説明している。佐野（1998:9）の図を引用して、以下の図 1 ように示すことができる。

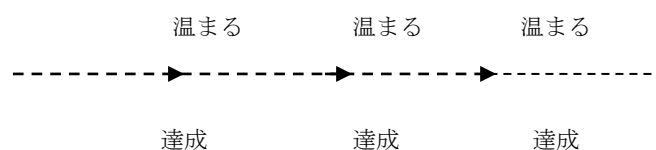


図 1 「温まる」の進展性(佐野 1998)

強調の意味を表す場合、複合動詞「～こむ」の前項動詞には活動動詞が多いことが明らかになった。活動動詞「走る」を例として挙げて見ると、「走る」という動作そのものには限界点がなく、到着点を付加成分として付けられない限り、「走る」という動作は限界点を持たない。この場合、後項動詞「こむ」と結びつくことで、主体の活動が焦点化され、主体の意志性が強くなり、後項動詞「こむ」の意味も前項動詞の

表す動作・行為の多回性・繰り返しなどに変わる。前項が変化動詞の場合、変化が進んでいき、後項動詞は抽象的な状態変化の強調として捉えられる。これらのことを踏まえると、「こむ」と結合する変化動詞はすべて進展性に限界を持たない動詞であり、「こむ」と結合しても、複合動詞の表す状態の変化は限界点を持たないと考えられる。

複合動詞「～こむ」の意味と意味の間の関連性について、筆者は他の論文で分析してきた。注意したいのは、複合動詞の後項「～こむ」の基本義（内部移動）は本動詞「こむ」の意味とは全く違うことである。しかし、今回の考察結果を見ると、強調を表す場合、「～こむ」の後項は本動詞「こむ」と何らかの関連性があると言える。本動詞「こむ」は、「道がこんでいる」、「手のこんだ仕事」といった用法を持って物事の静態的状态を表しており、それ自体の意味（「ある場所いっぱいに人や物が入り合う、また、用事などが一度に重なりあう」）にも「程度の強調」という要素が含まれているために、強調を表す複合動詞後項の意味と関連性があるのだと考えられる。ただし、本動詞の場合は、人や用事などが多量という意味であり、複合動詞の場合は、前項動詞の表す動作や変化が多量であるという意味として捉えられる。また、筆者の考察結果によると、「～こむ」と共起するものには様態や時間を表す副詞（ex. 「何度も・十分に鍛えこむ」、「しっかりと洗いこむ」、「どんどん練りこむ」、「勝手に信じこむ」、「何時間も喋りこむ」など）が多く見られる。このことから、「～こむ」においては動作・変化の過程に焦点が当てられており、その結果は重要視されていないと言える。つまり、複合動詞の意味は本動詞の意味の一部であるということである。以上のことを踏まえると、「～こむ」の意味派生は以下のようにまとめられる。

(15) 「こむ」⇒〈変化動詞〉ある場所いっぱいに人や物が入り合う。用事などが一度に重なり合う

移動を表す活動動詞+こむ ⇒ 内部への移動（V1 は移動, V2 は方向を表す）

活動動詞+こむ ⇒ 動作・行為（強さ・深さ・繰り返しなど）の強調（V2「こむ」の意味が希薄化し、その意味の一部「いっぱい・重なり合う」のみ残っている。V1 の動作・行為を副詞的に修飾する）

変化動詞+こむ ⇒ 変化過程の強調（V2「こむ」の意味が希薄化し、V1 の変化を強調する）

### 9.5.2 複合動詞「～きる」の前項動詞及び派生関係

姫野（1999）は複合動詞「～きる」を「切断・終結」、「完遂」、「極度」に3つに分けている。本論文はそれに従い、「切断」と「終結」を別々に扱い、4つに分類する。それぞれの用例数は以下の表4のように示す（語数は必ずしも姫野（1999）のリストと一致するとは限らない）。

表4 複合動詞「～きる」の意味ごとの用例数

切断	終結	完遂	極度
12	4	116	106

上の表4からわかるように、複合動詞「～きる」において、「完遂」と「極度」は主な意味として用いられている。ここで意味ごとに前項動詞の特徴を見てみる。

「切断」の意味は本動詞「切る」と同じで、前項は手段を表す。この場合、前項動詞によって対象物が切断されるという結果に焦点が当てられる。「終結」の意味は「切る」という動作の途中でやめるという意味から派生し、前項動詞の行為・動作をやめる（終結する）という意味になる。「完遂」の場合は、前項動詞の表す動作が終わるという意味である。「終結」と「完遂」両方とも動作のアスペクト的側面に焦点を当てており、動作の途中段階や最後の終了段階に位置づけられる。「極度」の意味は本章のいう強調の用法に属し、前項動詞は状態変化を表す場合、動作ではなく、主体の状態が最後の終了段階に位置され、主体の状態変化の結果が焦点になる。「強調」を表す場合、前項動詞はすべて進展性に限界点を持っていないものである。要するに、複合動詞「～きる」は動作の時間軸におけるある段階を表し、動作・変化の結果に焦点を当てていると言える。また、考察の結果によって、例文においては複合動詞「～きる」と共起する副詞的成分が少なく、「完全に」というもののみ見られることがわかった。その意味派生は以下のようにまとめられる。

(16) 「きる」⇒〈活動動詞〉つながっているもの、続いているものなどを断つ。

活動動詞+きる ⇒ 物理的切断（V1 は手段、V2 は切断）

活動動詞+きる ⇒ 時間的切断（V1 は希薄化し、V2 の意味も少し希薄になり、中止を表す）

活動動詞+きる ⇒ 動作の完遂（V2 は希薄化し、V1 の動作は最後まで完了

する)

変化動詞+きる ⇒ 変化結果の強調 (V2 の希薄化, V1 の変化結果が限界まで達成する)

### 9.5.3 複合動詞「～こむ」と「～きる」の比較

変化動詞と結合する場合、2つの複合動詞の前項にはいずれも進展性に限界を持たないものが入り、また、両者の意味が重なっているところがあると考えられる。両者において異なる点としては、「～こむ」は変化の限界点に達成しないのに対して、「～きる」は変化の限界点に達成するということが挙げられる。前項動詞は複合動詞の意味の中心であり、前項動詞の性質によって、後項動詞の意味が変わる。つまり、後項が前項のどの側面を修飾するかは前項動詞の性質によって決まると言える。具体的に言うと、「～こむ」の「強調」の意味は本動詞「こむ」の中に含まれており、「～きる」の「強調」の意味は動作のある時間軸における段階を表すと考えられる。BCCWJを検索して見ると、本動詞の「こむ」には、「街道が前よりもっとこんでいる」という例文があるが、これは進展性に限界点を持っていない動詞である。複合動詞の後項が強調を表す時、前項動詞の表す動作・変化は進展性に限界点を持たないが、動作・変化の進展に従い、進展性に限界点を持っている強調を表す「～きる」と意味的に重なる場合があると考えられる。また、「～こむ」の意味は動作・変化の過程を強調し、「～きる」の意味は動作・変化の結果を強調するという違いが見られる。同じ前項を持っている「冷えこむ」と「冷えきる」の連体修飾関係を見ると、「冷えきる」の連体修飾関係の用例が多い。このことから、「冷えこむ」より文法化が進んでいることがわかった。

## 9.6 まとめ

本章は複合動詞「～こむ」と「～きる」の強調を表すものを対象とし、中でも用例が多く、同じ前項動詞を持っている「冷えこむ」と「冷えきる」に重点をおいて、それぞれの特徴を考察してきた。考察結果として、具体的な天気やものの温度を表す場合と抽象的な両国関係や夫婦関係などの場合では両方とも使えることがわかった。具体的なものを主体とする場合には、「冷えきる」の範囲が広い。それに対して、抽象的なものを主体とする場合には、「冷えこむ」の範囲が広い。また、強調の意味を前提として「～こむ」と「～きる」の前項動詞を分析すると、それぞれ活動動詞と状態

変化動詞が結合されやすいことがわかった。複合動詞「～こむ」と「～きる」の意味派生については、強調を表す場合の複合動詞は前項動詞が意味の中心であり、後項の意味は前項動詞の性質によって決まるということを論述した。派生関係から見ると、強調を表す場合、「～こむ」は本動詞の意味の一部のみが残って、動作・変化の過程に焦点が当てられる。それに対して、「～きる」は動作の時間軸における段階を表し、動作・変化の結果に焦点が当てられることがわかった。変化動詞と結びつく場合には、「～こむ」と「～きる」の意味が重なっているところがある。また、「～こむ」と「～きる」にそれぞれ違う性質の前項動詞が来るのはこの焦点からの影響を受けているためであると考えられる。

筆者が考察した強調を表す複合動詞の範囲に入れられるものは他にも多数あるが、それぞれの特徴や使い分けなど、先行研究ではまだ十分に論述されていないところがあると考えられる。今後考察対象を増やして研究していきたい。また、語彙的アスペクト複合動詞（～出す、本章の言う強調を表す「～こむ」、「～きる」）と統語的アスペクト複合動詞（～始める、～終わる）とはどう違うかについてもまだ明らかにされていないところがある。それについても今後の課題としたい。

### 〈注〉

1. 状態動詞：時間を超越した静的事象を表す。活動動詞：継続可能な動的事象を表す。変化動詞：何らかの終了点を有する動的事象を表す。使役動詞：何らかの活動を通して、対象物のある場所・状態に変化させることを意味する。（陳 2013：20-23）
2. 「信じる」、「考える」、「騙す」などの動詞を「心理動詞」として扱っている先行研究があるが、本章では三原（2000）に従い、これらの心理動詞を「活動動詞」として扱う。
3. 進展性に限界を持たない動詞句とは、いったん成立した結果状態が更に変化する可能性を持たないものである。例えば、「（湯が）温まる」は進展性に限界を持たないもので、「（湯が）沸く」は進展性に限界を持っているものとしている（佐野 2006：8）。



## 第 10 章

### 複合動詞の後項が前項を副詞的に修飾する場合

#### —「～こむ」を対象として—

##### 10.1 はじめに

本動詞「こむ」について、『日本国語大辞典』（第2版）では、「こむ」（込む、籠む）の語義として、㊦「ある場所いっぱいに入や物が入り合う、また、用事などが一度に重なりあう」と㊧「複雑に入り組む、精巧に作られる」の2つの意味があることが示され、いずれも自動詞として扱われている。また、筆者は現代日本語書き言葉均衡コーパス（以下、「BCCWJ」と略す）で実際の用例を検索した結果、本動詞の「こむ<sup>1</sup>」には上記辞書と同じく2つの用法があることがわかった：①「道（病院）がこんでいる」（＝上記㊦の意味）、②「手のこんだ料理（作業）」（＝上記㊧の意味）など。いずれも物事の状態を表すものである。複合動詞「～こむ」の後項について、『日本国語大辞典』（第2版）では、①あるものの中に入る（入れる）、②十分にする。過度にする。また、長く続ける、③心がとざされ、他を受け付けない状態でする、という3つの意味が示されている。この点から見ると、現代日本語複合動詞の後項としての「こむ」の意味は現代語の本動詞「こむ」の意味と全く重ならず、他の複合動詞と違ったところがあることがわかる。そのため、先行研究では特別な例として扱われている（影山（1993）等）。その意味と用法については、従来、姫野（1999）の「内部移動」と「程度進行」の2分類を踏まえて研究されるのが一般である。姫野（1999）は更に「程度進行」の用法を「固着化」、「濃密化」、「累積化」の3つに下位分類している。しかし、この3つのタイプの間にどのような違いがあるのか、詳しく論述していない。また、「程度進行」の中には程度を表すものだけでなく、後述するようにそれ以外の意味も含まれているが、姫野を含め他の先行研究ではまだ明らかにされていない。

## 10.2 先行研究

影山 (1993) は、複合動詞「～こむ」を特殊な語彙的複合動詞として扱い、他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞のいずれとも結合でき、方向性を表す場合と補文関係を表す場合があるとしている。複合動詞「～こむ」の形成は項構造ではなく、語彙概念構造の段階で起こると主張している。

姫野 (1999) は、多義の後項動詞の意味・用法に着目して、複合動詞「～こむ」の用法を「内部移動」(主体あるいは対象がある領域の中へ移動することを表す)と「程度進行」(動作・作用の進行により程度が高まり、ある密度の濃い状態に達することを表す)の2種類に大別している。また、「内部移動」の用法を移動先によって、①閉じた空間への移動、②固体の中への移動、③流動体の中への移動、④隙間のある集合体または組織体への移動、⑤動く取り囲み体への移動、⑥自己内部(自己凝縮体)への移動、⑦その他、の7つに下位分類し、「程度進行」の用法を進行内容によって、①固着化、②濃密化、③累積化、の3つに下位分類している。

甲斐 (1999) は、複合動詞「～こむ」の「程度深化」の用法について、①前項動詞の意味、②前項動詞の格支配、③「～こむ」全体の意味、④「～こむ」全体の格支配から、「こむ」がつくことによって、前項動詞のどのような行為または状態が深められているのかを導き出せると述べている。しかし、「内部移動」から「程度深化」への発展プロセスについては言及されていない。

松田 (2004) は、認知意味論の手法を用いて「～こむ」を、①V1が「内部移動」を含意しない、二格を伴うもの、②V1が「内部移動」を含意する、二格を伴うもの、③V1が示す状態への変化とその状態への固着の意味を表し、二格を伴わないもの、④V1の反復行為により生じる状態変化を表し、二格を伴わないもの、の4つのタイプに分けている。認知意味論の主要な概念であるイメージ・スキーマに「焦点化」(イメージ図式のどの部分が認知的に際立っているか)という操作を加えることによって、なぜそのような多様な意味タイプが可能になるのか、そして個々のタイプはそれぞれどのような関係にあるのかの説明されている。

松本 (2009) は「こむ」に移動動詞の意味と使役移動動詞の意味の両方があるとした上で、これらを後項とする複合動詞は、普通の移動動詞や使役移動動詞を後項とするものと同じ性質を持つと捉え、由本 (2005) と同じく、複合動詞化とは全て意味構造の合成であり、項構造の操作ではないとする。その意味構造の埋込みは、後項動詞が主要部をなす複合動詞と前項動詞が主要部をなす複合動詞で異なるとする。前者の場合は後項動詞が意味構造で主事象となり、その構造に前項動詞の意味構造が埋め込

まれる。後者の場合はその逆になるとしている。姫野の言う「固着化」タイプの「～こむ」の後項を主要部でないものと見なして、前項動詞の表す状態変化の意味を補強し、移動動詞の「こむ」の延長線上にあるとしている。

金（2010）は、複合動詞「V+こむ」の意味拡張のプロセスを主体化と再分析の観点から捉えることができると述べた上で、Langacker が提示している主体化のパラメータだけでは、「～こむ」の多義を捉えきれないという点を指摘し、「～こむ」の「反復の意味」の獲得の動機付けとそのプロセスを示すことを試みている。特に、言語使用の場で起こっている話し手の意図と聞き手の理解のズレが、新しい意味獲得を動機付ける重要な要因の1つになりうるという点を指摘している。

睦（2012）は、姫野の「～こむ」の分類の1つ「程度進行」を表す「V1+こむ」に焦点を当てて、V1 と「V1+こむ」との意味・構文構造を比較し、ひとまとまりの単語として V1 や「こむ」とは異なる意味・構文的な特徴を持つことが確認できた「V1+こむ」の特徴を次のようにまとめている。①「形態的・文法的な意味の違い」として、「変化より単に状態を表すことに意味の焦点がある」こと、及び受身形やテシマウ形など「V1 とは異なる特定の形態を多くとる場合がある」こと、②「組み合わせる名詞により、V1 とは異なる意味で特徴付けられる」、③「共起する副詞により、V1 とは異なる意味で特徴づけられる」。

張（2012）は、複合動詞「入りこむ」と単純動詞「入る」を比較して、両者と結びつく名詞句を分析することによって、それぞれの特徴を明らかにしている。結論として、①「入りこむ」と結びつく1人称代名詞の使用頻度が低く、着点が自分の所属していない場所や組織である場合が多く見られる、②「入る」は移動物が着点への移動を客観的に表現するが、「入りこむ」はその移動だけではなく、さらに移動物は他の主体に所属する領域に入るという話者の態度・認識を表している、③姫野（1999）が指摘した「抵抗感」は〈異質性〉に起因する、と述べている。

以上、複合動詞「～こむ」の先行研究を概観したが、ここから先行研究には主に2つの流れがあることがわかる。1つは、複合動詞の意味に焦点を当てる「姫野－松田」の流れで、それ以降このテーマに関する研究は主に姫野の分析を受けて進められてきた。姫野は記述的研究の観点から、松田は認知意味論の図式で意味を説明する。もう1つは「影山－松本・由本」の言語学の視点による流れである。由本（2005）では「～こむ」には1つの意味しかないと主張し、複合動詞「～こむ」が他の複合動詞と異なるのは、通常の複合動詞と異なり、前項動詞が骨格となる点であるとしている。

複合動詞「～こむ」は影山（1993）の提示した「他動性調和の原則」<sup>2</sup>に当てはまらず、自動詞とも他動詞とも結合できるので、「他動性調和の原則」に違反している

(この点は影山自身も認めている、詳しい内容は影山(1993: 117-128)を参照されたい)。ただし、これが後項動詞「こむ」そのものの自他の問題なのか、それとも前項動詞の自他性に起因するのかについては未だに明確にされていない。また、意味による分析の代表的な研究である姫野の分類で、全ての「～こむ」の意味が分類しきれるわけではない。例えば、「決めこむ」の「こむ」は「程度進行」で解釈しきれないものが含まれおり、この用法を「程度進行」に入れる妥当性が問題になると思われる。

本論では、姫野(1999)の複合動詞「～こむ」の285語のリストを借用し、それぞれの例文における構文的特徴と前項動詞の特徴によって用法を整理し、姫野の2分類を再検討して、新しい分類を試みるとともに、文法化の視点から、文法化の過程と各分類間の連続性を明らかにすることを目的とする。用例は国立国語研究所によって開発された現代日本語書き言葉均衡コーパスオンライン版(BCCWJ)と朝日新聞オンライン版無料記事から検索したものである。

また、文法化研究には言語を歴史的に扱う通時的的研究と静態的に扱う共時的的研究があるが、本論では複合動詞「～こむ」を現代共時態の視点から扱い、通時的に扱うものではないことを予め断っておく。

### 10.3 複合動詞「～こむ」の用法

#### 10.3.1 「内部移動」の用法

「内部移動」を表すグループにおいては、後項動詞「こむ」を「入る」、「入れる」という意味として捉えることができ、複合動詞の意味の主要部は後項が担っている。前項は主体や対象物の移動の様態、方法、目的を表す。前項動詞(V1)と後項動詞(V2)の結合関係によって以下の4つのタイプに分けることができる。

- ① V1とV2は同時に発生する。V1はV2の様態を表すもの。V1ながらV2。(V2「こむ」は自動詞としての用法) ex. 暴れこむ, 躍りこむ, 駆けこむ, 潜りこむ, 転がりこむ, さ迷いこむ, 忍びこむ

- (1) モルギ汗は北方の騎馬民族で、毎年恒例のように岐安に暴れこんでは掠奪をしてゆくが、それは収穫の時期に限る。(BCCWJ 酒見賢一『後宮小説』)

- (2) 飛びこんだ瞬間からだんだん泳げるようになります，数日すると泳げます。

(BCCWJ 『Yahoo!知恵袋』)

- (3) 私は時間のたつのがわからなかった。生きる意志も動く意志もない，灰色の荒涼とした場所にさまよいこんでいた。(BCCWJ イサドラ・ダンカン (著) 山川亜希子・山川紘矢 (訳) 『魂の燃ゆるままに』)

V1 は様態を表す動詞・移動動詞で，動作主は V1 の動作をしながらどこかに入ることを表す。主体の移動する時の様態が読み取れる。

- ② V1 は V2 の移動の方法を表す。V1 によって V2。(V2 「こむ」は他動詞としての用法) ex. 編みこむ，射こむ，鋳こむ，入れこむ，植えこむ，埋めこむ，打ちこむ

- (4) 小さな庭 (鉢) に，季節の花やグリーンを植えこんで…ちょっぴり季節の「おしゃれ」をしちゃいましょう。(BCCWJ 『広報つくばみらい』)

- (5) POINT 粉をバターに入れこむようにして混ぜ合わせます。(BCCWJ 舘野鏡子 『お菓子作り入門』)

- (6) その部分には，数字の「0」が紅く描きこまれている！(BCCWJ 木川明彦 『無敵万能ゼロ艦隊』)

主体が前項動詞の表す動作を実施することによって，対象物が〈場所〉の中に移動することを意味する。前項は使役他動詞で，後項は移動を表す。

- ③ V1 と V2 は並列の関係である。(V2 「こむ」は自・他動詞) ex. 入りこむ，上がりこむ，はまりこむ，詰めこむ

- (7) この，ニャーッの度に，何匹の猫が我が家に入りこんできたことか。(BCCWJ 永島克彦 『あんたがたどこさ』)

- (8) 自宅の庭にいたところ，2 人の男性がいきなり家の中に上がりこみ，……(BCCWJ 『広報とりで』)

- (9) 知識を頭に詰めこむより，ワインを腹に詰めこんだほうが幸福でいられる人物だからね。(BCCWJ 吉村達也 『「横浜の風」殺人事件』)

前項動詞は元々「内部移動」の意味を含意しているが、同じような内部移動を表す「こむ」と結合して、内部へ深く移動するという強調の意味が読み取れる。その中で、「入りこむ」、「上がりこむ」のような複合動詞は、文脈によって動作主の動作に対する話者の不満、迷惑などの気持を帯びる場合がある。これは姫野（1999）が指摘した「抵抗感」に当たると考えられる。

- ④ V1 は V2 の目的を表す (V2 は V1 の結果を表す)。V1 のために V2。(V2「こむ」は自動詞) ex. 隠しこむ, 攻めこむ, 殴りこむ, 逃げこむ

- (10) 敵にとっては攻め込むのも大変だが、一旦攻めこんでから脱出するのも容易ではなさそうだった。(金薫『孤将』)
- (11) 本当に関山組の残党たちなら、他人に聞かれて恥ずかしいような喧嘩に百人も引き連れて殴りこんでは来ないだろう。(BCCWJ 大下英治『修羅の群れ』)
- (12) かりに領地に逃げこんだとしても動員できる兵は限られていた。(BCCWJ 黒岩重吾『中大兄皇子伝』)

前項動詞の表す動作は後項動詞の目的を表し、後項動詞はその結果（どこかに入った）を表す。例えば、「お店に逃げこんだ」の場合で、「逃げた」結果、「お店に入った」のように、前項は目的、後項は結果を表す。

### 10.3.2 「程度進行」の用法

「程度進行」を表す複合動詞「～こむ」は V1 と V2 の関係から見ると、以下の 1 つのタイプしか見られない。

- ⑤ V1 と V2 においては、V1 は複合動詞全体の意味的主要部で、V2 は V1 に対して意味的に修飾する働きをしている（以下の A～C は姫野（1999）の分類であるが、語例は必ずしも姫野の分類と一致していない）。姫野（1999）では「程度進行」を表す複合動詞「～こむ」を「固着化」「濃密化」「累積化」の 3 つに分けているが、それぞれの違いについて詳しく述べていない。

#### A. 固着化

ex. 思いこむ, 構えこむ, 考えこむ, 気負いこむ, 困りこむ, 決めこむ, 黙り

こむ

- (13) あいさつくらいの英語しか話せなかったぼくは黙りこんでしまい、ますます怪しまれた。(BCCWJ 郡山総一郎『未来って何ですか』)
- (14) マスコミや一部政府関係者などはこれで八八年のソウル・オリンピックは大丈夫と勝手に決めこんだりもした。(BCCWJ 落合信彦『日本の危機』を読め!))

このタイプにおいては、前項動詞が主に人間の思考・認識・感情感覚・言語活動に関する活動動詞である。BCCWJ から検索した結果、このタイプの複合動詞と共起するものは「てしまう」、「勝手に」などのようなものが多く見られた。鈴木 (2008) では、「友人の結婚式場で、その日のスピーチを頼まれてしまった。」を「友人の結婚式場で、その日のスピーチを頼まれた。」と比較して、前者の方が予想外なことに対する話者の驚きや戸惑いなどの意味が読み取れると述べている。このタイプには話者のマイナスの感情や評価を伴う用法が多いと言える。前項動詞の表す動作主の動作・行為が時間の経過に従って、次第に深い程度に入って、知らず知らずのうちに自分もコントロールできない段階（無意志の状態）に入ってしまうことを表す。

#### B. 濃密化

ex. 急ぎこむ, 老いこむ, 老いぼれこむ, 老けこむ, 枯れこむ, 萎れこむ, 焦れこむ, 冷え込む

- (15) この時期にこんなに厳しい寒の戻りで冷えこむとは少し甘かったです。(BCCWJ 『Yahoo!ブログ』)
- (16) ほとんど白髪になった四海は、別人のように老けこんでいました。(BCCWJ 葉青『蛍降る惑星』)

このタイプは、前項動詞が状態変化を表し、「ている」形は進行ではなく、状態変化後の結果残存を表す。つまり、前項動詞の表す主体の状態変化後の程度が時間の流れに従ってますます深くなっていく、ということを表す。このタイプの複合動詞は主体の状態変化を客観的に叙述し、評価性が見られない中立的な用法である。

#### C. 累積化

ex. 洗いこむ, 歌いこむ, 泳ぎこむ, 覚えこむ, 書きこむ, 鍛えこむ, 炊きこむ

- (17) この十通りの動きをしっかりと身体に覚えこませた上で、相手の特徴を考

慮して技につなげなければいけません。(BCCWJ『月刊剣道日本』)

(18) 大豆を練りこむようにつぶしめの細かいとろりとした豆腐にでき上がる。

(BCCWJ 平松洋子『Domani』)

前項動詞は活動動詞で、動作主がある目的を実現するために、積極的にある動作・行為(前項動詞)を繰り返して行うことを表す。このタイプの複合動詞では前項動詞が他動詞で、表す動作の意志性が強く、前項動詞の「ている」形は動作の進行を表す。「濃密化」や「固着化」のグループとは異なって、人にプラスイメージを与え、プラスの用法として使われる例が多いと考えられる。

以上で論述したように、「程度進行」の意味を持つ複合動詞「～こむ」においては、前項動詞が複合動詞全体の意味の主要部で、後項動詞が前項を修飾する働きをして、補助の意味機能を担っていることが明らかになった。

### 10.3.3 「～こむ」に見られる後項が前項を意味的に修飾する用法

以上で述べた「程度進行」の意味を表す複合動詞「～こむ」には、前項動詞が動作主の動作を表し、「～こむ」全体で、以下で述べるように、動作の程度性、動作主の主観性、動作主の動作への第三者の評価など、いろいろな意味合いを有する場合が見られる。このような用法を本論では、前述したように「複合動詞の後項が前項を意味的に修飾する用法」と捉えることにする。後項動詞「こむ」が、前項動詞のどのような局面を修飾するのか、あるいは、「こむ」は文全体にどのような意味をもたらすのかという観点から、以下のような種類を見いだすことができる。

- a. 動作の程度を表すもの ex. 老いこむ, 鍛えこむ, 錆びこむ, 更けこむ, 弱りこむ

後項動詞「こむ」は程度の強さを表す副詞あるいは副詞的成分と同様の意味を有し、「ひどく」、「すっかり」、「十分に」などと置き換えることができる。

(19) 鍛えこんだという自信が不安を上回った。気負わず打者を打ち取ることに集中。(朝日新聞 2010/07/23)

(20) 大豆が発情ホルモン物質の分泌を促すことも? 油とワインが、人が思うよりはるかに重要な働きをすることも? 老いこまないために、トカミンとエフィナルを摂るのがいいことも? (BCCWJ『ゆるぎなき心』)



- b. 対象の量に関わるもの ex. 買いこむ, 着こむ, 切れこむ, 削りこむ, 敷きこむ, 染みこむ

後項動詞は前項動詞の表す動作が及ぶ対象物の数量や面積の多さに関わって, 量の多さを表す副詞と同様の意味を有し, 「たくさん」, 「一杯」, 「完全に」, 「まんべんなく」などと置き換えることができる。例えば, (21) における「買いこむ」は「少し」や「わずか」などの少量を表すものと共起せず, 「たくさん」などの量の多さを表す成分と共起するのが普通である。

- (21) わたしの母親は, 横浜高島屋へぶっ飛び, 何箱も買いこんできた。(BCCWJ いじりめぐみ『へこジャパ』)

- (22) 保護剤がタイヤ全体に均等に付くように, 満遍なく塗りこむ。(BCCWJ『掘り出しパーツ』)

- c. 動作の回数に関わるもの ex. 覚えこむ, 泳ぎこむ, 使いこむ, 履きこむ

後項動詞は前項動詞の表す動作・行為の繰り返し, 回数の多さに関わるものであり, 頻度を表す副詞と同様の意味を有し, 「繰り返して」, 「何回も」などと置き換えることができる。前項動詞が意志性のある場合は, ある目的を実現するために積極的にある動作・行為を行うことを表す例が多い。

- (23) そこでは, アンティークとまではいかないけれど, よく使いこまれたいい風合いの椅子との出会いもたくさんあります。(BCCWJ『素敵なカントリー』)

- (24) 履きこむうちにいい味が出てくる〈ジョージ・クレバリー〉のスエードシューズ。(BCCWJ 真柄恵理『POPEYE』)

- d. 動作の時間の長さに関わるもの ex. 困りこむ, 喋りこむ, 黙りこむ, 漬け込む, 話しこむ

これらの複合動詞は時間を表す副詞「ずっと」, 「何時間」などと共起して, 時間の経過に従って動作が長く続くことを示す。例えば, (27) の「話しこむ」は「話題の中に入っていく」でも「話題の深いところまで話をする」でもなく, 前項動詞の表す動作「話す」の時間が長いということを表す。

- (25) 何週間とコトコト煮こんだ最高に美味しいスープです!!! (BCCWJ『Yahoo! ブログ』)

- (26) 先日初めて会って五時間も話しこみ、非常に有意義な時間を過ごせた。  
(BCCWJ 松沢呉一『鬼と蠅叩き』)

e. 主体の不本意を表すもの ex. 背負いこむ

前項動詞に「こむ」が付くことによって、複合動詞全体に「仕方無く」というニュアンスが含まれるようになる。

- (27) そう思って、一人で育児を背負いこむことを選んだ。(BCCWJ 井上理津子『歳月は流水の如く』)

f. 主体の自然・無意志的行為を表すもの ex. 思いこむ, 考えこむ, 惚れこむ  
「知らず知らずのうちに」「思わず」などのような副詞に言い換えられる。

- (28) 自分の事を好きかもとか勝手に思いこんでたのか? 自意識過剰というか何とか...。(BCCWJ 『Yahoo!知恵袋』)

- (29) コンサートで、ゾウさんは大活躍、私はその才能に惚れこんでいました。  
(BCCWJ 坂本小百合『ゾウが泣いた日』)

g. 主観的な(意志的)行為を表すもの ex. 当てこむ, 決めこむ, 触れこむ, 信じこむ, 連れこむ  
「勝手に」「無理矢理に」などの主観性を表すものと共起する例が見られる。

- (30) ランチは二、三時間かけておしゃべりをしながらその時を楽しみ、過ごすものと勝手に決めこん<sup>3</sup>でいたからだ。(BCCWJ 酒寄ユリヤ『これで完璧人材育成白書』)

- (31) 「子どもはほめさえすれば、自尊心が育つ」と信じこんでしまった人々がいます。(BCCWJ ジョン・フリール(著) 水嶋いづみ(訳)『もうだいじょうぶ! 子育て7つの処方箋』)

#### 10.3.4 複合動詞「～こむ」の新しい分類

筆者は姫野(1999)の2分類に従って、285語の複合動詞「～こむ」を分類してみ

て、「内部移動」と「程度進行」だけで、全ての「～こむ」を分類できるわけではないことがわかった。以上の分析結果から考えると、従来の複合動詞「～こむ」の意味・用法を「内部移動」と「程度進行」の2大別とする扱いは不十分だと考えられる。「程度進行」の中の一部は「程度進行」の用法であるかどうかまだ検討の余地があるが、本論の「前項を修飾する用法」（以下の（B）、（C）、（D）に相当する）である。

本論は複合動詞「～こむ」の用法を文法化の視点から取り扱い、それぞれの関連性を考慮に入れて、次のような4分類を提案する（後述するように、4つの意味は、必ずしも同じ階層に存在するわけではないが、ここでは並べて記す）。

- (A) 内部移動（姫野（1999）の「内部移動」と同じ）
- (B) 程度を強調する（a, b, c, d）
- (C) 動作主の主観性を強調する（e, f）（程度の強調をも伴う）
- (D) 第三者の評価を表す（g）（程度の強調をも伴う）

### 10.3.5 複合動詞「～こむ」の後項動詞の文法化

10.3.3 節の分類結果を見ると、「程度進行」を表す複合動詞「～こむ」の後項は、程度強調、動作主の主観性、第三者の評価など様々な意味を有していることがわかる。それらは動詞の実質的な意味を失って、副詞の機能を担っていると言える。これは後項動詞の「文法化」であると考えられよう。

文法化（grammaticalization）について、宮下（2004:21）では、次のように述べている。

- (32) 文法はまず形態論的な視点から捉えることができる。この見方に従うと、文法は語彙のような拡大可能なクラスではなく、ある限定された数の要素からなる、いわゆる閉じたクラスの形態素の集合とみなすことができる。例えば日本語の格助詞や、「見た」の「た」や「食べている」の「ている」のような時制・アスペクトの標識は、文法機能を担う言語形式だと言える。このような形態論的な文法の捉え方に立つと、文法化とは開いたクラスに属する形式が、格助詞や時制・アスペクト標識のような閉じたクラスに属する形式へ、さらには閉じたクラスに属する形式が、別のさらに閉じたクラスの形式へと変化する過程と捉えることができる。文法化研究では、文

法化の流れが大局的に見てレキシコンから文法へと進んでゆくと把握されることも多い。その際、両者の境界は連続的なものと見なされる。

大堀（2005）では、「文法化の典型例を「自立性をもった語彙項目が付属語となって、文法機能を担うようになるケース」即ち脱語彙化と規定し、その基準として、意味の抽象性、範列の成立、標示の義務性、形態素の拘束性、文法内での相互作用<sup>4</sup>を挙げる」と述べている。

以上で述べた内容をまとめると、複合動詞「～こむ」の意味は「内部移動」、「程度の強調」、「動作主の主観性」、「評価」の4つに分けられる。このうち「内部移動」は基本義である。「程度の強調」のグループにおいては、動作主と動作が必要要素で、後項の表す意味は前項動詞の動作の強さ、動作の時間の長さ、回数、対象物への影響に関わるもので、動作そのものに直接に関与するものに限られる。「動作主の主観性」というのは、強調の焦点が動作から動作主に移って、動作主の意志性（意志的・無意志的）に関わるようになるものである。このグループにおいては、前項動詞は活動動詞あるいは思考・意志を表す動詞である。前項が「鍛える」、「走る」、「覚える」などの動詞の場合には、動作主が積極的にある動作や行為を行うことによって、ある目的を達成するため一生懸命努力することを表す。「背負う」などの動詞の場合には、客観的状況を消極的に受け取る主体のやむを得ない気持ちが読み取れる。「第三者の評価を表す」グループにおいては、マイナス評価である。前項動詞の動作主が勝手に動作や行為を行うことを表す。前項動詞は「決める」、「信じる」などが挙げられる。このグループにおいては、焦点が動作主の主観性から第三者の見方に移ったものと考えられる。以上述べた複合動詞「～こむ」の4つの意味の派生関係は以下のように示すことができる。

内部移動 → 程度強調 → 動作主の主観性 → 第三者の評価  
意味派生のメカニズムは以下のようにまとめることができる。

空間＞程度性＞主観性＞評価

大堀（2005）の説明の通り、複合動詞「～こむ」には動詞から副詞、動作主の主観性、第三者の評価への機能変化といった「意味の抽象性」と「脱範疇化」の現象が確かに観察できた。また、大堀（2005）の言う「形態素の拘束性」と「文法内での相互作用」という2つの文法化の基準は、複合動詞「～こむ」にも見られる。「形態素の拘束性」とは「自立語から付属語へ」という変化であり、確かに前項動詞を修飾する用法は「形態素の拘束性」と言える（ただし、「内部移動」についてもこれは当てはまる）。また、マイナス評価を表す「決めこむ」、「信じこむ」などの文においては、

コーパスの検索結果から見ると、「～てしまう」、「勝手に」などのマイナス成分と共起することが多く、このような現象はまだ定着していないが、少なくない。これはいわゆる「呼応現象」であろうか。この点については、今後の課題としたい。

以上で述べた意味派生関係から次のような一般的なプロセスを見出せる。つまり、複合動詞「～こむ」は基本義の具体的な「空間的内部移動」(動作) → 「動作主の動作の程度強調」(動作の程度) → 「動作の程度を伴う動作主の主観性」(動作主の視点) → 「動作の程度を伴う第三者の評価」(第三者の視点) というものである。このような関係を図で示すと以下の図1のようになる。

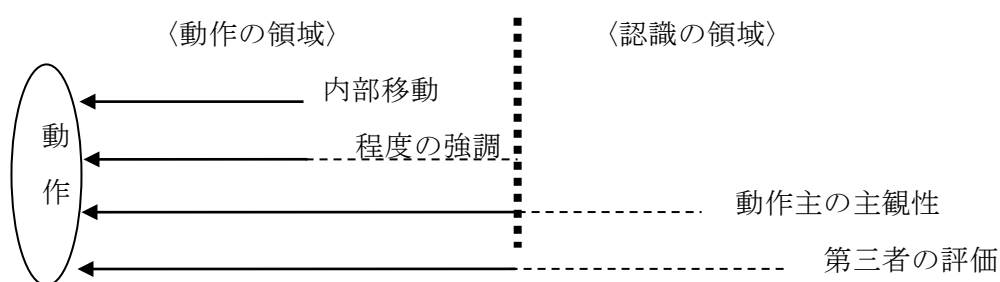


図1 日本語複合動詞「～こむ」に見られた動作への捉え方

図1を見ると、動作に一番近い「内部移動」は複合動詞「～こむ」の基本義で、「程度の強調」は動作主の動作の程度を強調する働きをし、動作主の動作に深く関わっているため、「内部移動」より少し離れた位置にある。「動作主の主観性」は動作に直接関わらないため、もっと離れた位置にあり、「第三者の評価」の場合は遠いところに立つ第三者が動作全体を見ている感じで、一番離れた位置であると考えられる。つまり、「内部移動」と「程度の強調」は動作の領域であり、「動作主の主観性」と「第三者の評価」は動作への認識の領域であって、両者はレベルを異にするとと言える。

以上で述べた複合動詞「～こむ」の文法化のプロセスを表で示すと、以下のようになる。

表1 複合動詞「～こむ」の文法化のプロセス

意味分類	派生関係	文法化の内実
内部移動〈意味(A)〉	基本義(「空間」)	/
程度の強調〈意味(B)〉	「空間」から「程度性」へ	修飾的成分(副詞など)
動作主の主観性〈意味(C)〉	動作から動作主へ	文脈による意味添加(主観的)
第三者の評価〈意味(D)〉	動作主から第三者へ	文脈による意味添加(客観的)

また、BCCWJの例文を見ると、複合動詞「～こむ」の名詞化（例えば、「思いこみ」、「触れこみ」、「入りこみ」など）の例が多く見られるが、そのうち、名詞形式「触れこみ」は、同形の複合動詞「触れこむ」の例がほとんど見られなかった。即ち複合動詞の名詞化の定着現象も起こっている。また、「犯行場所を住宅とする強盗の認知件数は増加しており、中でも、上がりこみ及び押入り強盗が急増した」のような名詞化の例は犯罪に関わるものが数多く、それ以外にもある特定の専門語として用いられる例が観察できた。複合動詞と同形の複合名詞との関連性も興味深いところである。

以上述べた本論の（B）（C）（D）の3分類と姫野（1999）の「程度進行」の3分類とは同じようであるが、両者の分類基準は異なる。姫野（1999）では前項動詞の意味的特徴と進行内容によって「程度進行」の意味を3つに分けている。それに対して、本論では後項動詞「こむ」は前項のどのような局面を修飾するのか、という点に着目し、動作主、動作、対象物、第三者の4つの要素が文法化の観点からお互いにどう関わるのか、また、例文においてそれぞれどのような振る舞いがあるのか、という点から複合動詞「～こむ」の文全体にもたらす意味を分析している。

#### 10.4 まとめ

以上、日本語複合動詞「～こむ」の意味と用法を検討してみた。「内部移動」を表すグループにおいて、前項動詞と後項動詞の結合関係から見ると、「こむ」と結合する前項動詞は動作の状態、移動の方法、移動の目的を表すものが見られた。従来「程度進行」の意味として扱われたグループには、程度の強さから、動作主の主観性、第三者の評価まで意味が幅広く拡張している例が観察できた。それらのものは全て「程度進行」とは言い難いと考えられる。さらに、複合動詞「～こむ」の文法化のプロセスについても分析を試みた。元々動詞の意味として使われた「こむ」は動作移動そのものであり、そこから、「動作程度の強調」、「動作主の主観性」、「第三者の評価」という過程を経て修飾の（副詞的）用法が現れた。つまり、焦点が「空間」から、「動作の程度」、「動作主の視点」、「第三者の視点」へと移っていることが明らかになった。

しかし、なぜ複合動詞「～こむ」には、「入り込む」、「決め込む」、「信じ込む」のようにマイナス評価を表す場合が多いのか、また、「～こむ」以外、複合動詞には、程度の強調を表すものが他にも多く見られる。例えば、「～きる」、「～つくす」、「～ぬく」などが挙げられる。それぞれどのような相違点があるのか、まだ明らかにされていない点が多い。それらの問題は全て今後の課題とし、文法化の視点からさらに分

析していきたい。

### 〈注〉

1. 本動詞の「こむ」を「込む・混む・籠む」という3つの表記で検索したものである。「道（病院・電車）が混（込）んでいる、手の込んだ料理（作業）」といったような例文は出たが、「籠む」の例文は出なかった。
2. 影山（1993）では、日本語の語彙的複合動詞において、外項を持たない非対格自動詞は外項を持つ他動詞あるいは非能格自動詞と複合できない、という原則が見られることを指摘している、これを「他動性調和の原則」と呼ぶ。
3. 姫野（1999）は「グレーは地味、赤は派手と決めこむ習慣が存在しているようだが、デパートのヤングコーナーを見てもグレーや黒が多く、決して赤ばかりではない。（朝日 73 年 10 月）」という例を挙げて、「「決めこむ」の場合は、その決定が誤っているかもしれないという疑いを伴う。」と述べている。
4. 大堀（2005）は以下のように述べている。「意味の抽象性。「ます」の場合で言えば、具体物を献上するという意味から、受益的な意味へと広がり、さらに話し手のへりくだりを表すようになった。範列の成立。代名詞や格助詞のように、一定の文法機能を表し、相互に対立する少数のセットである。「ます」などでは「敬語」という閉じたセットに組み込まれている。標示の義務性。特定の形態素による標示が、ある機能を表すために要求されることが義務性である。日本語において単数/複数の対立が文法の一部ではないというのは、「たち」や「ら」による複数の標示が義務的ではないからである。形態素の拘束性。「自立語から付属語へ」という変化そのものである。文法内での相互作用。日本語の場合、否定の呼応現象はこのうちに数えてよいだろう。例えば、「決して」のような語はもともと強調表現であって、否定との呼応すなわち相互作用はなかったが、現在では呼応は文法規則の一部となっている。」

## 第 11 章

### 複合動詞後項における副詞的意味のあり方について

#### —「一つける」の場合—

##### 11.1 はじめに

複合動詞には、「頼み込む」、「腫れ上がる」、「縛り上げる」などのようなものが多く見られる。例えば、以下の例がある（例文は BCCWJ から検索したもの）。

- (1) 私は気管に出はじめていた熱コブが腫れ上がるて呼吸困難に陥り、病棟へ担ぎ込まれました。（冨雄二（著）『わすれられた命の詩』）
- (2) どれほど頼み込んでも、誰もそこで答案用紙に向わせてはくれなかったのだ。（小池真理子（著）『殺意の爪』）
- (3) あの妖怪めは、師匠を縛り上げ、洞内に閉じ込めているんだ。（吳承恩（著）中野美代子（訳）『西遊記』）

上に挙げた例文において、「腫れ上がる」、「頼み込む」、「縛り上げる」はそれぞれ意味的に「ひどく腫れる」、「ひたすら頼む」、「きつく縛る」などのように言い換えられ、「副詞＋動詞」の側面がある。本章では、それらの複合動詞を「後項が前項を副詞的に修飾する」ものとして、生産性の高い複合動詞後項「一つける」を取り上げて分析する。複合動詞「～つける」は以下のような例がある。

- (4) マイクなら、ご心配なく。あとで専門の者が胸にピンで留めつけますから。（リンダ・バーロウ（著）/吉浦澄子（訳）『危険な愛のかおり』）
- (5) 自分が平常、食べつけないもの、やりつけないことに、かなりひどい拒否反



応を起す。(平岩弓枝(著)『極楽とんぼの飛んだ道』)

- (6) 彼は言下に息子を叱りつけて、カネを取りに部屋を出て行った。(村田喜代子(著)『人が見たら蛙に化れ』)

本動詞「つける」の意味について、「ある物・人と触れあう、または離れない状態にする」と示されている(『岩波国語辞典』(第7版)を参照)。例えば、「扉に金具を付ける」、「太郎が壁にシールを付けた」という場合、それぞれ「金具を扉に固定させる」、「太郎がシールを壁に手で押し当ててくっつけた」ということを表し、「つける」という動作には、動作主のある程度の力が必要だと考えられる。つまり、「つける」という動作には、「動作+ある程度の力(力的な要素)」という2つの要素が含まれている。複合動詞後項として、「一つける」の意味が様々であり、上の例(4)の「留めつける」は、「ピンでマイクを胸に動かないように固定する」という意味を、例(5)の「やりつける」は「あることをやるのに慣れている」という意味を、例(6)の「叱りつける」は「厳しく叱る」という意味を表している。本動詞の意味がそのまま生きているものもあり、本来の意味から離れているものもある。本章では、例(6)の「叱りつける」のような後項に含まれる副詞的意味のあり方について明らかにすることを目的とする。

## 11.2 先行研究

複合動詞「～つける」について、先行研究ではいろいろ議論されている。代表的なものとしては武部(1953)、姫野(1999)、陳・王(2012)などが挙げられる。

武部(1953)は、複合動詞の後項動詞の中に「原義が希薄になって助動詞化する」ものがあり、それは前項動詞に附属的意味を添えることで、補助動詞的要素と考えられると述べ、複合動詞「～つける」について、補助動詞的要素と考えられる形とそうでない形があるとしている。補助動詞的要素と考えられる形の「～つける」について、「強意的意味を添えるもの」(「痛めつける」など)、「動作の方向を示すもの」(「植えつける」など)と「動作の起こり方を示すもの」(「食べつける」など)の3つに分けている。

複合動詞「～つける」の意味を中心に論じるものに姫野(1999)がある。姫野(1999:110-120)は、「～つける」を語彙的複合動詞と統語的複合動詞の2種類に分けている。語彙的複合動詞の「～つける」について、二格を取るか取らないかによってそれぞれ下位分類して、「接着・密着」を表すものとしている。統語的複合動詞の

「～つける」について、「習慣」を表すものとしている。語彙的複合動詞「～つける」について、「自立語「つける」の本義「接着・密着」を何らかの形で含むものであり、その上に、「中途半端ではなく、動作をしっかりと完全に行う」というニュアンスを伴う」ということを指摘している。その中に、特に本章に関わりのあるものについて、例えば、「投げつける」、「叩きつける」は強さを表す修飾語を伴うことが多い、「つける」は動きの強さ、速さ、動作主の攻撃性を含むのである、と述べている。

陳・王（2012）は、意味論的・語用論的变化の理論に基づいて、複合動詞「～つける」の意味拡張を分析し、それらの意味拡張を「抽象化による意味拡張」、「抽出化による意味拡張」、「抽象化と抽出化による意味拡張」、「希薄化による意味拡張」に分けて、それぞれの拡張関係を図の形で説明し、「～つける」の用法を「接尾辞」、「強調」と「与える」の3つにまとめている。

松本（1998）は語彙的複合動詞の意味上の制約について論じている。語彙的複合動詞を「V1 が V2 の手段を表すもの」（「押し倒す」など）、「V1 が V2 の様態・付帯状況を表すもの」（「流れ落ちる」など）、「V1 が V2 の原因を表すもの」（「降り積もる」など）、「V1 を意味的主要部とするものⅠ：比喩の様態」（「咲き誇る」など）、「V1 を意味的主要部とするものⅡ」（「叱りつける」など）、「V1 が V2 の背景的情報を表すもの」（「食べ残す」など）に分け、その中の「V1 を意味的主要部とするものⅡ」について、V1 は意味的主要部であり、V2 は特定の意味を V1 の意味構造の中に加えることを指摘している。また、語彙的複合動詞について、意味上の制約「主語一致の原則」を提出している。

また、影山（1993, 2013）でも「副詞的關係」のものについて言及しているが、詳しく論じていない。

本章は以上の先行研究で言及しながら詳しく論じられていない「後項が前項を副詞的に修飾する」（先行研究の「強調」などに対応している）もののあり方及び成立要因について考察する。

### 11.3 後項が前項を副詞的に修飾する複合動詞の位置づけについて

筆者は今までの研究（本論文の第6章、第8章、第10章）において、生産性の高い複合動詞後項を対象として、それぞれの意味の抽象化について考察を行った。例えば、「一こむ」の場合、「水中に飛び込んでいく」、「テレビの前に座り込んでニュースを見る」、「私が私立女子高の出身だと決め込む」において、後項はそれぞれ、「内部移動」、「ずっと（座る）、長い間（座る）」、「勝手に決める」という意味を表すことか

から見られるように、後項動詞が同じでも、その前項動詞によって意味が移り変わることが分かる。「—こむ」「—あがる」「—あげる」「—つける」「—かける」「—ぬく」についても、それぞれの意味的抽象化を段階的違いとして捉えて、「原義・方向」「アスペクト」「副詞的修飾」と「感情（モダリティ）的意味」の4つの段階に分け、それぞれの特徴について考察している。本章は、具体的に「—つける」を取り上げて考察し、特に「後項が前項を副詞的に修飾する」ものについて分析する。

### 11.3.1 複合動詞の分類について

複合動詞について、先行研究では、いろいろな分類が見られる。そのうち、代表的なものは長嶋（1976）、寺村（1984）と影山（1993, 1999, 2013）が挙げられる。長嶋（1976）は、複合動詞の前後項における修飾関係から複合動詞を「修飾要素 v1＋被修飾要素 V2」（「刺し殺す」など）と「被修飾要素 V1＋修飾要素 v2」（「売りつくす」など）に分ける。

寺村（1984）は、本動詞の意味が複合動詞の中でも保持されるものを自立 V とし、保持されていないものを付属 v として、複合動詞を以下の4つに分類している。

- (7) a. V-V 呼び入れる、握りつぶす、殴り殺す、出迎える
- b. V-v 降り始める、呼びかける、思い切る、泣き出す
- c. v-V 差し出す、振り向く、打ち立てる、引き返る
- d. v-v 払い下げる、（話を）切り上げる、（仲を）取り持つ、（芸を）仕込む

影山（1993, 1999）などは複合動詞を「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の2つに分けて、さらに前者を以下のように下位分類している。

- (8) a. 手段：V1 することによって、V2  
      突き落とす、切り倒す、踏みつぶす、押し開ける、折り曲げる
- b. 様態：V1 しながら V2  
      流れ着く、転げ落ちる、忍び寄る、舞い降りる、語り明かす
- c. 原因：V1 の結果、V2  
      歩き疲れる、抜け落ちる、焼け死ぬ
- d. 並列：V1 かつ V2  
      忌み嫌う、恋い慕う、慣れ親しむ

e. 補文関係：V1 という行為/出来事を（が）V2

見逃す，編み上がる，死に急ぐ，聞き漏らす

f. 副詞的關係：V2 が副詞的に V1 の意味を補強

晴れ渡る（＝すっかり晴れる），使い果たす（＝全部使う）

また、影山（2013）では、「語彙的複合動詞」を「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」に再分類しており、今までの「手段」「様態」「原因」「並列」を「主題関係複合動詞」に、「補文関係」と「副詞的關係」を「アスペクト複合動詞」に分類している。本章の研究対象「後項が前項を副詞的に修飾する」複合動詞は長嶋（1976）の「被修飾要素 V1＋修飾要素 v2」の一部であり、寺村（1984）の分類の b の一部で、影山（2013）の分類の「語彙的複合動詞」の中の「アスペクト複合動詞」の一部に当たる。

### 11.3.2 右側主要部の規則について

複合動詞の統語的・形態的な特徴について、影山（1993:101-108）は（並列関係を除けば）右側主要部の規則が広く行き渡っているとしている。この規則について、影山（1993）は、以下のように述べている。

- (9) V1 は V2 の修飾部であって、文全体の格関係ないし項関係を決定しているのは、V2 の方である。（中略）V2 の特性が重要であることは、V1 と V2 が異なる目的語を取る例を考察すれば一層明瞭になる。

(57) a. 服を洗う，汚れを落とす

→汚れを洗い落とす，＊服を洗い落とす

b. ビンを振る，中身を混ぜる

→中身を振り混ぜる，＊ビンを振り混ぜる

(57a) では、同じヲ格（Theme）であっても、V1 と V2 の意味の選択制限が異なる。洗うのは服であって汚れそのものではなく、落とすのは服ではなく汚れである。ところが「洗い落とす」という複合動詞になると、(57a) のように V1 の目的語（服）ではなく V2 の目的語（汚れ）を取る。(57b) でも同様。動詞の分析にあたっては、単に格形態だけでなく、このような意味的な選択制限まで当然、考慮に入れて総合的に検討すべきであり、そうすると、V1 ではなく V2 が複合動詞全体のシンタクスを決定していることが鮮明にな

る。

(影山 1993 : 104)

また、影山 (2013) では、11.3.1 節 (5) の各分類について、「V1 て、V2」の言い換えが可能かどうかという診断法を用いて、複合動詞で伝えたいことが V1 なのか V2 なのかを見分けている。(8a, b, c, d) のタイプは「V1 て、V2」による言い換えが可能であるから、後項動詞 V2 が意味の中心になっている、その結果、V1 を省いて V2 だけで答えることが可能である。他方、(8e, f) のタイプは「V1 て、V2」による言い換えが不可能ないし不自然であることから、意味の重点は V2 ではなく、むしろ V1 に置かれていることになる、と論じている。これについて以下のように示している。

- (10) a. あなたはゴキブリを踏みつぶしたのですね？

はい、つぶしました。 / # 踏みしました。( # 印は語用論的逸脱を表す)

- b. あなたは鍵をこじ開けたのですか？

はい、なんとか開けました。 / # こじました。

- c. あなたはカバンから辞書を取り出したのですね？

はい、出しました。 / # 取りました。

- (11) a. まったく呆れ返りましたねえ？

はい、本当に呆れました。 / \* かえりました。

- b. あなたは、彼を褒めちぎったのですか？

はい、すごく褒めました。 / \* ちぎりました。

- c. ワニが檻から逃げ出したのですね？

はい、逃げました。 / \* 出しました。

(影山 2013:10-11)

- (12) 北岡一美が後ろを向いたすきに、矢島が後ろからふいに殴りつけた。(島田 莊司 (著)『三浦和義事件』)

上の例において、「殴りつける」は矢島が北岡を殴る動作であり、「矢島が北岡を殴った」とは言えても、「\*矢島が北岡をつけた」とは言えない。「殴りつける」の後項「つける」は前項「殴る」という動作を修飾しているものとして捉えるべきであろう。この場合、前項動詞が複合動詞の全体の中心であり、「右側主要部」のものではなく、「意味の中心が左側にある」と言える。

## 11.4 考察

### 11.4.1 「一つける」の分類

本章では、複合動詞「～つける」の意味用法を、大きく「付着」を表すもの、「習慣的動作」を表すものと「後項が前項を副詞的に修飾する」ものに分ける。「付着」を表すものと「後項が前項を副詞的に修飾する」ものの区別は、前項と後項に共通している意味「付着」が含まれているかどうかにある。また、ここで言う「後項が前項を副詞的に修飾する」ものについて、先行研究では、「強意的意味を添えるもの」(武部 1953)、「複合動詞後項の接辞化」(斎藤 1992)、「強調」,「指向」(姫野 1999)、「文法化」(田辺 1996, 三宅 2005)、「副詞的關係」(影山 1993, 2013)などの名称として扱われている。以下の用例を見てみよう。

A. 「付着」を表すもの ex. 植え付ける, 刻み付ける, 縛り付ける, 塗り付ける

(13) 現在は、ほた木が足りず、ドングリを畑にまいて苗を育て、山に植えつけています…… (埴沙萌 (著)『ドングリ』)

(14) 入り組んだ紋様が刻みつけられた壁面が、通路を閉ざしていた。(伏見健二 (著)『叛逆の獣将』)

上の例は、前項と後項に共通する意味が含まれている。例えば、「塗り付ける」の場合、前項「塗る」という動作は、対象物のある場所に擦るようにするということで、結果として、対象物がその場所に付いている状態になる。つまり、前項と後項には、「付着」という共通の意味が含まれる。このグループの複合動詞の前項と後項は「V1することによって、V2」或いは「V1 (原因) の結果、V2」という意味関係で結合している。

B. 「習慣的動作」を表すもの ex. 食べつける, 使いつける

(15) この香草はかなりにおいがきついで日本人では嫌がる人も多いが、食べつけるとやめられない。(開高健 (著)『風に訊け』)

このグループについて、先行研究では詳しく論じられているため、ここでは省略する。

C. 後項が前項を副詞的に修飾するもの

このグループについて、前項動詞は対象物の変化をもたらすかいかによって「動作の結果を修飾するもの」と「動作の過程を修飾するもの」の2種類に分けられる。

C1. 動作の結果（状態変化）を修飾するもの

「動作の結果(状態変化)を修飾する」グループには以下のような例が挙げられる。

ex. 煎りつける, 飾りつける, 焚きつける, 煮つける, 盛りつける

(16) 鍋に油を入れて火にかけ, おからを入れる。さらさらになるまで煎りつけ,  
Aを加え, 煎る。(学習研究社『おせちと気軽なおもてなし』)

(17) その夜は, 釣った魚を薄味に煮つけて食べた。(重松清(著)『熱球』)

例(16)の「煎りつける」と(17)の「煮つける」の前項「煎る」と「煮る」は何れも対象物に何らかの変化をもたらす動作であり, 前者は対象物の水分がなくなるという状態変化, 後者は「材料が生の状態から食べられるような状態に変化させる」という状態変化の意味が含まれる。それぞれの後項「つける」が前項「煎る」, 「煮る」が対象物にもたらした状態変化に焦点が当てられる。

ここでいう「結果」は, 動きが実現した結果として対象に生じる状態に言及するものであるとし, それを確認する方法として, 仁田(2002:51-52)で述べたような言い換えを引用して説明してみる。

(18) a. 車体を青く塗った。

b. 枝を真つ二つに折った。

(19) 「N ヲ+結果の副詞+V」→「V シタ結果, N ハ+結果の副詞+{ダ/ニナッタ}」

これを複合動詞に適用して, 上の例(17)を検証してみる。「煮て薄味になった」, 「煮た結果, 薄味になった」いずれも成立するため, 前項「煮る」という動作には対象物の状態変化をもたらす意味が含まれると考えられる。

また, 現代日本語文法(2009:122)では, 「てある」は, 目的をもった何らかの動作の結果として, 動作の対象が一定の状態にあることを表す」と述べて, 「ドアにメ

モが貼ってある」,「皿がきれいに洗ってある」という例を挙げて説明している。これを持って例(16)と(17)の前項動詞「煎る」「煮る」について検証してみる。「さらさらに煎ってあった(ごま)」,「薄味に煮てあった魚」のように,動詞「煎る」と「煮る」はいずれも動作の実行によってその結果,対象物の状態変化を言及しているものである。「さらさら」と「薄味」はそれぞれ対象物が変化した後の状態を表す表現になる。「煮つける」と「煎りつける」については,「魚を薄味に煮つける」の場合,動作「煮つける」によって,対象物「魚」が生の状態から「薄味」(ちゃんと味付けができるよう)になるという状態変化を表し,「ごまをさらさらに煎りつける」の場合,動作「煎りつける」によって,対象物「ごま」が生の状態から「さらさらになる」(水分がなくなる)という状態変化を表す。いずれも対象物が変化させるまで,動作主の動作が確実に実行されるということが窺える。

## C2. 動作の過程を修飾するもの

(20) 時には目に涙を浮かべるほど厳しく叱りつけることもありました。(ルイス・キャロル(著) 高杉一郎(訳)『ふしぎの国のアリス』)

(21) 無言のままで,俺がきつく睨みつけているというのに,鷺宮は脱力しそうなほどにピントのずれた言葉を,甘ったるく囁いてきた。(猫島瞳子(著)『恋におちた若様』)

「動作の過程を修飾する」グループにおいて,前項は対象に結果(状態変化)をもたらす意味が含まれていない。例(20)の「叱りつける」において,前項動詞「叱る」は動作主の動作によって対象に何らかの状態変化をもたらすわけではない。例えば,「上司は部下を叱る」という場合は,上司が「叱る」という動作を行ったことによって,部下が「怪我をした」あるいは「肌にあざが出た」などのよう状態変化をもたらすことはない。また,前項動詞「叱る」だけで,「厳しく叱る」は言えるが,後項「つける」だけで,「\*厳しくつける」は言えない。「厳しく叱る」では,「\*叱って,厳しくなった」は言えないため,「厳しく」は結果を表す副詞ではなく,「叱る」という動作を行う動作主の様子や様態を表すものである。例(21)も同様に説明できる。また,「叱る」「睨む」という動作によって相手にどこかに付着させるという位置変化をもたらすことも考えられないため,これらの前項動詞は位置変化を表す動詞に馴染まないことが分かる。

また,このグループには以下のような種類が見られる。



- a. 動作や行為の様子を表す ex. 言いつける, 痛めつける, 売りつける, 脅しつける, 送りつける, 貶しつける, 叱りつける, 照らしつける, 照りつける, 怒鳴りつける, 睨みつける, 寝かしつける, ねめつける, 見せつける

前項は主に言語的行動, 心理動詞などの物理的力を必要としない動きである。

- (22) 霊能者の従兄弟は, そう言って, さんざんユウリを脅しつけたものだった。

(篠原美季(著)『背信の罪深きアリア』)

- (23) 連隊が解散されると, 品物を安く買い戻して, また別の時にあらためて高く売りつけたのである。(ゲルハルト・ロート(著)/須永恆雄(訳)『ウィーンの内部への旅』)

例(22)の「脅しつける」と例(23)の「売りつける」は, いずれも動作主の動作によって対象が状態変化をもたらさないものである。例(22)の「霊能者の従兄弟はさんざんユウリを脅しつける」において, 「\* (脅して/脅しつけて), ユウリがさんざんになった」と「\* (脅した/脅しつけた) 結果, ユウリがさんざんになった」いずれも言えないため, 動作主の動作「脅す/脅しつける」によって, 相手ユウリが明らかな状態変化を及ぼすわけではない。後項「—つける」は前項動詞の表す動作の強さや動作主の様子などを表すものになると考えられる。

- b. 動作の力強さを表す ex. 締めつける, 叩きつける, 殴りつける, 投げつける, 挟みつける, 吹きつける

前項は主に物理的力が必要な動きを表すものである。

- (24) そして, 足先が宙に舞った。ドサッと路上に強く叩きつけられた音。(折原一(著)『灰色の仮面』)

- (25) フラついたところを, 別のひとりが思いっきり殴りつけた。(折原みと(著)『地球』)

このグループは, 前項動詞「叩く」, 「殴る」などは物理的力が必要な動作であり, 「力強く」, 「力いっぱい」などの成分と共起することができる。また, それらの動作によって必ずしも対象に何らかの状態変化をもたらすとは限らない。後項「つける」によって, 前項の動作が確実に実行されることを表している。

## 11.4.2 複合動詞後項に含まれる副詞的意味のあり方

11.4.1 節では、「後項が前項を副詞的に修飾する」「一つける」のあり方について述べた。その中の「副詞的」修飾の意味が生じる要因は何だろうか。

これは Goldberg(1995)が提案した「一義的経路の制約<sup>1)</sup>」にも関わると思われる。「一義的経路の制約」について、Goldberg(1995)は以下の通りに規定している。

- (26) Unique Path Constraint: If an argument X refers to a physical object, then no more than one distinct path can be predicated of X within a single clause. The notion of a single path entails two things: (1) X cannot be predicated to move to two distinct locations at any given time t, and (2) the motion must trace a path within a single landscape.

(Goldberg 1995:82)

この「一義的経路の制約」について、影山(1999)は以下のように説明している。

Xという物体について、単文内でXを2つ以上の異なる経路(path)について叙述することはできない。単一の経路(a single path)という概念は次の2つの場合を規定している。

- (a) Xは特定の時点において2つの別々の位置に移動するようには叙述できない。
- (b) 移動は単一の情景(landscape)の中で1つの経路をたどらなければならない。

(影山 1999:205-206)

ここで「経路」というのは、物理的な移動の道筋だけでなく、抽象的な状態変化の過程も指していて、要するに「状態変化と位置変化の両方を1つの述語を用いて表現することはできない」ということを述べている。

この制約は複合動詞にも適用できると思われる。例えば、影山(1999)は、次の例を挙げて説明している。

- (27) ～死ぬ
- a. 状態変化+死ぬ：凍え死ぬ、焼け死ぬ、溺れ死ぬ
  - b. 位置変化+死ぬ：\*転び死ぬ、\*（崖から）落ち死ぬ、\*沈み死ぬ、\*転

影山 (1999) は、上の例について、(27a) 「状態変化+死ぬ」タイプの複合動詞は状態変化と状態変化の経路の複合なので、「一義的経路の制約」に合致して成立すると述べている。それに対して、(27b) 「位置変化+死ぬ」タイプの複合動詞は位置変化と状態変化を同時に一つの述語に盛り込んだため、非文になると述べている。また、手段複合動詞の場合、「投げ上げる」は前項と後項がいずれも位置変化をとるので文法的なのに対し、「\*投げ潰す」は位置変化と状態変化の両立で非文になると論じている。

11.1 節で述べたように、本動詞「つける」には「動作+ある程度の力（力的な要素）」という 2 つの要素が含まれることがわかった。「動作の結果を修飾する」場合、前項には対象物の状態変化をもたらす意味が含意され、元々位置変化を表す「つける」の動詞的意味が抑制され、つまり「つける」に含まれる「動作」の部分が抑制され、「力的な要素」という部分の意味が代わりに副詞的意味になると考えられる。「動作の過程を修飾する」場合、前述したように、前項動詞に対象物へ位置変化や状態変化という結果をもたらさない。位置変化を表す「つける」に馴染まない、その中に含まれる「動作」を表す部分の意味が抑制され、「力的な要素」という部分が副詞的意味になり、前項の動きの強さなどを修飾する働きをすると考えている。

また、後項が前項の過程を修飾する場合の「殴りつける」について、以下のような用例が挙げられる（以下は作例）。

- (28) ○ 優しく殴る。
- 激しく殴る。
- 力強く殴る。
- \* 優しく殴りつける。
- 激しく殴りつける。
- 力強く殴りつける。

前項動詞「殴る」は「優しく、激しく、力強く」などの副詞的表現と共起することができるが、複合動詞「殴りつける」は、「激しく、力強く」という動作の強さ、激しさなどの程度の強さを表す副詞とは共起するものの、「優しく」という程度の弱さを表す副詞と共起しにくいことが分かった。これは動詞「殴る」の場合、動作の強さ

と弱さはいずれも可能であるのに対して、複合動詞「殴りつける」の場合、動作の強さしか表さないからである。

以上で述べたように、複合動詞後項「一つける」について、「付着」を表す場合は、対象物の移動（位置変化）を言及しているもの、「動作の結果を修飾する」場合は、動作主の動作によって対象物の状態変化を言及しているもの、「動作の過程を修飾する」場合は、動作主の動作の強い程度に言及しているものだと考えられる。

## 11.5 まとめ

本章は、複合動詞後項「一つける」を「付着」を表すもの、「習慣的動作」を表すものと「後項が前項を副詞的に修飾する」ものに分け、「後項が前項を副詞的に修飾する」ものについて、前項は対象物に状態変化をもたらすかどうかによって「動作の結果を修飾する」ものと「動作の過程を修飾する」ものに下位分類している。さらに、複合動詞後項「一つける」に含まれる副詞的意味のあり方について、以下のようにまとめられる。

- (28) このグループの複合動詞は、右側主要部のものと違って、意味の中心は左側にある。
- (29) 本動詞「つける」には「動作＋ある程度の力（力的な要素）」という2つの要素が含まれる。「一義的経路の制約」の影響を受けて、「動作の結果を修飾する」場合、前項は対象物に状態変化をもたらす意味が含まれているため、元々位置変化を表す本動詞「つける」に含まれる「動作」部分の意味が抑制され、「ある程度の力」という部分の意味が副詞的意味になる。「動作の過程を修飾する」場合、前項には状態変化や位置変化を表す意味が含まず、位置変化を表す本動詞「つける」に馴染まないため、その中の「動詞」の部分が抑制され、「力的な要素」という部分が代わりに副詞的意味になると考えられる。
- (30) いずれのグループにおいても、後項「一つける」は前項の表す動作や行為が確実に実行されるというニュアンスが含まれる。

以上、複合動詞後項「一つける」に副詞的意味のあり方及びその成立要因について分析してみた。そのあり方について明らかになったが、副詞的意味の成立について、例文を挙げてその現象を説明する段階に留まり、その本質はまだ明らかにしていない。

このような複合動詞をより体系的に捉えるためにさらに掘り下げる必要がある。また、今回の検索結果から、「肉と卵の煎り付け」,「パーティーの飾り付け」,「魚の煮付け」,「赤ちゃんの寝かし付け」,「和食の盛り付け」などのような「動詞+動詞」型の複合名詞も観察される。それらは同じ形式の複合動詞とどのような関係があるのかについても考察する必要がある。これらの問題はすべて今後の課題とする。

## 〈注〉

1. Goldberg(1995)は、次のような例では、状態変化動詞が方向句と共に共起しており、状態変化と位置変化の両方を表し、「一義的経路の制約」に違反しているように思われる。

- a. He broke the walnuts into the bowl.
- b. The butcher sliced the salami onto the wax paper.
- c. Joey grated the cheese onto a serving plate.
- d. Sam shredded the papers into the garbage pail.

Goldberg 自身もこの制約に例外を認めるかのように、状態変化が方向句と共に共起できるのは、上の 4 つの例に示したように、動詞の表す行為に付随してものの移動が含意される場合であるとしている（奥野 2003 を参照）。文の場合は、そのような例外が存在しているが、複合動詞は前項動詞と後項動詞の組み合わせによって一まとまりの事象をまるごと表すものであり、複合動詞の場合は、そのような例外がないと考えられる。

## 結 論

## 第12章 終章

本章では、本論文の分析結果を整理して、研究の意義と今後の課題について述べる。

### 12.1 本論文の分析結果

#### 12.1.1 第I部の分析結果

第5章から第7章において、移動を表す個別の複合動詞後項の意味的抽象化について分析した。第8章において、移動を表す場合の複合動詞後項における意味的抽象化の方向性について論じている。

第5章では、認知意味論の理論に基づき、日本語の複合動詞「～こむ」（「押し込む」、 「思い込む」など）と中国語の複合動詞（動補式）“～进 / 入”（“跑进 / 流入”など）を対象として、それぞれの意味拡張のプロセス、意味合いの特徴を分析し、物理的内部移動と抽象的内部移動を表す時、両者は対応しているが、日本語の複合動詞「～こむ」の持っている他の意味（「程度進行」など）を中国語の動補式“～进 / 入”は持っていないため、両者は完全に対応していないこと、また、意味拡張の方法において、日本語の複合動詞「～こむ」はメタファーとメトニミーを経て、意味の拡張を実現させているが、中国語の複合動詞“～进 / 入”は、メタファーのみを通して意味を拡張させていることが明らかになった。

第6章では、文法化の視点から、上昇を表す日本語複合動詞「～あげる」（「抱き上げる」、 「買い上げる」など）と中国語複合動詞“～上”（“抱上”， “爱上”など）を取り上げ、両者の基本義から拡張義への発展プロセスと意味派生上の異同点を分析した。分析の結果として、共通点に関しては、①いずれも「動作対象の上への移動」と「動作の完成・完了」という意味を持っている。②両者とも共通する基本義「動作の上への空間的移動」から派生したと言える。③両者ともアスペクトの機能を果たしている。相違点に関しては、①「動作の完成・完了」を表す意味において、日本語複合動詞「～

あげる」は動作の終了に焦点を当てて、必ずしも結果は求めない。中国語“～上”の場合は、動作終了後の結果に着目し、好ましい結果或いは対象の変化を求める。②拡張義において、両者ともアスペクトの働きをする例が見られるが、日本語の方は動作の完成のみを表すのに対し、中国語の方は動作の完成と開始を表す。③全体から見ると、中国語複合動詞“～上”の方が意味拡張の範囲が広く、文法化の度合いもより高いと思われる。④文法化のプロセスにおいて、日本語複合動詞「～上げる」の拡張義は「空間」から「抽象的空間」への発展過程であるが、中国語複合動詞“～上”の拡張義は「空間」から「抽象的空間」・「時間」への発展過程である。⑤「～上げる」の全ての意味は空間に深く関わっているが、“～上”の意味は空間と動作の内的時間に関わっていることが指摘できる。

第7章では、複合動詞後項「～つける」（「縛り付ける」、「殴り付ける」など）の意味用法を前項動詞の特徴および前後項動詞の意味関係によって分類し、それぞれの意味間の関連性について分析した。分析の結果として、複合動詞「～つける」の意味は「付着」、「副詞的修飾」、「習慣的動作・行為」という3つに分けられ、「副詞的修飾」の意味用法を「動作の様態に焦点を当てるタイプ」と「動作の結果に焦点を当てるタイプ」の2タイプに分け、それぞれ動作・行為のどの側面を修飾するかについて論述した。また、本動詞「つける」の意味に照らし合わせて、複合動詞「～つける」後項の意味において、本動詞の意味がどのように生きているかを分析するによって、各意味はいずれも動作のある要素が「ある到達点に至る」という共通点を持っていることを明らかにした。

第8章では、7つの複合動詞「～だす」（「流れ出す」など）、「～かける」（「笑いかける」など）、「～つける」（「叱りつける」など）、「～こむ」（「編み込む」など）、「～あげる/あがる」（「持ち上げる/焼き上がる」）、「～ぬく」（「守り抜く」など）を対象とし、それぞれの意味の抽象化を各段階の違いとして捉え、各段階の方向性のあり方について考察した。考察の結果として、それぞれの複合動詞後項の意味について、「第1段階」（本動詞の意味がそのまま生きている、原義・方向）、第2段階（動詞の意味が抽象化しているが、動詞的性質を失っていない、アスペクト）、第3段階（本動詞の意味が失われて、副詞的意味になる、副詞的修飾）、第4段階（動詞の意味が感情的意味になる、感情的意味、モダリティ的）の4段階に分けて、それらの後項における意味的抽象化の方向性は「方向→アスペクト→副詞的修飾→モダリティ的（感情的意味）」という傾向が見られることを明らかにした。



### 12.1.2 第Ⅱ部の分析結果

第9章では、「副詞的修飾」(強調)を表す複合動詞「～こむ」(「信じ込む」,「困り込む」など)と「～きる」(「信じ切る」,「困り切る」など)を対象とし、それぞれの前項動詞の種類について考察した。また、その中で、用例が多く、同じ前項動詞を持っている「冷え込む」と「冷え切る」に重点を置いて、それぞれの特徴を考察した。考察の結果として、「こむ」と「きる」両方とも結合する前項動詞は「塞ぐ」,「しよげる」などのような状態変化を表すものが13語ある。「冷え込む」と「冷え切る」の特徴について、具体的な天気やものの温度を表す場合と抽象的な両国関係や夫婦関係などの場合では両方とも使える。具体的なものを主体とする場合には、「冷えきる」の範囲が広い。それに対して、抽象的なものを主体とする場合には、「冷えこむ」の範囲が広い。また、強調の意味を前提として、それぞれ活動動詞と状態変化動詞が結合されやすい。両者の意味派生については、強調を表す場合の複合動詞は前項動詞が意味の中心であり、後項の意味は前項動詞の性質によって決まる。派生関係から見ると、強調を表す場合、「～こむ」は本動詞の意味の一部のみが残って、動作・変化の過程に焦点が当てられる。それに対して、「～きる」は動作の時間軸における段階を表し、動作・変化の結果に焦点が当てられることがわかった。変化動詞と結びつく場合には、「～こむ」と「～きる」の意味が重なっているところがある。また、「～こむ」と「～きる」にそれぞれ違う性質の前項動詞が来るのはこの焦点からの影響を受けているためであると考えられる。

第10章では、「後項が前項を意味的に修飾する」場合の複合動詞「～こむ」について考察した。複合動詞「～こむ」において、「買い込む」,「老いこむ」などのように、前項動詞が動作主の動作を表し、「～こむ」全体で、動作の程度性、動作主の主観性、動作主の動作への第三者の評価など、いろいろな意味合いを有する。このような用法を「後項が前項を意味的に修飾する用法」として捉えて、「動作の程度」,「対象の量に関わるもの」,「動作の回数に関わるもの」,「動作の時間の長さに関わるもの」,「主体の不本意を表すもの」,「主体の自然・無意志的な行為を表すもの」,「主観的な(意志的)行為を表すもの」に下位分類し、それぞれの特徴を考察した。さらに、後項動詞「～こむ」の文法化は「内部移動→程度強調→動作主の主観性→第三者の評価」のように示すことができると考えられる。

第11章では、「後項が前項を副詞的に修飾する」複合動詞「～つける」を取り上げ、後項における副詞的意味のあり方について考察した。考察の結果、「後項が前項を副詞的に修飾する」ものを「動作の結果を修飾する」もの(「飾りつける」,「煮つける」

など)と「動作の過程を修飾する」もの(「殴りつける」,「睨みつける」など)に分け、前者の場合、前項に結果状態を表す意味が含まれるため、後項によってその部分が強調される。後者の場合、前項に結果状態を表す意味が含まれないため、後項は動作の過程に伴う要素を修飾する働きを持っていると考えられる。また、Goldberg(1995:82)が提案した「一義的経路の制約」及び前項動詞は位置変化という意味に馴染まないことも後項に副詞的意味が成立する要因になると考えられる。

### 12.1.3 移動を表す複合動詞後項における意味的抽象化の傾向

本論文は、移動を表す動詞を後項とするかつ生産性の高い複合動詞を研究の対象に選定し、個別の複合動詞後項のケーススタディを通して、これらの複合動詞後項における意味的抽象化に一定の傾向が見られることがわかる。段階的に捉えると、1段階から4段階まで分けられ、それぞれ「方向」、「アスペクト」、「副詞的修飾」、「モダリティ(感情的意味)」であり、意味抽象化の方向は以下の(1)のように示すことができる。

(1)

方向→アスペクト→副詞的修飾→モダリティ(感情的意味)

この方向性は、益岡(2007)によって示されている日本語の述部の文法的カテゴリーの配列順とも対応している。益岡(2007:248)は、文の意味的な階層構造に位置する主な文法要素を一般事態(用言の語幹、ヴォイス)、個別事態(アスペクト、テンス)、判断のモダリティ(真偽判断、価値判断)と発話のモダリティ(発話類型、丁寧さ、対話態度)に分けて、文法カテゴリー間の意味連鎖を「意味的ヴォイス⇒アスペクチュアリティー⇒テンポラリティー⇒判断のモダリティ⇒発話のモダリティ」のように示している。「意味的ヴォイス」「アスペクチュアリティー」「テンポラリティー」は「命題的」なものと対応し、「判断のモダリティ」「発話のモダリティ」は「感情表出的」なものと対応している。本発表で考察した後項動詞の「意志性・評価・丁寧さ」などに関わる段階は判断のモダリティと発話のモダリティに似ている要素であると考えられる。

また、この中の「副詞的修飾」を表すものを具体的に考察し、それらの内実と意味的特徴について分析した。「副詞的修飾」を表す複合動詞後項には、「動作/状態変化の程度」(「腫れ上がる」,「鍛え上げる」,「怒鳴りつける」など),「対象の量の多さ」

(「着込む」, 「買い込む」など), 「動作の回数の多さ」(「泳ぎこむ」, 「履きこむ」など), 「動作の時間の長さ」(「座り込む」, 「煮付ける」など)などの種類が挙げられる。

## 12.2 本論文の意義

### 12.2.1 複合動詞研究における意義

本論文では, 「一あげる/あがる」, 「一つける」などの移動を表す複合動詞後項を研究対象として, それらの意味的抽象化を分析した。分析の際, 複合動詞後項における意味的抽象化を段階的に捉えて, それぞれ「方向」, 「アスペクト」, 「副詞的修飾」, 「モダリティ」の4段階に分けて, 抽象化の傾向は「方向→アスペクト→副詞的修飾→モダリティ」というようになることを明らかにした。

先行研究では, 複合動詞の後項を文法化や抽象化などの視点から分析を行ったものがあるが, 全体の意味的抽象化の傾向について言及されていない。先行研究の不十分などところについて, 本動詞の意味との関連及び前項動詞との関係から抽象化のあり様を分析することによって, 従来明らかにされていない複合動詞後項の抽象化の傾向を上(1)のように導くことができた。

また, 従来の研究では, 複合動詞が「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」に2大別されているが, 本論文で移動動詞である複合動詞を対象として分析した結果, 4段階に所属させる複合動詞は「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」にまたがっていることがわかり, 複合動詞を「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」に分ける必要性が疑問視されるのではないかとと思われる。また, 陳(2013)は語彙意味論(Lexical Semantics)の立場から, 複合動詞の語形成メカニズムを V1 と V2 の語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure, LCS)の合成と考え, 合成した LCS から項構造に連結するというメカニズムを想定し, また, クオリア構造(Qualia Structure)も導入し, LCS とクオリア構造の合成で複合動詞の分類間の関係及び連続性を分析した。本論文はそれと違って, 複合動詞後項における意味的抽象化の視点から複合動詞の分類間の連続性を分析した。

さらに, 後項の意味的抽象化の4段階では, 「副詞的修飾」(後項が前項を副詞的に修飾するもの)という段階を設けて, 「副詞」との関わりから複合動詞の後項における意味的抽象化を論じることで複合動詞の研究に新たな分析視点を提示できたと考えられる。

## 12.2.2 対照研究における意義

第5章と第6章では、移動を表す日本語複合動詞と中国語複合動詞の対照研究を行った。後項の意味は移動を表す基本義からどのように抽象化したのかについて考察し、両者の意味抽象化における異同について分析した。両者の対応している部分と対応していない部分及びその理由について述べた。日本語複合動詞「～こむ」と中国語複合動詞“～进 / 入”について、物理的内部移動と抽象的内部移動を表す場合は両者が対応している。「程度進行」を表す場合は対応していない。また、両者の意味抽象化（意味拡張）の方法が違うことが明らかにした。上昇を表す日本語複合動詞「～あがる / あげる」と中国語複合動詞“～上”について、それぞれの意味派生のプロセスを考察した。文法化という視点から日本語複合動詞を中国語複合動詞と対照しながらそれぞれの意味が抽象化したプロセスを分析するのは対照研究に一つのヒントを与えることができると思う。

## 12.3 今後の課題

### 12.3.1 複合動詞研究における課題

本論文は移動を表す複合動詞後項における意味的抽象化の傾向について分析したが、以下のような課題が残っていると考えられる。

まず、複合動詞後項の意味的抽象化を考察する際、4段階に分ける作業はその判断が難しい場合がある。また、同じ複合動詞でも多義の場合があり、それぞれどのように扱うべきかについて考えなければならない。例えば、「—つける」の場合、「乗り付ける」は「彼は高級車で会社に乗り付けた。」（車に乗ったまま、ある場所に付ける）と「私は、船には乗り付けないので、すぐに船酔いする。」（乗るのに慣れている）（例文は国立国語研究所によって開発された複合動詞レキシコンから検索したもの）というように、二つの意味を持っている。この場合は、「乗り付ける」は第1段階の「方向」と第2段階の「アスペクト」の両方の意味を表す可能性がある。このような多義性の複合動詞をどのように区別して、どのように分類すべきかは明確な基準が必要である。

次に、複合動詞後項の意味的抽象化を4段階に分けているが、それぞれの後項には、2段階しか持たないもの、3段階を持つもの、4段階を持つもの、それぞればらつきがある。なぜそのような違いがあるのかについて今後さらなる考察が必要である。

最後に、複合動詞と同形の複合名詞との関連性について考察対象に入れて考えなければならない。例えば、「思い込み」→「思い込む」、「立ち読み」→「\*立ち読む ○立ち読みする」など、複合動詞形を持っているものと持っていないものの違いは何だろうか。それについても興味深い問題である。

以上のような課題は今後の研究の中で取り組んでいきたい。

### 12.3.2 対照研究における課題

本論文は、内部移動、上昇を表す日本語複合動詞と中国語複合動詞の対照研究を行った。日本語複合動詞と中国語複合動詞には、対応しているものと対応していないもの、いろいろなタイプが見られる。後項における意味的抽象化という視点からはどこまで言えるのか、それぞれの全体像をどれくらい分析できるのかについて、今後さらに多くの例を集めて考察する必要があると思われる。また、中国語だけではなく、英語など他の言語も視野に入れて日本語と照らし合わせてより深く考察するのも今後の課題として残っている。

### 12.3.3 文法化における課題

まず、本論文は、「文法化」という概念と関連して、複合動詞後項における意味的抽象化について考察した。文法化という方法を取る際に、通時的視点から行うのが普通であるが、本論文では、通時的ではなく、共時的視点から分析を行った。しかし、具体的に考察する時に、共時だけの視点からはうまく説明できていない場合がある。例えば、複合動詞「～込む」の後項を考察する時、本動詞「込む」には、「電車がこんでいる」、「手のこんだ細工」のように、「一つ所に多くの人や物が集まっていっぱいになる。混雑する」という意味を表している。それに対して、複合動詞後項として使う場合、「部屋の中へ飛び込む」、「風邪が吹き込む」などのように、後項「—こむ」は、「混雑する」という意味ではなく、「ある場所の内部に入る」という意味を表している。複合動詞後項として使われる場合の意味と本動詞の表す意味が明らかに違うと言える。これは単に現代語を見ただけでは不十分であって、歴史的な使い方なども考慮に入れて考察しないと十分に説明できないと考えられる。

また、本論文は移動を表す動詞を絞って複合動詞後項の意味的抽象化について考察したが、他の複合動詞後項の意味的抽象化について触れていない。同じような方法で研究対象を拡大して、他の複合動詞後項を分析することが必要である。移動を表す複

合動詞後項だけではなく、先行研究では統語的複合動詞に分類される「一直す」（「書き直す」、「飲み直す」）などのようなものにも適用できたら幸いだと筆者は考えている。

## 参考文献

- 青木博史 (2007) 「近代語における述部の構造変化と文法化」 青木博史 (編) 『日本語の構造変化と文法化』 pp. 205-219, ひつじ書房
- 青木博史 (2012) 「クル型複合動詞の史的展開—歴史的観点から見た統語的複合動詞—」 高山善行ほか (編) 『日本語文法史研究』 ひつじ書房
- 青木博史 (2013) 「複合動詞の歴史的変化」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端』 pp. 215-241, ひつじ書房
- 秋元実治 (2002) 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房
- 浅尾仁彦 (2007) 「意味の重ね合わせとしての日本語複合動詞」 『京都大学言語学研究』 26, pp. 59-75, 京都大学大学院文学研究科言語学研究室
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』 大修館書店
- 石井正彦 (1983a) 「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」 『日本語学』 2-8, pp. 79-90, 明治書院
- 石井正彦 (1983b) 「現代語複合動詞の語構造分析—〈動作〉・〈変化〉の観点から—」 『国語学研究』 23, pp. 55-44, 東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会
- 石井正彦 (1988) 「接辞化の一類型—複合動詞後項の補助動詞化—」 『方言研究年報』 30, pp. 281-296, 広島大学方言研究会
- 石井正彦 (1992) 「複合動詞の結果性と複合動詞」 『国語学研究』 31, pp. 88-76, 東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会
- 石井正彦 (2001) 「複合動詞の語構造分類」 『国語語彙史の研究』 20, pp. 316-304, 和泉書院
- 石井正彦 (2007) 『現代日本語の複合語形成論』 ひつじ書房
- 井上和子 (1976a) 『変形文法と日本語上—統語構造を中心に—』 大修館書店
- 井上和子 (1976b) 『変形文法と日本語下—意味解釈を中心に—』 大修館書店
- 今井忍 (1993) 「複合動詞後項の多義性に対する認知意味論によるアプローチ: 「～出す」の起動の意味を中心に」 『言語学研究』 12, pp. 1-24, 京都大学言語学研究会
- 井本亮 (2001) 「位置変化動詞の意味について—副詞句の解釈との対応関係と語彙概

- 念構造一』『日本語文法』1-1, pp. 177-197, 日本語文法学会
- 井本亮 (2002) 「複合動詞「V-すぎる」の意味解釈について」『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要』8, pp. 71-92, 神田外語大学
- 王軼群 (2009) 『空間表現の日中対照研究』くろしお出版
- 王秀英 (2012) 「日本語の複合動詞「～こむ」類と中国語の複合動詞“～进/入”類との対照研究—認知意味論からのアプローチ—」『言語科学論集』16, pp. 73-84, 東北大学大学院文学科言語科学専攻
- 王秀英 (2014a) 「上昇を表す複合動詞の日中対照研究—「～上げる」と「～上(shang)」を対象として—」『文化』77 (3・4), pp. 53-73, 東北大学文学会
- 王秀英 (2014b) 「複合動詞の後項が前項を意味的に修飾する場合について—「～こむ」を対象として—」『国語学研究』53, pp. 16-29, 東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会
- 王秀英 (2014c) 「強調を表す複合動詞後項の成立要因について—「～こむ」と「～きる」を対象として—」『言語科学論集』18, pp. 25-38, 東北大学大学院文学科言語科学専攻
- 王秀英 (2015) 「複合動詞「～つける」の後項の意味について—本動詞との関連から—」『国語学研究』54, pp. 182-195, 東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会
- 王秀英 (2016) 「複合動詞後項における意味的抽象化」『言語科学論集』20, pp. 77-89, 東北大学大学院文学科言語科学専攻
- 大鹿薫久 (2004) 「モダリティを文法史的に見る」北原保雄監修・尾上圭介編『朝倉日本語講座 6 文法 II』第8章
- 大鹿薫久 (2005) 「叙法の組織と「のだ」文・規定文」『日本語学会 2005 年度春季大会予稿集』
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』東京大学出版会
- 岡部憲幸 (2013) 「モダリティに関する覚え書き」『語文論叢』(28) pp. 96-75, 千葉大学文学部日本文化学会
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一の段階—」『国語国文』8, 宮城教育大学 (奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』pp. 85-104, むぎ書房 に再録)
- 奥野浩子 (2003) 「結果構文に対する「非動者制約」と構文融合」『人文社会論叢 人文科学篇』9, pp. 159-170, 弘前大学機関リポジトリ
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』くろしお出版



- 小野尚之 (2004) 「移動と変化の言語表現：認知類型論の視点から」, 佐藤滋・堀江薫・中村渉 (編) 『対照言語学の新展開』 pp. 3-26, ひつじ書房
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』 くろしお出版
- 小野尚之 (2008) 「クオリア構造入門」, 影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム』 4, pp. 265-290, ひつじ書房
- 小野尚之 (編) (2009) 『結果構文のタイポロジー』 ひつじ書房
- 甲斐朋子 (1999) 「複合動詞「～こむ」の程度深化の用法」『ポリグロシア』 2, pp. 1-8, 立命館アジア太平洋大学
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点—』 くろしお出版
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』 くろしお出版
- 影山太郎 (2000) 「自他交替の意味的メカニズム」, 丸田忠雄・須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』 pp. 33-70, ひつじ書房
- 影山太郎 (2001) 「結果構文」影山太郎 (編) 『日英対照動詞の意味と構文』, pp. 154-181, 大修館書店
- 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』 大修館書店
- 影山太郎 (2002) 「概念構造の拡充パターンと有界性」『日本語文法』 2-2, pp. 29-45, 日本語文法学会
- 影山太郎 (2005) 「結果構文・結果複合動詞の産出と解釈」, 大石強・西原哲雄・豊島庸二 (編) 『現代形態論の潮流』 pp. 115-134, くろしお出版
- 影山太郎 (2008) 「語彙概念構造 (LCS) 入門」『レキシコンフォーラム』 4, pp. 239-264, ひつじ書房
- 影山太郎 (2013) 「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—」影山太郎編 (2013), pp. 3-46
- 影山太郎編 (2013) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』 ひつじ書房
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』 研究社
- 景山弘幸 (1996) 「有界性と比喩的拡張」『札幌大学女子短期大学部紀要』 28, pp. 45-56, 札幌大学女子短期大学部
- 何志明 (2010) 『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の観点から—』 笠間書院
- 川野靖子 (2001) 「ヲ格句を伴う移動動詞句について—アスペクト的観点からの動詞句分類における位置づけ—」『日本語と日本文学』 33, pp. 25-38
- 川野靖子 (2006) 「現代日本語における位置変化構文と状態変化構文の交替現象—格

- 成分の対応の仕方」『日本語の研究』2(1), pp. 32-47
- 川野靖子 (2009) 「壁塗り代換を起こす動詞と起こさない動詞—交替の可否を決定する意味階層の存在—」『日本語の研究』5-4, 47-61, 日本語学会
- 菊田千春 (2008) 「複合動詞「V かかる」「V かける」の文法化—構文の成立とその拡張」『同志社大学英語英文学研究』(81・82), pp. 115-162, 同志社大学人文学会
- 岸本秀樹 (2001) 「壁塗り構文」影山太郎編『日英対照動詞の意味と構文』大修館書店
- 北原博雄 (2000) 「限界性というアスペクチュアルな性質—動詞句についての意味論と統語論—」『日本語学』19, pp.72-75
- 金光成 (2010) 「複合動詞の意味拡張とその認知的動機付け—「V+こむ」を事例に—」『言語科学論集』16, pp. 25-42, 京都大学大学院人間・環境学研究科言語科学講座編
- 金慧蓮 (2009) 〈从认知角度看复合动词「-こむ」的句法及语义特点—与汉语趋向动词“-进”比较〉《日语学习与研究》3, pp. 59-65, 北京对外贸易学院
- 金水敏 (2004) 「日本語の敬語の歴史と文法化」『月刊言語』33 (4), 大修館書店
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』日本言語学会 (金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 pp. 5-26, むぎ書房 に再録)
- 金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』 むぎ書房
- 工藤浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』 pp. 176-198. 明治書院
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 国広哲弥 (1970) 『意味の諸相』三省堂
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』大修館書店
- 国広哲弥 (1985) 「認知と言語表現」『言語研究』88, pp. 1-19, 日本言語学会
- 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』大修館書店
- 国広哲弥 (2000) 「日本語動詞の多義体系 (4)」『人文学研究所報』33, pp. 63-72, 神奈川大学
- 久野暉 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店
- 黄其正 (2004) 『現代日本語の接尾辞研究』溪水社
- 黄利恵子 (2002) 「現代中国語における“V+上+L”構文: “上”の終結性をめぐって」『多元文化』2, pp. 107-117, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 斎藤倫明 (1984) 「複合動詞構成要素の意味—単独用法との比較を通して—」『国語語彙史の研究』5, pp. 399-414, 和泉書院

- 斎藤倫明 (1985)「複合動詞後項の接辞化―「返す」の場合を対象として―」『国語学』  
140, pp. 132-120, 日本語学会
- 斎藤倫明 (1992)『現代日本語の語構成論的研究―語における形と意味―』ひつじ書  
房
- 斎藤倫明 (2004)『語彙論的語構成論』ひつじ書房
- 斎藤倫明 (2005)「語形成と選択制限―文法と語彙の間―」『日本語文法』5-1,  
pp. 121-137, 日本語文法学会
- 斎藤倫明・石井正彦 (編) (1997)『語構成』ひつじ書房
- 左咏梅 (2008)「上」と「下」のイメージ・スキーマに関する考察」《理論言語学研  
究》2, pp. 268-276
- 阪倉篤義 (1957)「語構成序説」『日本文法講座 1 総論』明治書院 (斎藤倫明・石井  
正彦 (編) (1997)『語構成』pp. 7-23, ひつじ書房 に再録)
- 阪倉篤義 (1966)「接尾辞の位置」『国語国文』53(5), pp. 197-209, 京都帝国大学国  
文学会編
- 崎田智子 (2005)「伝達動詞 go の意味拡張―メタファーとメトニミーの素点から」山  
梨正明他 (編)『認知言語学論考』(5) pp. 145-177, ひつじ書房
- 佐野由紀子 (1998)「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3, pp. 7-22
- 佐野由紀子 (2006)「動きに関わる量について―量的程度副詞と動詞との共起関係か  
ら―」『高知大國文』39, pp. 79-88
- 佐藤信夫 (1992)『レトリック感覚』講談社
- 志賀里美 (2014)「複合動詞「～切る」における文法化の過程についての一試案」『学  
習院大学人文科学論集』23, pp. 41-65, 学習院大学大学院人文科学研究科
- 柴田武 (編) (1976)『ことばの意味 辞書に書いていないこと』平凡社
- ジョージ・レイコフ (著), 池上嘉彦・河上誓作 (訳) (1993)『認知意味論』(池上嘉  
彦・河上誓作訳) 紀伊国屋書店
- 城田俊 (1998)『日本語形態論』ひつじ書房
- 申亜敏 (2009)「中国語結果複合動詞の意味と構造―日本語の複合動詞・英語の結果  
構文との対照及び類型的視点から―」東京外国語大学博士学位論文
- 須賀一好 (1983)「現代語における複合動詞自・他の形式について」『静岡女子大学研  
究紀要』17, pp. 340-328, 静岡女子大学
- 須賀一好・早津恵美子 (編) (1995)『動詞の自他』ひつじ書房
- 杉村泰 (2008)「複合動詞「一切る」の意味について」『言語文化研究叢書』7.名古屋  
大学大学院国際言語文化研究科

- 鈴木智美（2008）「事態に対する話者の期待と感情・評価的意味—理想化認知モデルの観点からの考察」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』34, pp. 27-42, 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 関一雄（1977）『国語複合動詞の研究』笠間書院
- 武部良明（1953）「複合動詞における補助動詞的要素について」『言語民俗論叢：金田一博士古稀記念』金田一博士古稀記念論文集刊行会（編），pp. 461-476, 三省堂出版
- 田中茂範・松本曜（1997）『空間と移動の表現』研究社
- 田辺和子（1996）「日本語の複合動詞の後項動詞にみる文法化」『日本女子大学紀要・文学部』45, pp. 1-16, 日本女子大学文学部
- 張志凌（2012）「後項動詞「～こむ」の意味について—「入る」と「入りこむ」の考察を中心に」『言語・地域文化研究』18, pp. 69-81. 東京外国語大学大学院
- 陳奕廷・松本曜（2018）『日本語語彙的複合動詞の意味と体系：コンストラクション形態論とフレーム意味論』ひつじ書房
- 陳劭憚（2013）「語彙的複合動詞と統語的複合動詞の連続性について—「～出す」を対象として—」影山太郎編（2013），pp. 47-74
- 陳劭憚（2013）『現代日本語の複合動詞の研究』東北大学大学院文学研究科言語科学専攻
- 陳月吾・王育潔（2011）「複合動詞後項文法化の日中比較—「V－上げる」と「V－上」を中心に—」『福井工業大学研究紀要』41, pp. 548-553
- 陳月吾・王潔（2012）「日本語における複合動詞の意味拡張に関する考察—後項動詞「～つける」を中心に—」『福井工業大学研究紀要』42, pp. 732-741
- 陳月吾・王潔（2013）「日中複合動詞脱範疇化の比較研究—「V-V」の副詞化を中心に—」『福井工業大学研究紀要』43, pp. 489-500
- 陳光明（2003）《現代漢語動相標誌的研究》博士論文, pp. 88-96, 国立清華大学語言研究所
- 塚本秀樹（2012）『形態論と統語論の相互作用—日本語と朝鮮語の対照言語学的研究』ひつじ書房
- 辻幸夫（2003）『認知言語学への招待』大修館書店
- 角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 郑文全（2007）〈复合动词「込む」意义浅析〉《日语知识》1, pp. 10-11, 大连外国语学院
- 寺村秀夫（1969）「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト—その一—」『日本語・

- 日本文化』1, pp. 32-48, 大阪外国語大学
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 くろしお出版
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版
- 外崎淑子 (2005) 『日本語述語の統語構造と語形成』 研究社
- 長嶋善郎 (1976) 「複合動詞の構造」『日本語講座第4巻 日本語の語彙と表現』 大修館書店 (斎藤倫明・石井正彦 (編) 1997 『語構成』 pp. 213-231, ひつじ書房 に再録)
- 中村その子 (1998) 「日本語複合動詞の意味形成と特性: 言語認知の立場から」『経営・情報研究: 多摩大学研究紀要』2, pp. 65-155, 多摩大学
- 中村捷 (1999) 『意味論—動的意味論—』 開拓社
- 中村芳久 (編) (2004) 『認知文法論 II』 大修館書店
- 新沼史和 (2010) 「複合動詞「一切る」に関する統語論的分析」『高知学園短期大学紀要』40, pp. 23-32
- 新美和昭・宇津野登久子・山浦洋一 (1987) 『複合動詞』 荒竹出版
- 西尾寅弥 (1988) 『現代語彙の研究』 明治書院
- 西山国雄・小川芳樹 (2013) 「複合動詞における助動詞化と無他動性」遠藤喜雄 (編) 『世界に向けた日本語研究』 開拓社
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 仁田義雄 (1993) 『日本の格をめぐって』 くろしお出版
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説』 くろしお出版
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』 くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』 くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (編) (2009) 『現代日本語文法2 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス』 日本語記述文法研究会, くろしお出版
- 野田大志 (2008) 「複合動詞の構文的意味拡張に関する一考察」『日本認知言語学会論文集』8, pp. 97-107, 日本認知言語学会
- 野田大志 (2009a) 「現代日本語における複合動詞の意味形成—構文理論による分析—」『北研学刊』5, pp. 173-184, 白帝社
- 野田大志 (2009b) 「構文的多義ネットワークにおける並列型及び補文型複合動詞の位置づけ」『日本語認知言語学会論文集』9, pp. 143-153, 日本認知言語学会
- 野村剛史 (2003) 「モダリティ形式の分類」『国語学』54, pp. 17-31
- 野村剛史 (2004) 「述語の形態と意味」北原保雄監修・尾上圭介編『朝倉日本語講座

6 文法 II』第3章

- 野村雅昭・石井正彦（1987）『複合動詞資料集』国立国語研究所
- 長谷部裕子（2013）「複合動詞と2種類のアスペクト」『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』 pp. 75-108
- 日野資成（2001）『形式語の研究—文法化の理論と応用—』九州大学出版会
- 日野資成（2002）「複合動詞「一出す」の分類—統語論的・意味論的方法を使って—」『日本研究』25, pp. 135-147, 国際日本文化研究センター
- 姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 百留康晴（2002）「複合動詞後項「一出す」における意味の歴史的変遷」,『文化』66（1・2）, pp. 17-33, 東北大学文学会
- 深田智・仲本康一郎（2008）『概念化と意味の世界』研究社
- 北京语言学院语言教学研究所（1992）《现代汉语补语研究资料》北京语言学院出版
- 益岡隆志（1987）『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお出版
- 松田文子（2001）「コア図式を用いた複合動詞後項「～こむ」の認知意味論的説明」『日本語教育』111, pp. 16-25, 日本語教育学会
- 松田文子（2004）『日本語複合動詞の習得研究』ひつじ書房
- 松本曜（1998）「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114, pp. 37-83, 三省堂
- 松本曜（2003）『認知意味論』大修館書店
- 松本曜（2009）「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」『語彙の意味と文法』 pp. 175-194, くろしお出版
- 待場裕子（1992）「日中の複合動詞の対照研究（三）—中国語の「動詞・形容詞＋派生義を表す方向補語構造の場合（上）」『流通科学大学論集—人文・自然編』4, pp. 47-60
- 待場裕子（1993）「日中の複合動詞の対照研究（四）—中国語の「動詞・形容詞＋派生義を表す方向補語構造の場合（下）」『流通科学大学論集—人文・自然編』5, pp. 45-69
- 南場尚子（1991）「複合動詞の位置づけ」『同志社国文学』34, pp. 72-94, 同志社大学国文学部
- 南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店

- 三原健一 (2000) 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8, pp. 54-75,  
国立国語研究所
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』松柏社
- 宮城信 (2016) 「完全性を表す表現と副詞的修飾関係」『日本語文法』16 (1), pp. 3-19,  
日本語文法学会
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110,  
pp. 143-168, 日本言語学会
- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」『日本語の研究』1-3, pp. 61-76, 日本語学会
- 三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェース』くろしお出版
- 宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』むぎ書房
- 宮下博幸 (2004) 「文法化研究とは何か—言語変化の謎を解く—」『月刊言語』33, 大修館書店
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 望月圭子 (1990) 「日・中両語の結果を表す複合動詞」『東京外国語大学論集』40,  
pp. 13-27, 東京外国語大学
- 睦俊秀 (2012) 「「程度進行」の意味をもつ複合動詞「V1+こむ」の意味と構造に関する考察」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』8, pp. 185-208
- 森田良行 (1978) 「日本語の複合動詞について」『講座 日本語教育』14, pp. 69-86,  
早稲田大学語学教育研究所
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山卓郎 (1988) 「形態論」『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 守屋広則 (1995) 『やさしくくわしい中国語文法の基礎』東方書店
- 李良林 (2004) 「「～つける」複合動詞の意味用法—連語との関わりから—」『国語学研究』43, pp. 232-244, 東北大学大学院文学研究科『国語学研究』刊行会
- 劉月華・潘文娉 (著), 相原茂 (翻訳) (1996) 『現代中国語文法総覧』くろしお出版
- 矢澤真人 (2000) 「副詞的修飾の諸相」『文の骨格』pp. 189-233, 岩波書店
- 山田進・菊地康人・靱山洋介 (編) (2000) 『日本語意味と文法の風景—国広哲弥教授  
古稀記念論文集—』ひつじ書房
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』くろしお出版
- 山梨正明 (2009) 『認知構文論—構文のゲシュタルト性』大修館書店
- 山本清隆 (1983) 「複合動詞の構造とシンタクス」『ソフトウェア文書のための日本語  
処理の研究—5』pp. 315-380, 情報処理振興事業協会

- 山本清隆 (1984) 「複合動詞の格支配」『都大論究』12, pp. 32-49, 東京都立大学国語国文学会
- 由本陽子 (1996) 「語形成と語彙概念構造—日本語の「動詞+動詞」の複合語形成について—」, 奥田博之教授退官記念論文集刊行会 (編)『言語と文化の諸相—奥田博之教授退官記念論文集—』pp. 105-118, 英宝社
- 由本陽子 (2005a)『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』ひつじ書房
- 由本陽子 (2005b) 「「V+かえる」と「V+直す」の意味と統語」『日本語文法』5-2, pp. 110-127, 日本語文法学会
- 由本陽子 (2008) 「複合動詞における項の具現—統語的複合と語彙的複合の差異—」, 影山太郎 (編)『レキシコンフォーラム』4, pp. 1-30, ひつじ書房
- 由本陽子 (2013) 「語彙的複合動詞の生産性と2つの動詞の意味関係」影山太郎 (編)『複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて』pp. 109-142, ひつじ書房
- 由本陽子・今井志奈子 (2002) 「「V+尽くす」複合語について—統語的か, 語彙的か—」『言語文化共同研究プロジェクト 2001 自然言語への理論的アプローチ—統語論編—』pp. 77-90, 大阪大学言語文化研究科
- 由本陽子・岸本秀樹 (編) (2009)『語彙の意味と文法』くろしお出版
- 吉村武時 (1976) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語のアスペクト』むぎ書房
- 米山三明 (2009)『意味論から見る英語の構造—移動と状態変化の表現をめぐって—』開拓社
- P. J. ホッパー E. C. トラウゴット (著), 日野資成 (訳) (2003)『文法化』九州大学出版会
- Goldberg, Adele E. (1995) *Construction: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. MIT Press.
- Johnson, Mark (1987) *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. MIT Press.
- Shibatani Masayoshi (2008) Grammaticalization of Motion Verbs. Bjarke Frellesvig & Shibatani Masayoshi & John Charles Smith (eds.) (2008) *Current Issues in the History and Structure of Japanese*, pp. 107-133, Kuroshio Publishers



- Tagashira Yoshiko (1978) *Characterization of Japanese compound verbs*,  
University of Chicago.
- Traugott, Elizabeth C. (1982) From propositional to textual and expressive  
meanings: some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. Winfred  
P. Lehmann & Yakov Malkiel (eds.) (1982) *Perspectives on historical  
linguistics*. pp.245-271, Amsterdam: Benjamins.
- Traugott, E. C. and R. B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*, Cambridge  
University press.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics and Philosophy*, Cornell University Press.

#### 【辞書類】

- 『岩波国語辞典』(第7版)(2009) 岩波書店
- 『岩波中国語辞典』簡体字版(1990) 倉石武四郎(著) 岩波書店
- 『オックスフォード言語学辞典』(2009) Peter Hugoe Matthews(著), 中島平三, 瀬  
田幸人(監訳) 朝倉書店
- 『最新理論言語学用語事典』(2017) 畠山雄二(編) 朝倉書店
- 『三省堂 スーパー大辞林』(1999) 三省堂
- 『ドイツ語言語学辞典』(1994) 紀伊国屋書店
- 『中国語大辞典』(1993) 大東文化大学中国語大辞典編纂室(編) 角川書店
- 『中日・日中辞典』統合版(1999) 小学館
- 『日中対訳コーパス』(2003) 北京日本語研究センター
- 『日本国語大辞典』第二版(2001) 小学館
- 『日本語文法事典』(2014) 日本文法学会(編) 大修館書店
- 『明解言語学辞典』(2015) 斎藤純男, 田口善久, 西村義樹(編) 三省堂

## 用例出典

- (1) 現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)  
[http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search\\_form](http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search_form)
- (2) 朝日新聞オンライン版無料記事  
<http://www.asahi.com>
- (3) 中日対訳コーパス  
第1版, 北京大学日本学研究センター
- (4) 北京大学中国語言語学研究センターコーパス (CCL)
- (5) 『現代中国語文法総覧』(1996) 劉月華・潘文娛 (著), 相原茂 (翻訳) くろ  
しお出版
- (6) 複合動詞レキシコン  
<https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon/>
- (7) [www.goo.ne.jp](http://www.goo.ne.jp)

## あとがき

本論文は、複合動詞後項における意味的抽象化について論述したものです。執筆にあたって、多くの方々からいろいろな意見やコメントをいただきました。ここで感謝を申し上げます。

修士課程の時、日本語翻訳をテーマとして研究を進めてきました。いろいろな日本語の文学作品やテキストに触れた際、日本語複合動詞の理解や翻訳がなかなか思うようにいかなかったことが多く、ぜひ研究してみたいという気持ちを強くしました。そして、斎藤先生の門下の研究生に申し込み、留学に至ったのです。初めて来日した時は、ちょうど東日本大震災後間もない頃で、まだ復興作業を行っているところもありました。そのような背景の中、大学の諸先生方をはじめ多くの皆様が思いやりを持って親切に接してくださいました。深い感謝の気持ちを抱いて研究をスタートしました。

複合動詞は古くから様々な視点から研究がなされてきました。膨大な先行研究によって積み重ねられた研究成果があり、今振り返ってみると、いろいろな試行錯誤を重ねて、このテーマにたどり着くまでかなり時間がかかりました。指導教授の斎藤倫明先生と小林隆先生から貴重なご教示やご意見をいただきました。斎藤先生には長い間大変お世話になりました。学問的な面においては、いつも厳しくご指導いただき、研究姿勢から論述の細部までいろいろと教えていただきました。精神面においては、いつも温かい励ましの言葉をいただき上に、困ったことがあった時にはいつも助けていただいて、わたくしの長年の留學生活の大きな精神的支えとなっております。感謝の気持ちは本当に言葉で言い尽くせません。本当にありがとうございました。小林隆先生はいつも親切にご教示をいただき、特に論文の最後の仕上げの段階において時間を割いて丁寧にコメントをつけるなど、温かく激励してくださいましたので、論文の完成まで漕ぎつけることができました。この場を借りて、心より厚くお礼を申し上げます。

院演習や各種発表会の際には、研究室の大木一夫先生、甲田直美先生、学会の方々、ほかの研究室の皆様から貴重なご意見やご助言をいただきまして、筆者の研究の進捗に大きな原動力となっています。心より感謝を申し上げます。

また、学校の授業や集中講義などで、国語学研究室の先輩たち、同級生たち、後輩たちに有益なコメントをいただきました。この温かい雰囲気溢れた研究室で、素晴らしい先生たちに恵まれ、研究室の皆様と一緒に研究の面白さを体験しながら成長す

ることができ、とても幸せだと思います。

育児をしながらの研究生活で、また途中で二人目の子供の出産もあって、厳しい状況が続きましたが、皆様からお力を貸していただいたおかげで、論文の完成まで諦めずに頑張ることができました。本当にありがとうございました。このご恩を胸に刻んで、今後の日本語研究と仕事に専念し、頑張っていこうと思っております。もちろん、本論文に不備があれば、その責任はすべて筆者にあります。

最後に、困ったことがあった時、いつも助けてくれ、支え続けてくれた家族に感謝の意を表したいです。本当にありがとうございました。

2020 年 5 月      東京にて  
王 秀英